



安南筆記

九

九

增 5
494
9













































のまのよるとけりてきりしきり地獄のまといするゆは  
 ちと割しとらふあり○負太玄披二事申するの経  
 見ぬといやういふにぬきぬきと角なるおとわてし  
 あり又十界系華道のねねおとらるるのいやけり  
 柳のまといのよ白く角なるおとわてしとありし紙冠を  
 ひきぬきかきしとらるるしとらるる後とぬきぬきとら  
 白くを用うるるしとらるるしとらるるぬきぬきの  
 のまかしの代にけりし後とらるるしとらるるしとらるるの軟  
 ○シノタメテス、ノラハルオノウラ、ヒタヒエホシノホシケルカサ  
 一宿衣 衣冠ノ支シ 禁秘抄上御膳事篇壺井氏傍注見  
 ○是ヨリ以下源氏物語ヌキキナリ

一圓縁 紙虫のまじりてくえのまかいらるるおとらるるゆは  
 ろりりりり細きおとらるるぬきぬき今このまじりてぬき  
 一まんごう 名義集 湍茶羅此の翻壇 曼茶羅同  
 一仏前の薰ぬ不用蜜 同巻くえりぬきしとらるる名香  
 ちとらるるしとらるるぬきぬきしとらるる細蜂蜜 薰ぬぬきぬきの  
 入と蜜を除くはちとらるるしとらるる○負太玄三の蜜虫  
 荷葉よと云々キモノハ 蜂密ニテ子ハ 仏前ニタケニハ 蜂ハ生  
 物ナルユハ 蜜ヲ用テサレバ 亦ウハトカハキタルナリ  
 一唐紙 同巻かの紙のろろそ朝ののまじりしとらるる  
 しとらるるのまじりてしとらるるぬきぬきしとらるる  
 するもまじり○負太玄かのまじりも邊紙に今もたらししとらるる



















一 柳橋 さらしらの色 目いづくーうしめしーさらしめられて

こせいの目いさるの 共養 してゆらゆらうらうらとせしめり アガリノモトヨリ 生治ノ中ニモ

君(オウ) リ(シ)

一 尻 同色。昔よりけりけりたるうらうらとせしめしにけり

のちいさうらうらとせしめしにけりけりけりけりけりけりけり

いふ海女のゆよゆよのゆよゆよとせしめしにけりけり

やうし古の娘と人の刺穿とをせしめしにけり

一 同色 言いつくしきまらちいさなれが草のゆよゆよとせし

らるゆよとせしけりけり 白尻 娘のゆよゆよとせし

けいけいけいけいの中れとせしめしにけりけりけりけり

けいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい

一 してありーまーい 娘のゆよゆよとせし

一 沙岸人より一やとゆらゆらとせしにけりけりけり

まると白のゆよゆよの中れとせしにけりけりけり

まるとゆよゆよとせしにけりけりけりけりけり

まるとゆよゆよとせしにけりけりけりけりけり

ゆよゆよとせしにけり

一 妊婦を帯 ちとちのちとせしにけりけりけり

のちとちとせしにけりけりけりけりけり

懐妊の若きこゝ又下文よりのちとせしにけりけり

りけりけりけりけりけりけりけりけりけり

けりけりけりけりけりけりけりけりけり



懐妊の御こと多々言のまに薫土ののふもあはれりといふも  
多終々言のほふ尺ものしりしは彼のおはさるる常りしハ  
おしりいんさまで昔の夜の上より常きううづりされハ介  
しりえゆりあそむらひに

一侍の御苗やより本のもさあひのべらうちる古来のうづり  
て名さうらのふあひ白雲のうづりし古来のまうちあひのうづり  
あやうののあとの御あはれを侍うらひといふこと  
白雲のうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
せりぬとのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり

一ふらうのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
細 除目のほれをうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり

終らるや け種石のうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
しあひ除目のうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
るあひのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり

一ふらうのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
ニシ 饑餓のうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
熱のうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
言のうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり

し入る志のうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
うづりあひのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり  
あひのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづりあひのうづり

一四月節分やより本のおはれりあひのうづりあひのうづりあひのうづり







一 屏風にさしつゝりまを、  
あをいぬの

一 衣の字やカとつゝり、  
おのちの

一 衣の衣にしゆゆあおと、  
おのちの

一 七やうもようい音お、  
おのちの

一 一真んくも再巻き、  
おのちの

一 五真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの

一 一真んくくつと、  
おのちの



之口傳也... 湖月抄云云

一雅亮裝束抄ノ作者雅亮治承年中ノ人也山槐記治承三年二月廿日東宮御百日ノ条云云出前伊賀守雅亮書云紅濤様萌黄表着 蕪苧襲 紅方衣 白腰裳ト見タリ

一高良明神 在干路後園 又在石清水末社 白井宗因神社 敬蒙曰上高良 註式看書云石清水別當澄清曰上高良武内也 下高良王岳也 口私云註式上二十二社註式上云書

十一 神社格 蒙引書十一

梅景紀之統孝元天皇妃伊香我色經命生彦太忍信 命是武内宿禰之祖父也景行天皇三年屋主忍武雄 心命詣紀伊國居河備柏原娶紀直遠祖荒道彦之女 影媛生武内宿禰由是見之 孝元子彦太又信其子武

雄心其子武内事元六君 景行成務仲家 神功應神仁德 其壽殆三百十余 歲其事迹詳于書記 蓋有武功之人也

下高良 在外院南 師時記曰江師曰高良大明神者武内大臣也非也高良者藤大臣連保也神号曰高良玉壘命以 干滿兩顆令奉行之故 奉号玉壘云

按神社考以高良為武内宿禰又引一統為玉壘以上 下二神為一別有據歟

一眉拂 婦人養草云わろ老女の予に物傳へり大内をい 眉よりよりしりし地よりいつかと子胃の眉より右より 作ふべし女房はちり作ふしと云右の眉を日月とと くとん八月のさりとんはちりしりしを女房とす























所言四月朔夜太陽虧之事

一 姓氏錄曰古記曰鎌足天智天皇天智天皇諡天智

八年賜藤原氏男正一位贈大政大臣不比等天淳中原又方羸

真人天皇諡天武十三年賜朝臣姓○貞女云藤原ヲハ氏ト云

朝臣ハ姓ト云此外押知ハ

一 紀朝臣 姓氏錄曰紀朝臣石川朝臣同氏屋ハ全ハ忍ハ雄建緒ハ

余ハ後也日本紀合ハ

一 日奉連 姓氏錄曰高ハ鬼ハ余ハ之後也ヒニツリ

一 八多朝臣 同云石川朝臣同祖武内宿称余ハ之後也日本

紀合又云平郡朝臣石川朝臣同氏武内宿称男平郡ハ都

久宿称之後也日本紀合 又曰石川朝臣孝元天皇皇子

彦太忍ハ信余ハ之後也日本紀合又曰曰朝臣石川朝臣同祖

武内宿称大臣之後也 此外姓氏錄載ハ所石川氏ハ分流

多ハ武内宿称之後也

一 扶桑見聞私記七十三卷藤九郎盛長私記 此兩書ハ実

録ニ非ス見聞私記カマナナリ中所盛長私記ヲ引用ハ兩書共ニ

享保年中江中青山ハ居住ハ浪人須磨不音ト云者ノ傳作

也是ハ賣ハ莫太ハ金子ハ得ハ元ハ水野監物ノ家僕ニテ加

藤仙安ト云ハ者也見聞私記初ハ大江廣元日記ト名付テ廣

元ノ書シハ日記也ト云觸ハルカ松平大膳大夫大江廣元後ハ也ヨリ谷

メラレテ扶桑見聞私記ト名付テ替ハタリ享保年中此

書ヲ將軍家御覽アリニ御疑有テ奥坊主成嶋



道筑と云フ学者ニ被仰付御正シアリシニ道筑偽書丸由申  
上ケ偽書ニ定リタリ見聞私記卷之ニ源平盛衰記平家  
物語ヲ引タル所アリ盛衰記モ平家物語モ廣元ノ時代ヨリ  
遠ニ後ノ代ニ出来タル書也廣元死後ノ書ヲ引タルヲ以テ  
其偽書ナルヲ知ルベシ又同一之卷ニ近世武田流ノ軍法  
者ノ用ル白紙ノ摩ノ圖ヲ出シテ義経ノ作ラレシ由ヲ記シ又  
近世ノ鎧ノ胸ニ摩付ノ環ヲホリ義経ヨリ始ルト記シタリ  
摩ハ武田信玄ノ用始名物ニテ義経ノ比ハ曾テナキ物ニ是又  
偽書ナルヲ知ルベシ又末ニ至テ頼朝ノ代養和二年ノ大追  
物ノ式ヲ記シタル所モアリ是ハ正保年中武列王子村ニテ  
薩摩ノ島津氏大追物ヲ張行シ

大猷院殿ノ御覽アリシ式ヲ林春齊カ記シタル大追物御  
覽記ト云書ヲカキ直シ島津氏ノ家臣ノ名ヲ皆鎌倉  
時代ノ武士ノ名ニ書キカハ一躰式ハ王子村ノ式ニ是等ヲ以  
テ一躰ノ偽ヲ知ルベシ卷数多キ書ナレハ一ニ偽ヲカソフル違  
アラス押テ知ヘシ○又盛長記モ一躰偽多キ中ニ古文後集ノ注  
ヲ引テ鎧ノ威毛ノ変ヲ記タル所アリ古文後集ノ注ハ西土ノ  
元ノ順帝ノ時至正二六年丙午ノ歲三山林以正ト云者古  
注ヲ改メテ精ク注シタル也至正二六年ハ本朝ニテハ後光嚴院  
ノ御代貞治五年丙午ニ當ル也盛長記ハ文治四年ニ書タ  
ル由末二年号月日ヲ記タリカノ古文後集ノ注ヲ作り  
タル年ヨリ凡百七十九年以前ノ盛長百七十九年ノ後ニ出











一 万葉集 采花の月の高ノ花の女帝は  
代天年勝家二年のいたた橋御諸兄諸卿大夫等  
て万葉集と撰を記

一 いまの 采花の月 寛弘五年九月十日中宮彰子後

一条院とて書しる事云々の中酒の対をわ

略女房のみ白さかぬゆゑにゆゑのいふことなり

侍中群卿等五つは春は御湯殿之新着衣也白絹也

毎日々 早且供御湯主殿官人奉行 近代多し

允禁中着湯卷上臈一人典侍一人也是候御湯殿故也

壺井義知云湯卷白生衣也 音通スルユ

氏云東鑑ニ今木ト云んモ是ナレ今亦ハ湯卷ノ假リ字ナ

卷ハミトウシ湯トクニテ 東鑑ニ云  
身ニミトウ衣ナリ 下ニ記ス

一 日本紀 筑紫疏云此書元正天皇養老年中一品舍人親王天  
皇 及後四位下勲五等太朝臣安磨奉勅撰也 副帝王  
御子 系圖

一 古事記 元明天皇 詔正五位上安磨伴撰阿礼所誦之言和  
銅五年正月二十日初上彼書所謂古事記三卷者也

一 小鼓或説小鼓ハ東山殿ノ時猿樂觀世カ始テ作り出スト  
云リ非シ古事記ニ堀河院永長元年ノ殿上人ノ田樂ノ変  
ヲ記シタルニ経忠藏人盛家小鼓ト見タリ東山殿ヨリモ以前

一 昔ヨリ有リ来リシモノナリ

一 權輿 詩經秦風權輿 經嚴氏曰造衡自權始造車自  
輿始トアリ 衡ハ稱衡也 衡ヲ造ニ權錘ヨリ始ル

一 輿始トアリ 衡ハ稱衡也 衡ヲ造ニ權錘ヨリ始ル



輿ハ車ノ底也輪輻蓋軫皆輿ノ大小ニシタカフニ車ヲ造ニ  
輿ヨリ始メ因テ物ノ始リヲ權輿ト云ナリ

一月代 沙石集六月代アル入道撰集抄ニアサシクマツレタル  
僧ノ近ク家ヲ出ニケルトミヘテ月シロナドアサカニユメリ○沙

石集ハ無位法師作也握景時カ孫也撰集抄ハ西行法師作也

一盲龜浮木 法華經佛ノ難得值如復曇波羅華又如一  
眼之龜值浮木カモ孔垂ク科註ニ見ク凡夫五趣ノ海漂流

シテ復人身ヲ得ルノ難キニ喩フ

一長絹七疋 古事談云卷二宇治殿極也今參内給之間陽

明内左近府前程也置道之頭有大袋兼燭之後也人落欵以御

随今被見之入束帶裝束一具有其二外廣シ

每物兼惡也右太弁宰相經頼之裝束ヲ落欵仍還御之後  
相具長絹七疋經頼之許へ送遣処果有実云○此長絹  
ハ絹ノ名也

一軍物語ノ書ニ首頭シエトウキヤク頭ノ三字ヲクセト云フニ用タリ首モ頭モカシ

ラトヨム俗ニアタマ也頸ハ俗ニ畧シテ頭ニ作スコノ字ヲハクビト

ヨム俗ニ云エリ也如此差別アルトキレトモオシナベテクビト云フ故

文字混雜セリクヒヲ取ルタヒ実檢キド云フニ首ノ字ニテ

モ頭ノ字ニテモ用ベシクビヲ切ルクビヲ闕ト云時ハ頭ノ字ヲ用

ルモコレ首ヲ切ルニエリノ所ヲ切ルニハナリサレトモ首ニテモ頭ニ

テモ用ルハ猶宜シキナリ

一公家 古事談卷三儀同三司 伊周 配流者中此間公家



一 差石衛門權佐孝道左衛門尉季雅右衛門府生伊遠等  
被馳遣師所歸本家之。又曰又伊周和修太元臨件ノ法者  
非公家者不修之法也。貞丈云公家トハ禁裏ノ事ヲ  
指シテ云也今世ニ公係ト云同シ公之家ト云也堂上ノ公  
卿トレノ支ヲ公家ト云ハ誤リ。是ヲハ公家衆ト云ヘシ東鑑ニ  
モ禁裏ヲ指テ公家ト記シタリ。此外古書ニ公家トアルハ皆禁裏  
ノ支也

一 中右記作者 右大弁宗忠俊家公ノ孫中御門宗俊卿ノ  
子号中御門嘉兼元年十二月廿七日任中納言後至右大臣位  
一位也中右記作者也見于古事記卷二五注

一 今木 東鑑卷四十二行建長四年壬子四月一日

宗尊鎌倉(下向)

甲寅天晴風靜寅一點親王自<sub>三</sub>関本御出<sub>中</sub>喜御輿入南  
門<sub>中</sub>寄寢殿土御川宰相中將被候之其後有<sub>三</sub>境飯之  
儀<sub>中</sub>署御小袖十具御大口一唐織物御衣一領御明衣一今木

一 下署 ○貞丈云今木ハ詞ニ付テ訓ヲ借リテ書タル也イニキノ  
夏棠花物語ノ文前ニ記ス参考ス(三湯卷ノ下也


一 不審ノ二字イブカシトヨム又ウタワカタシトヨム 野守鏡云保  
昌哥ニ 早朝ニ起テソ見ワレ 梅ノ花夜陰大風不審々々妻  
和泉式部ナラシテヨメルアサニタキオキテソニワル梅ノ花夜ノ  
マノ風ヤウタワカタサニ

梅ウタカハシキ  
トイフ詞ニアラ  
ホウラハ名ナリ

一 野語述説 俗語録 世語俗談 諺州本朝俚諺是等ノ  
書俗語ノ出所ヲ考ヘ註釈シタル書也



一不意ノ二字オモヒノホカトヨム古訓ニハユクリモナリトヨムナリユクリモナリト云 詞源氏物語ニ所ニアリ

一九字 抱朴子曰八山<sup>山</sup>宜知六甲秘咒<sup>咒</sup>々々曰臨兵闘者皆陣列前行 居家必用云  先畫四縱後為五橫 ○抱朴子云此ハ

道家ノ術也道家ハ仙人ノ術ヲ行フ者也列前行ト云フヲ仏家ニテ列在前ト改メテ用之也本ハ仏家ニハナキ也

一天狗タラシ 癸辛雜識云丙申十一月十七日夕<sup>夕</sup>到<sup>到</sup>是秋三鼓有<sup>有</sup>大聲如<sup>如</sup>砲<sup>砲</sup>火炮<sup>火炮</sup>震動可畏<sup>可畏</sup>雞犬皆鳴或云天狗墜<sup>墜</sup>故也

本朝俚諺ニ引ク

一大方殿 古書ニ大方殿ト云フ事アリ人ノ妻ヲ御方ト云其父ノ父ノ妻ヲハ大方殿ト云天子ノ御妻ヲ皇后ト申シ父帝ノ

御妻ヲ皇太后宮ト申ス同シ意ニ伯耆ノ卷<sup>トヨ</sup>上用松ノ母乳母ニ宣ヒケルハ大方殿如何ニモ成ラセオハシニサハ一所ニテ兔モ由モナラシト思切テトアリ右大方殿ト云ハ名和又太郎長高カ妻ニ長高カ子ノ義高カ妻ノ詞ニ夫ノ父長高カ妻ノ一ヲ指シテ大方殿ト云タルナリ上用松ノ母ハ義高ノ妻也

一小袴 山槐記 治承四年八月ノ卷北七百ノ条ニ高ノ相<sup>スケトキ</sup>時年<sup>スケトキ</sup>齡七旬着<sup>着</sup>枯色ノ織襖<sup>襖</sup>門生二人着<sup>着</sup>狩衣襖<sup>襖</sup>袴<sup>袴</sup>役者七八人着<sup>着</sup>水干小袴<sup>袴</sup>為<sup>為</sup>扶持○宇佐宮勅使也○貞丈按小袴指貫ナリ

一東百官ノ名ハ相馬將門カ定シ官名ナリト云ハ大ナル偽説ニ近世ノ人官名ニ似セテ妄作シタル也古記ニ東百官ノ名行<sup>行</sup>々



人の見エズ天正慶長ノ比ヨリ以来ノ書ハ東百官ノ名ツキタル  
人モ見ユク古今著聞集ノ印板ノ本卷十六ニ松尾神主頼母  
カモトニタツミノ權守ト云翁有ケリワツカニ田ヲモタリケルニ相  
論ノ事有テ六波羅ニテ問注スヘキニ定リニケリニ右頼母  
トアルハ神主ノ実名ニテヨリ何トゾ云フ実名ナルベシ母ノ字ハ  
傳字ノ誤ニテ頼母ト書タルヲ印板ニスル時ニタノモトカナヲ  
付タルニ鎌倉將軍ノ時ニモハヤ東百官ノ名有シトテ右ノ頼  
母ヲ證據ニ引カンテハ誤シ  
東百官ノ名  
下ニルニ可見合  
一十列トヲワラトヨハシジウレツトハ云々ニ十列ノ式詳テラス古今  
著聞集卷十六興言利口ノ部ニ下野ノ敦永競馬ヲツカ  
フニツリケルガ十度ハ十八セヲシタリケルヲ經信大納言見ラレ

テ不幸ノモノ、十列歟トイヒタリケル比與ノ事也ケリニムナ  
ハセトハ空シク馳ル也競馬ハ二人並テ馬ニ乗り馳セテ人ヨリ先  
馳セ進ミタルヲ勝トス勝カルヲムナバセト云ニ敦永ノ十度ナカラ  
ムナハセシタルヲ經信ノ見テ不幸ノモノ、十列歟トイハフレニ云シヲ  
以テ考レバ十列ハ人数二十人ニテ二人ヲ、馬ニ乗り並テ遅速ヲ  
アラソハズ足ナシヲソコヘテ馳ルイナルヘキ歟可考  
一<sup>ヒケウ</sup>比興ト云詞常ニ人ノ云フ古今著聞ニ所ニ見タリ其外ノ  
古書ニモアル詞ナリ比與ノ比ノ字ハ誤ニ例ノアテ字ニ非ノ字  
ヲ用ヘシ與モトキフ與ノサメタルナド、云フ意ナレハ非與ト書  
ヘキニ比ノ字ニテハ義理通セズ  
比與ハ詩ノ古字  
ノ中ノニツナリ  
一嘲哂ノ二字俗ニヤウロウトヨムハ誤也嘲ノ字<sup>ハシラカシ</sup>隣交功音  
世



夕ウ也玉篇ニ見タリ夕ウロウナリ

一 裏打ノ水干スヒモノスル変 古今著聞卷八好色部ニ紫金

臺寺御室ニ千午ト云御竈童アリケリ中畧 紋紗ノ西面ノ

水干ニ袖ニムハラコキ雀ノ居タルヲゴヌタリケリ紫ノスワゴノ

ハカニヲキタリト云々 西面ハ表裏氏ニ紋紗ニムハラコキトハ

ハラノ花ノ色コキヲ云ナルベシコレヲ又ニ紋ニシタルナリ

一 賢聖障子 古今著聞卷十一益田部云南殿ノ賢聖

障子ハ寛平ノ御時始テカレケル也其名臣ト云ハ○馬周

○方玄齡○如晦○魏徵自乘○諸葛亮○遠伯玉○張良○房

五倫同三○管仲○劉禹○子産○蕭何同三○伊尹○傅説

○太公望○仲山甫同○李勣○虞世南○杜預○張華自

雷○羊祐○揚雄○陳寔○班固同三○桓榮○鄭玄○蘓武

○倪寛同三○董仲舒○文翁○賈誼○叔孫通自一 茅ナリ

此人ノ影ヲカレケル 彼麒麟浴ノ 功臣ヲ圖セラレケル跡ヲ

追レケルニヤ始ハ色紙形ニ銘ヲカレタリケリサレハ道風朝

臣ノ申文ニモ七度ケガセルヨシ載タリ其銘イワ比ヨリカレス

ナレルニカ當時ハ見エス色紙形ハカリソ侍ナル兼元ニ閑院ノ

皇居焼即造内裏アリケルニ本ハ尋常ノ式屋ニ松殿作

ラセモヒタリケルヲ此度アラタメテ大内ニ撰シテ紫宸殿清

涼宣陽校書殿ヲ場陣座ナト宴頃ノ所ニ立ヌラレケル

土御川ノ内裏ノカリケル所トゾ聞ヒ地形セハクテ紫宸

殿ノ間敷ヲシメラレケル時賢臣ノ影モホリトメラレニケリ



建長ノ造内裏ノ時ガミ又用捨セラレケル委ク尋テ注スヘシ  
大内ニテハ此障子ヲミナハナチラカレテ公直ノ時ハカリソ立  
ラレケル御秘藏ノ儀ニテ侍ルニマ閑院ニウツサレテ後ハス  
ヘテトリハナタルトナシ

一 鬼間ノ白沢王 同云又鬼ノ間ノ壁ニ白澤王ヲカレタルトハ  
ムカシカノ間ニ鬼ノスミケルヲ鎮ラレケル故ニカレタル夏トハ  
申シワタヘタレヒタシカナル説ラシラス〇ハクタク玉トヨム

一 昆明池ノ障子 同云又清涼殿ノ弘庇ニツイタケ障子ヲ  
タテ、昆明池ヲ圍セラレタリワノウラニ野ヲ書テ片方ニ小  
屋形ナリ又近衛司ノ鷹ヲツカヒタルヲカケリ是ハ雜藝ニ侍  
ル嵯峨野ニ侍セシ少将ノ心トソ彼少将ト云ハ大井川ノホトリニ

スミケル季綱ノ少将ノトニヤカノ大井川ノ家ヲ出テ嵯峨ニ侍  
シケルヲウツシケルニコソ

一 荒海ノ障子 同云又萩ノ戸ノ前ナル布障子ニテ荒海ノ  
障子ト名付テ年長足長ナド書タリ其北ノウラハ宇治  
ノ細代ヲ書リ清少納言カ栞草子ニ此障子ノ夏モ見  
エタリ一糸院コノカタモ書レタルトコソ

一 ハ子馬ヨセ馬ノ障子 馬形ノ障子同云大カタ清涼殿ノ  
唐繪ニモミナ書ナラハセル夏共侍リ渡殿ニハ子馬ヨセ  
馬ノ障子ヲ立テ又同シ渡殿ノ北辺アサカレヒノ前ニ馬形  
ノ障子侍リ又下ノ段ニアリ馬形  
草クテ下ニアリ

一 李將軍ノ障子 養由基ノ障子 同云障ノ座ノ上ニ李



將軍カ虎ヲ射タル障子ヲヨセカケ校書殿ニ養由基  
カ猿ヲ射タル障子ヲ寄立タリコレニナ何レノ御時ヨリ  
ト云フヲ知ラス由緒カタクオホツカテ閑院ニ大内ヲウ  
ワサレテ後モヨモ馬ノ障子并李將軍養由基カ障子  
ナド沙汰ナカリケルヲ四條院御時西園寺相国祥以修  
理セラレケル時頭中將資季朝臣申シ起テ立ラレタリイ  
ト云ハルト此障子ノ繪本トモ鴨居殿ノ御倉ニソ侍  
瓦建長造内裏ノ時繪前ノ前加賀守右房繪本ヲ  
モタガリケレバ取出シテカ、セラレケリ昔カノ馬形ノ障  
子ヲ金園カ書タリケル夜ニハテレテ萩ノ戸ノ萩ヲクヒケ  
レハ勅定有テ其馬ヲツナキタル鮎ヲ書テサレタリケル略

ナレズナリニケリト申傳侍レハ誠也ケル事ニヤ

一金園 同云弘高地獄変ノ屍瓜ヲ書ケルニ樓ノ上ヨリ梓  
ヲサシオロシテ人ヲサシタル鬼ヲ書タリケルカコトニ魂入テ  
見エケルヲミツカライヒケルハオツラクハ我運命ツキ又トハタ  
シテ幾程ナリテ矢ニケリ六条宮 具平 御堂ニ申玉ヒケルハ  
布障子ノ役ナドハ今ハ弘高ヲハメサルヘカラス輕ニナルヘキ  
変也弘高聞テ自愛シケリ此弘高ハ金園カ曾孫公茂  
カ孫深江ガ子也公忠<sup>公茂</sup>ヨリサキハ昼タル繪生ク物ノ如  
シ公茂以下今ノ鮎ニハナリタルトナシ<sup>中畧</sup> 公茂云公忠ハ屍瓜  
ヲ書トテハ必ツノ屍瓜ノヒラノスミコトニオノレカ名ヲ書ケ  
リト右ノ説ニヨリ系圖ニ作ル如左



巨勢金岡

兄  
公忠

弟  
公茂

深江

弘高

一 考ととも

他人ノ事ニ密通スル者ヲニラトコト云事

後代俚俗ノ詞ト思ヒシニ

建長六年ノ書ナリ橋南表記  
古今著聞卷十一益田ノ部ニ

繪師大輔法眼賢慶カ弟子ニ何某トカマ云法師有ケ

リ賢慶逝去ノノ後家ト不快ニナリテ相論ノ交アリ

ケリ六波羅ニ訴ヘケレ氏事ユカテ程ヘケレハ此法師繪

モオカレク書ケルモノニテ件ノ後家カアリカニフルニヒラ始

ヨリカキアラハシテケリニラトコシテ會合シタル所ナドサ

サマクニ書テエモイハズ色ドリテ詞付ケテ六波羅ヘ持テ

行テ奉行ノモノ共ニ見セケレバ訴訟ヲ執申サシメ心ハ十

カリケレ氏繪其奥アルニヨリテモトカクテサテヨフ程

ニ兩國司マテモ訴訟ノム子委シク心得ホドキニケリツヒニ

勝ニケリ件ノ法師根津国宗土ノ邸ニイニメアリニ

一 ボニノクボニ太カヲハク 同書卷十六奥言利ノ部云建長

元年閑院殿焼失ノ次ノ日宮ノ左衛門何カシトカヤイフ

モノボニノクボニ太カハキ 袖クリテ昨日ノ焼亡ニ醍醐ニ

候一則ニニカリ候テハセニヒラズ候トテ大納言ノ二品ノ局

ヘ参タリケル云々 ○ 負天云太カヲボニノクボニハクトハ其時

代ノ世ノ誇ナルベシ 實ニボニノクボニ太カヲハキタルニハアラズ常



ノ如ク太刀ヲ腰ニハキタルカアマリニ太刀ノ底ヲテラシテハギテ  
イシツキノ方ボシノクボノ辺ニテ至ルヲ云シリヲテラストハ太  
刀ノ尻ヲ高ク上ケテハク<sub>レ</sub>シカノ左イ門何ガシガ火災ノア  
クル日ニイカメシケナル躰ヲア甘ケリ云シトテ太刀ヲボシ  
ノクボニハキテト云ヒタル<sub>レ</sub>是其時代ノ俗諺ナルヘシカヤウ  
ノ<sub>レ</sub>ワロク心得レハ義大ニ違フ也

一急状 古今著聞集卷三政道忠臣ノ部仁平二年  
五月十七日取勝講行ハレケルニ中山内府藏人左衛門  
佐ニテ奉行セラレテケルニ廿二日結願ノ日左大臣参リ  
玉ヒテ御装束ヲ見サセ玉ヒケルニ九条大相国大納言  
ニテオハシケリ資信中納言ノ左大弁トテ参ラレタリ

ケルカ講談師座ノタテマウ例ニタカヒタルヨシ申サレケル  
ニツキテ左府奉行ノ職事ニ仰ラレテナラサレニケリ左府  
後日記ヲ見サセ玉ヒケルニ本ノ御装束タガハサリケレハ  
僻事ニテナラサレツル<sub>レ</sub>ヲ悔玉ヒテ急状ヲ書テ職  
事ノモトニツカハシケリ正直ナル者カナ○貞丈云御装束ト  
ハ御殿ノ取ツク口ヒ其席ノシツラヒラスル<sub>レ</sub>ナリ急状トハ  
我オコタリニテアリシト云<sub>レ</sub>ヲ書テ人ニ送ル状ノ<sub>レ</sub>今世  
アママリ證文ト云ニ同シ<sub>レ</sub>世俗ニ今モタイジマウヲコ  
フトイフハ此<sub>レ</sub>講談トアルハ講讀ナルベシ

一トシボウガヘリ 同書卷上蹴鞠ノ部大納言成通卿ノ  
事ヲ書タル条ニ成通卿ノ<sub>レ</sub>ニタ若カリケルニ庭ニテ鞠



ヲアケラレタルガテリ拾子と簾中トノ中ニ入ケルニツク  
キテ飛入ラレケルカ父ノ前毎骨ナリケレハ。一リヲ足  
ニノセテ板敷ヲフスシテ山ガウノモトリヲウツマウニ  
飛カヘラレニケル凡夫ノシワサニアラザリケリ哉一期  
ニ此トシボウカヘリ一度ニトゾ自称セラレケル

一子コガキ同書同部ニ順徳院御位ノ時高陽院殿  
ニ行幸成テ御逗留ノ日御鞠有ケリ至上院園白  
殿前太政大臣殿中納言忠信卿有雅卿刑部御宗  
長卿右兵衛督雅経朝臣等也亦唯子ヲ著タリ  
ケリ子コガキヲシカレタリ此人数アリカメキタメニ  
ナルベシ○子コガキハ今世田舎ニテ子コダト云ムシロナ

リワラニテアヤスキニ組タルモノニ此子コガキヲ大ニ巻テ  
コガキニ小的ヲカケテ堀ノ代ニ用ルルアリソレヲツグラ  
ト云又射付ノ小的ト云也ツラノ哥夫木抄

一黒骨扇 黒骨ノ扇ハ凶事ニ服中ノ扇也三光院  
内府記其外装束抄トモニ見ケル古今著聞集卷八  
能書ノ部ニ行成卿イニメ殿上人ノ比殿上ニテ扇合ト云  
アリケルニ人ニ珠玉ヲカサリ金銀ヲミガキテ我シトラヒトイト  
ナミアヘリケルカノ卿ハ黒クヌリタルホソホ子ニ黄古紙ハリテ樂  
府ノ要文ヲ真草ニ打セテトコウクカキテ出サレタリケル御  
門御覧セラレテ此扇コソイワレニモスクレタレテ御前ニトヤ  
メラレケルトカヤ○貞丈云凶事ニ服者ノ扇ハ黒骨ニテ







一東百官 前記ス所ト参考スベシ 古事記云將門逆乱者天慶二年十月始テ披露<sup>ト</sup>領<sup>ニ</sup>東八箇国<sup>ヲ</sup>集<sup>テ</sup>官鑑<sup>ヲ</sup>任<sup>シ</sup>国司<sup>ヲ</sup>惣行<sup>ヲ</sup>除<sup>ク</sup>同大臣以下文武百官皆以照定<sup>ス</sup>但所<sup>レ</sup>闕者<sup>ハ</sup>曆博士<sup>ヲ</sup>計<sup>ス</sup>也<sup>ト</sup>然<sup>レ</sup>將門別ニ百官ノ新号ヲ立<sup>タル</sup>ニ非<sup>ズ</sup>大臣以下禁廷ノ官号ヲ用<sup>ヒ</sup>テ新ニ官号ヲ立<sup>シ</sup>ト云<sup>フ</sup>ハ何ノ古書ニモ見<sup>カル</sup>古又ニテ近世ノ人ノ偽作<sup>ト</sup>好<sup>シ</sup>將門カ定<sup>メ</sup>シ官号ニモセヨ朝敵ノ定<sup>メ</sup>シ官号ヲ用<sup>ル</sup>ハ朝敵ノ奴僕トナル<sup>ニ</sup>同<sup>シ</sup>收<sup>カ</sup>ラサル<sup>モ</sup>定<sup>メ</sup>シ東百官ハ將門カ定<sup>メ</sup>シニモアラズ近世事ヲ好<sup>ム</sup>者ノ私ニ偽作<sup>シ</sup>タル<sup>ニ</sup>何國ノ何者<sup>ハ</sup>歟<sup>カ</sup>名<sup>モ</sup>知<sup>レ</sup>サル者ノ作り<sup>タル</sup>名号ヲ用テ名<sup>ル</sup>モ彼ノ名<sup>モ</sup>知<sup>カル</sup>凡人ノ奴僕トナル<sup>ニ</sup>理<sup>ナ</sup>リ快カラサル<sup>ト</sup>心<sup>アラ</sup>ラン人ハ必<sup>ズ</sup>東百官ノ号ヲ用テ名<sup>ル</sup>ル<sup>ト</sup>勿<sup>レ</sup>禁廷

ノ公卿大夫等ノ我朝ノ官号ヲ捨<sup>テ</sup>外國異朝ノ官号ヲ書<sup>ク</sup>人<sup>アリ</sup>是<sup>モ</sup>外國ノ奴僕トナル<sup>ニ</sup>理<sup>ニ</sup>我朝廷ニ悻<sup>リ</sup>恐<sup>ル</sup>ハ何<sup>ト</sup>ツヤ

一伊勢外宮 古事記上卷云次<sup>ニ</sup>登<sup>ル</sup>由宇氣<sup>ノ</sup>神<sup>此者坐外宮</sup>之度<sup>相神者也</sup>○聖德太子ノ時既<sup>ニ</sup>外宮<sup>アル</sup>ヲ知<sup>ベシ</sup>或<sup>レ</sup>説<sup>ニ</sup>外宮ヲ國常立尊也<sup>ト云</sup>非<sup>也</sup>豊食神也<sup>天照太神ノ臣也</sup>豊ハ豊大ノ事ニテ貴<sup>ク</sup>フ<sup>ノ</sup>詞也食ハ天照太神ノ御食ヲツカサ<sup>ル</sup>職也サ<sup>ハ</sup>天照太神ト同<sup>シ</sup>大神ト称<sup>ス</sup>ニキ神也豊食太神ト称<sup>ス</sup>ハ誤<sup>ナリ</sup>天照太神ハ君古<sup>ク</sup>ハ大神ト云豊食ハ臣ナル<sup>ニ</sup>ハ豊食ノ神ト云<sup>テ</sup>大ノ字ハ称<sup>セ</sup>サル<sup>ニ</sup>猶可考一氏神 姓氏錄卷十三云竹田川邊<sup>ニ</sup>連<sup>テ</sup>大明命ノ五世ノ後也仁



德天皇御世大和国十市郡刑坂川之邊有竹田神社因以  
焉氏神同居住焉綠竹大義供御箸竹因茲賜竹田川  
邊連ウラスナト氏神ト別也  
日本記ニウラスナ産ト

一御箸竹 右見夕リ上古ハ竹ヲ以テ箸ヲ削クト知ズ

一石神 又巖神又岩神並同古事然卷五云中山社

巖者冷泉院中嶋ニ令祝火神給云其後事外放光

後冷泉院ノ御時歟託宣云門前車馬多時出入不輒

給此所ニ向不欲住云依之令去移他所給云〇明德記

云二條猪熊岩神云〇兼邦百首抄云先二條大宮岩

神ハ付ノ中山大明神トヤ是三井寺北ノ院ニテ乃ハ

新羅大明神是也素盞盞鳥尊云〇今遷座六角南猪

熊東号石上寺祭四月中酉日十月中子日

一同明古事然卷五孝謙天皇建立西大寺ノ時中略令引率

同明七餘人長手大臣天上長手大臣〇此同明ハ同ノ朋友ト云一也

後世云剃髮ノ奴僕ノ夏ニハアラサレ氏文字ハ相同ニ

一園城寺ノ鐘 古事然卷五園城寺ノ鐘ハ竜宮ノ鐘也昔

時代不明  
可尋記栗津栗津冠者  
武勇者也建立一堂欲鑄鐘焉尋鑄下向

出雲國渡海之間大風俄起浪入船中略小船一艘小童取楫出乘

云人可乘移此船中略乍迷惑乘移之間風波忽然而止中略小船

入海底ト思之間到竜宮中略竜王出逢云為雙龍後類多被

亡畢今日殆可被害仍所迎申也時漸至可然者一矢可射給

云冠者諾之中略歎之大地引率若干眷屬來臨向廿二カハラ



矢ニテ射入口中舌根ヲ射切テ喉下ニ射出畢中略 竜王出来喜  
悦シテ云此悦ニ雖何変随願可レト云冠者云雖造一堂未鑄  
鐘中略 竜王安キ変也トテ竜宮ノ寺ニ所鈎ノ鐘ヲ下シテトハ  
畢歸栗津所建立堂廣江也変移時變件寺破壊之後終  
住寺ノ法師一人ヲ鐘主而去年比鎮守府將軍清衡施砂金  
千兩於寺僧千人其時三綱某乞集五十人之分以五十兩金給廣  
江寺法師是件鐘主ヲ法師成悦賣件鐘畢上座不迴時刻  
招寄寺僧等終夜轉來畢新鈎園城寺也件廣江寺天台  
末寺也後日衆徒漏聞此事搦件鐘主法師不日令入湖云○  
貞天云園城寺ハ三井寺也三井寺ノ鐘ハ田原藤太秀卿竜宮  
ヨリ取來ル所ノ鐘ナリト秀卿草子ニモ見エ世ニモ云傳ハ猿樂ノ

三井寺ノ謠ニモ作レリ久シクニ傳ヘタル変ト見タリ古事談

ノ記ヌ取ハ秀卿ニハアラス栗津ノ冠者ト云者ノ竜宮ヨリ取來テ

廣江寺ニ置シテ後ニ三井寺ハ買取タルナリ

一神璽 名例律云盜及偽造神璽追考神璽ハ天皇御璽之内印大詔官以下諸官ノ印禁内ニテ内印注曰神璽者謂依令

踐祚之日中臣奏天神之壽詞忌部上神璽之鏡劔○貞天

云神璽之鏡劔ト之ノ字アリ然ハ神璽ト云物ハ八咫鏡草薙劔

ニヲ指シテ云フ惣名也別ニ神璽ト云フ物アルニハアラズ

貞天追考律ノ注ニ神璽ヲ鏡劔ノトスハアラナラズ

一氏神 續日本紀室龜七年秋七月乙丑ノ記曰内大臣從二位藤原

朝臣良繼病叙其氏神鹿島社正三位香取神正四位上

一八字 當干於等字 万葉集卷一山上憶良在大唐時憶本







一 戴餅

イタバキモ千トヨム古代小児ノ頭ニ餅ヲイタバカセテ  
祝詞ヲ云テ賀スルアリ紫式部日記桃花葉景其外古  
書ニ見タリ古事談卷六曰安藝守基明俊憲嬰子之時正  
月戴餅ノ間少納言入道祝言シテ云ク才学看如祖父文章  
父ノ如クト云ク○イタバキモ千ノ一諸篇抜萃ニアリ

一 粧帶其夫目結之 東鑑卷 治承六年三月九日巳卯西臺  
所御着帶也千葉介常胤ノ妻依殊仰以孫子小太郎胤  
政ヲ為使獻御帶武衛奉令結之給丹後府候陪膳

一 楠カ家ノ紋ハ菊花三ツアリテ傍ト下ニ流水ノ形アリ永正七  
年立雪斎カ画キシ見聞諸家紋ト云書ニ見タリ或説ニ  
楠ハ井千左大臣諸兄公ノ末孫也彼公井千ノ里ニ住タレト

井千ノ玉川ノ岸ノ山吹ヲ愛シテ云ク山吹ノ花ノ川水ニ流ル  
形ヲ楠家ノ紋ニ付タル也菊花ニアラスト云ヘリ此由来サモアル  
ヘキカ如クナレト出所詳テラズ右ノ諸家紋ニハ菊也太平記  
ニモ楠カ旗ヲ菊水ノ旗ト記シタリ太平記ハ楠正成正行ト  
カ存生ノ時ノ人ノ書キシ物ナレハ山吹ヲ菊トハ云ヒケガヒシ  
キ又ハ山吹也ト云ハ理ヲ好ム人ノ所會成ヘシ

一 德河 東鑑卷八文治四年戊申正月廿日丙辰二品立鎌

倉令參詣伊豆管根三嶋社等給武州參列駿河源藏人  
大夫上總介新田藏人奈胡藏人里見冠者德川三郎等扈  
後下略同卷文治五年己酉六月九日丁酉鶴岡御塔供養ノ  
余頼朝參詣先陣隨兵ノ中德河三郎義秀トアリ



一百度參 東鑑卷九文治五年己酉八月十日丁酉今日於鎌倉  
御臺所以御所中女房數輩、百鶴岳百度參是奧列追  
討御祈禱也 恭衛進討也

一賴朝知行八箇国 東鑑卷九文治五年己酉三月十三日賴朝院  
宣御請文曰賴朝知行八箇国之命注載別紙可下預候  
又卷十文治六年二月十一日、余上總国者為関東御管領  
九箇国之内、

一母子丸太刀 秋虎園所作異制度訓往來曰源氏鬘切平家  
小鳥按丸餘五將軍之母子丸、餘五將軍ハ維茂也母子丸  
ホコ丸ト訓ス恭、狐丸カ 東鑑卷八文治四年戊申九月十  
四日、余ニ云此長茂 本名資茂者鎮守府將軍維茂、貞盛朝臣弟也

男出羽城介繁茂七代裔孫也維茂勇敢不耻上意之間時人  
感之將軍 宣旨以前押而称將軍而以武威雖為大道每轉  
讀法華經八軸每年一見六十卷 玄文止觀 一部亦謂惠心僧都  
於往生極樂要須繁茂生而則逐電乍含悲歎經四箇年  
依夢想告搜求之處於狐塚尋得之持來于家其狐令  
變老翁忽然來授刀并神櫛等於嬰兒於翁深慮令密  
音云、可為日本国主於今者不可至其位、嬰兒者則繁  
茂也長茂繼遺跡彼刀令帶之、

一工匠ノ支ヲヨリニシト云ハ諸工人ノ字也職人ノ字ヲ用ベカラス職  
人哥合ニハ士農工商醫師陰陽師僧徒樂人巫覡遊藝者等  
ヲ載タリ是皆各家職アル者ナレハ是ヲ職人ト云タルナリ



一 塊飯 ワハントヨム字ナレハワウガント云ヒナリハシタリ是飯酒又  
進マ餐應スル支ラ云ニ塊ノ字俗ニ塊ノ字ヲ用ルハ誤ニ塊塊別  
字ナリ塊ノ字玉篇ニ鳥管ノ切トアリ音クニ也字彙ニ飯當ト注  
シタリ塊ノ字玉篇ニ後官胡翫二切トアリ共ニクニ也注ニ説文ニ  
以衆和沃而糝トアリ東鑑庭訓往來其外ノ書ニモ塊飯トアルハ  
皆非ニ塊飯ヲ書誤レルナリ

一 領家 東鑑卷十文治六年 建久元年也 四月改元 十月九日庚寅於駿河  
國蒲原驛院宣到來是近江國田根庄者按察大納言朝領  
所也依二品御鬱胸日東籠居之間地頭佐々木左衛門尉定  
綱忽緒領家所務ニ彼鄉後本之後執事子細可谷尋成  
敗之趣也則以其趣被仰合定綱訖云云○貞久云按察大納

言ハ領家也其地ヲ領ス人也佐々木不定綱ハ彼大納言ノ地ヲ預リ  
テ百姓ヲ支配シ年貢ヲ取立テ納ル人ニ是地頭也今世ノ武家ニテ  
地頭ト云ハ古ノ領家也今世代官ト云ハ古ノ地頭ナリ鎌倉ノ代  
ニ年貢ヲ進納スル人ヲ地頭ト云也代官ト云稱ハナカリシニ東  
山殿ノ比代官ノ稱アリ下ニ記

一 頼朝郷東鑑ニ建久元年十月九日大納言ニ任セシエハ郷ト稱ス  
ル也此日ヨリ以前ニ郷ト稱スハカラズ即九日ニ大納言ヲ辭シ  
申サレケリ同廿四日右大将ニ任セラレ

一 夜日蝕 三代実録云元慶元年夏四月壬申朔丑一刻日有

蝕 文上ニモアリ又下ニモアリ  
一 神皇類聚國史卷三十五帝王部十五平城 綜圖曰延曆二



十五年三月辛巳桓武天皇崩於正殿 平城皇太子哀號擗踊  
送而不起參議從三位近衛中將坂上大宿禰田村磨春宮大  
夫從三位藤原朝臣葛野麻呂因請杖下殿而遷於東廂  
以垂并劔櫃近衛將監從五位下紀朝臣繩麻呂從五位下多  
朝臣入鹿相副從之○貞友云此垂ト云フハ神鏡ヲ指シテ云  
鏡劔ノ二種ヲスヘテ神垂ト云フ事モアリ鏡ハカリヲ神垂ト云  
テ神垂宝劔ト云フフモアリ書ニ依テ同シカラス天子ノ二種  
ノ神垂ナリ三種ト云フハ日本紀一書ノ説ニ出タリ又舊事  
記ヨリ出タリ

源氏竹川卷ノ非參議上ニ  
一非參議 日本紀略云延曆二十年十月己未朔乙丑詔曰  
陸奥國ノ蝦夷等歷代涉時 天侵亂邊境殺略百姓是以

從四位上坂上田村麻呂大宿禰等乎遣天伐平掃治流尔云田村  
麻呂授從三位焉非參議已下授位○貞友云此非參議從三位  
ノ位ハカリニテ朝政ニ參リ議ラズ職掌スベキ官ナキヲ云是勲  
功ノ賞ニ從三位ニ昇ラセテ非參議ニナサレシハ田村麻呂ライタ  
ル安逸ナラシム也

一代友 貞友ハ皇孫代ト何事ヲモ務ムルヲ如テ代友ト云フ所領  
ノ民ト治免年貢等ヲ取リテ人ノ代ト云フ事ナリ  
一 藤倉の代ト云ハ正和ノ後多ク代友ト云フ事ナリ  
及の以て代友ト云フ事ナリ  
一 寛文六年の日記八月庚午の多ク代友ト云フ事ナリ  
一 十七日地下階亂代友富山攝戶守等請使節ト云フ事



位階忠告教尾士氣高府自抑下向と見えり

一保 戸令云凡戸皆其家相保一人為長云〇公武令曰凡須責保者皆以五人為限

一大社中社小社 法曹至要抄云衛禁律云闕入大社門者徒一年中社小社各減三等 案之称大社伊勢太神宮八幡宮也中社者賀茂住吉社之類也自餘小社也而闕入之時皆得其罪但中小社有所減而已

一符移解 大改官符下諸司諸國省臺亦云符〇内外諸司非相管類者為移假令刑部省移式部省其事云〇八省以下内外諸司上太政官及所管並為解公武令之文 一偽書罪 詐偽律云詐為官文書者杖一百注云符移解

狀之類〇同律云詐為官私文書增減以求財賞者准盜論〇偽書ヲ作テ印板シ諸人ヲ欺ク者古ナラハ杖罪免ルハカラズ

一返抄 江次第定受領功課條曰格云每濟填納取四年以上返抄同抄云今世之請取也

一察獄 五聽令云凡察獄之官先備五聽義解云謂五聽者

一曰辭聽觀其出言不直則煩二曰色聽觀其顏色不直則赧然三曰氣聽觀其氣息不直則喘四曰耳聽觀其聽聆不直則聾五曰目聽觀其眸子不直則眊然也〇貞丈云是上古罪人ノ實否ヲ察スルノ法也又男ハ

事ヲ思案スルニ必顔ヲ仰リ女ハ思案スルニ必顔ヲ俯ス又偽ヲ言フ者ニ向テ其者ノ眼中ヲ見ツテ其事ヲ問ヒ返セ必目



夕、キヲシテ吞フル也。是偽ヲ云フ者ノスル、其ノ眼ノ眸子ヲ上ニ引  
付テ思案シテカハラ云モ偽ヲ云フ者ノスル、其眸子ヲ左右ニ片  
寄セテガハラ云モ同シ

一摺袴、延喜、彈正式云、摺成、衣袴並不得着用

一今世ノ人妻ヲ去ル事アルハ、男ヲ留テ女子ハ妻ニ付テ去ルル

リ、定法ノ如シ、古書ニ其定法曾テキリ、奴婢ノ生、女子ハ男

女共ニ母ニ付テ養ハシムル、今ニ見タリ、押亡法曹至要抄ニ云

奴婢合テ生子ハ可後母事、押亡今ニ云、兩家奴婢俱ニ逃亡、合

生、男子並ニ後母ニ養ハシムル、謂官私奴婢、官戸家人、合生、男

女亦同業、之於奴婢者、律比、高産、何所生、之子ハ皆可後母

也

一紙判、俗ニ筆ニ筆ル者、花押書ク、ナラザル者ハ、紙ニ墨ヲツケテ押ス

アリ、古ハ指ニ墨ヲツケテ押シタル也、指ノ肌ノ文ヲシルシトスル、タメ也、紙ニ

テハシルシトナリガタシ、戸令ニ弁、妻須有七出之状、略皆夫手書、

之ニ尊屬近親同署、若不解書、畫指為記、是妻ヲ去ル時

親類亦寄リテ、其夫手ツカラ去リ、状ヲ書テ、親類其去リ状ニ連判

シテ、其女ニ本状ヲ示ル、不解書トハ、筆ナラハト云フ、畫指為

記トハ、指ニ墨ヲ付テ、押テ後、證據ニセヨト云フ、是ハ物カ、ヌ者ハ

如此スルナリ

一平裝束、江次、弟少二宮、大食篇、平裝束、謂用布帶、○延喜

兵庫寮式、曰、白布帶、注、長八尺、廣四寸、四重、為疊、○彈正式、云、諸

衛府、生以上、左右馬寮准此除衛仗、口之外、皆著靴、但著布帶時、須用



麻鞋

一太上天皇 太上がジヨトヨム壺井カ法曹ノ校本ニアリ

一錫紵 シラキ 喪葬令云天皇為本服二等以上親喪服錫紵為三

以下及諸臣之喪除帛衣外通用雜色義解云凡人君即位

服絶傍暮唯有心喪故云本服錫紵者細布即用淺墨染

也帛衣謂白練衣也

一帛衣 右見タリ 法曹至要抄壺井義知が首書云帛衣天

皇正服定令條之時末有黃檀染也嵯峨天皇御宇黃檀

御袍始之後以帛衣為神事之服御者

一肉食禁 日本紀天武卷曰四年四月甲戌朔庚寅莫喰牛馬

犬猿雞之肉以外不在禁例若有犯者罪之

一未嫁女不結髮 上古ハイ一タ嫁セサル女ハ髮ヲアゲスト見タリ万葉

集ニタケハナノ寺ノ長屋ニ我イ子シウナヒヤカハ髮アゲウラント

ヨイ伊勢物語ニクラベコシフリワケカミモ肩スギヌ君ナラズシテ

タレカアグベキトヨミ又日本紀允恭天皇七年ノ紀ニ皇后コレヲ

聞テ曰喜初ノ髮結テヨリ後官ニ陪ルコト多年ヲ経タリト記

カレ文選ノ古詩ニモ髮ヲ結テ夫妻トナルト見ユレハ和漢其趣

ヲ同クス○貞丈栴髮ソギト云女ノ元服也髮ヲソグハ其夫ノスル

トナリ髮アゲトテスベラカラニ髮ヲ垂テ頂上ニ髮ヲ持テアゲテコ

ブノ生タル如クニシテソレヲ結テ釵子ト云フテカンガシヲサスヲア

リ髮ソキノハ源氏物語ニ見タリ

一度量始 續日本紀卷二大室二年三月乙亥始頒度量ヲテ



天下諸國。○印本。度量。置。作。誤也。

一度量古法。今義解卷十見。雜令曰。凡度。十分為寸。

義解曰。謂度者。分寸尺丈。計也。所以度長短也。分者。以北方。柜黍。中者。一之廣。為分。柜者。黑黍也。

十寸為尺。一尺二寸為丈。一尺。十尺。為丈。量。十合。為一升。

義解曰。謂以柜黍。中者。容。一千二百。為簞。十簞。為合也。

三升。為大升。一升。十升。為斗。十斗。為斛。

權衡。二十四銖。為兩。

義解曰。謂以柜黍。中者。百黍重。為珠。二十四珠。為兩。

三兩。為大兩。一兩。十六兩。為斤。

凡度。地量。銀銅。穀。者。

義解曰。謂量者。權衡。升斗。相兼之稱也。又唯。率。銀銅。不言。金鐵。金。貴。於。銀。鐵。賤。於。銅。即。貴。者。用。小。賤。者。用。大。雖

文不言。亦須。准。知。

皆用。大。此外。官私。悉。用。小。者。

凡用。度量。權。官司。

義解曰。謂大藏省。及。諸國。司。之類。

皆給。樣。其。樣。皆。銅。為。之。

凡度。地。五尺。為步。三百步。為里。

一襖。雜令云。凡官戶。奴婢。三歲以上。每年。給。衣服。義解曰。謂其四歲以上。依倉庫令。給。糧也。

春。布。衫。袴。衫。裙。各。一。具。冬。布。襖。袴。襦。裙。各。一。具。謂。襦。者。短。衣。也。裙。者。女。裳。衣。也。



皆隨長短量給

一惡畜同令云凡畜產能入者截西角踏人者絆之鬪人者截兩耳其有狂犬所在聽殺之

一婚嫁 戶令曰凡男子十五女年十三以上聽婚嫁

一戶令曰弃妻須有七出之狀一淫子二淫洪三不事舅姑四口舌

五盜竊六妬忌七惡疾夫年書之之尊族近親同署若

不解書指為記妻雖有弃狀有三不去一經持舅姑之喪二

娶時賤後貴三有所受無所歸即犯之絕淫洪惡疾不

拘此令○洪洪之字誤也

一節日 雜令凡正月一日七日十六日三月三日五月五日七月十日

一月大嘗會皆為節日其普賜臨時聽勅 按此時代九

月九日ハ節日トセラル歟古書ニ九月九日ノ御宴モ見タリ後ニ始

ル歟可考 日本紀天武五年九月九日之宴見テアリ今ニ書ヲトス歟

一繪馬 本朝文粹十三大江匡衡北野天神供御幣并種々

物祭文目錄曰御幣上紙百帖色紙繪馬三疋トアリ太平

記河保秋山カ河原軍ノ条ニモ繪馬ノ事アリ

一元服 漢書昭帝紀注如淳曰元服謂初冠加上服也師古曰

如氏以ヲ為衣服之服此說非元首也首之所著也故曰元服○

負文云元カウダリカシラノ也シメノトスルハ非ナリ

一御用人東鑑卷三十四仁治二年辛丑九月七日ノ条曰七日壬辰

有臨時評定為出羽前司行茂奉行細工所輩恩沢事有

沙汰野世五郎拜領相摸國横山五郎跡新田垣内等是細



工故日向房実圓本給也女子頻雖果子細付<sup>テ</sup>藝能<sup>ニ</sup>充<sup>テ</sup>給<sup>リ</sup>訖  
今又為<sup>ル</sup>御用人<sup>ノ</sup>分勿論<sup>ス</sup>御用人<sup>ノ</sup>名太平記新田<sup>ノ</sup>真真矢  
口<sup>ニ</sup>テ死去<sup>ノ</sup>冬ホニモアリ

一突鼻<sup>ヲ</sup>東鑑卷三十四仁治二年辛丑十二月五日ノ条ニ左親衛

突鼻事 今日有免許 ○太平記ニモアリ

一追出<sup>大</sup>東鑑右同卷同年十月廿九日ノ条ニ上野十郎朝村

<sup>朝廣</sup>起彼座<sup>ヲ</sup>為遠笠懸<sup>ト</sup>向由比浦<sup>ニ</sup>之先於<sup>テ</sup>門前射追

出<sup>大</sup>○貞丈云オシカシ大上道ノ傍ニテ其所<sup>ニ</sup>居タル大<sup>ヲ</sup>追

出<sup>シ</sup>テ大追物<sup>ノ</sup>如ク射<sup>ル</sup>云ナリ

一著袴<sup>魚味綿衣</sup>東鑑三十四仁治二年十一月廿日ノ条ニ今

日將軍家若君御前御著袴魚味也<sup>中略</sup>其後著始綿衣

治云○貞丈按此若君ハ頼嗣公也延徳元年十一月誕生仁治

二年ニ三歳也著袴ハカキ袴ガカリヲ著始ル魚味ハ小

児ニ魚肉ヲ食セ始ル也小児ハ脾胃ヲ健ニスヲ以テ養生

トス魚味ハ厚味ナル物ニハ脾胃ニ泥<sup>シ</sup>テ恐ル又小児ハ火

氣盛ナルモノ也魚肉ハ膏<sup>ア</sup>脂<sup>ラ</sup>アリテ熱物ナルニハ火氣ヲ添ヘ

ン<sup>テ</sup>テ恐ル故ニ魚味ヲ食シメス三歳以上ニ至テ魚味ヲ食

セ始ル是ヲ魚味ノ祝トイフ又著始綿衣ハ小児ハ火氣盛

ナルニハ綿入ヲ著セス冬モ袴ヲ童子テ著セシム袴ニハ織目

ヨリ火氣ヲ漏ラス綿衣ハ火氣ヲ包テ漏カス故ニ三歳以

上ニ至テ綿入ノ衣ヲ著セ始ル也古人小児ヲ養フニ心ヲ用ル

テ如此



一 撰別大坂木村吉右衛門ト云者アリ兼廿段堂ト号ス高酒  
家ノ学才有テ古ヲ好ム者也珍書和漢諸方産物奇珍  
ヲ蓄フ其家ニ古板ノ論語一部ヲ藏ム裱紙ハ柿色ナリウ  
ラハ反古シ卷尾ニ文アリ曰ク堺浦道祐居士重新金工鑄  
梓正平甲辰五月吉日謹誌トアリ右ノ書本文五行十三字  
也正平甲辰ハ十九年也至安永六年丁酉四百十四年也經書ヲ  
板ニ刻ス一既ニ此頃ヨリ有リ也

一 白太夫ト云人菅丞相ノ家ニ参リ仕ヘシ人ノ其人イカナル人ナ  
有ケニ詳ナラズ或鏡ニ伊勢ノ御師ト云ヘリ然レ氏菅公ノ  
須磨ノ記ニ白太夫ノ名見タレ伊勢御師也ト云フハ見  
エズ延喜昌泰ノ比伊勢ノ御師ト云フ者ハ聞エズ古書ニ

見アタラズ後代伊勢ノ御師ト云フ者共何大夫ト云フ名ヲ付  
クニヨリテ白太夫ヲ伊勢ノ御師ト云ヘシト推量シテ何者カ  
云ヒ出セシナルベシ

一 梁年百鍊抄後三条院延久元年己酉二月十日依當梁年  
今年不可作内理之由被定之諸道勘申 ○後深草院建  
長元年己酉三月十九日辛卯當梁年内理造管事被問  
諸道云々八月壬寅諸道勘申當梁年夏造内理事定  
也諸卿參被行之

○百鍊抄梁年ノ字アリ何ナルカ知レ難シ滋野井入道公  
隋書ヲ閲シ至フニ梁年ハ酉ノ年也ト有ル由或人云東方蒼龍  
箕星一名汜赤星ト云本邦ノ故事ニ歲酉ニアルハ宮室ヲ營造



セズトナリ ○右結駝録ニ見

ウツホ物語ニ御カハラケハシマリ相撲出テ五年六キハカリトリテホキキテヌノヒ  
一布引ノ日 禁秘御抄ニ布引ノ日ト云フアリ此事中古記詳也  
キナトスルニアルジノ第トハサウガキヲカケル琴トモヲトウテサセテアテクニ奉  
布引ハ今ノ相撲首引唐土ノ拔河ノ戲也天子殿前ヘカ  
者ヲ召シ布ヲ引キ西ノカ者ニ引シノ勝負ヲ決セシムル也

○右同書ニ見タリ相撲ノ二字シハ除ヘシ

一鞠 結駝録ニ備後国ノ人其国鞠明神ノ神射ノ字也トテ

示セリ吉部秘訓ニ図スル所ノモノト全ク同シ図下ニ出トアリ

テ図ヲ写シ出セルヲ貞丈其図ヲ見ルニケモ吉部秘訓ニ見  
タル図ニ同シクユカケヲ毛結ヒ付タリカハ所ナシ

一奠ノ主人ノヒレ 同書云輜十ドノ臆ノ下ノ第一ノ鬘ヲ云ヒ

○貞丈云主人ノヒレ 杉サシノヒレ ヲトバノノヒレナド云テヒレニ名ア

ルハ鯉ノ名所是ノ古代ハ鯉ヲ称美スルユハ鯉ノ庖下アリ夫故  
名所モアルハ鯉名所ノ図大草流ノ書ニアリ

一小笠原流ノ諸礼同書云小笠原貞宗信濃守 月山ト称シ又

同禪寺ト称ス月山唐僧清拙ト云フ者ト談シテ諸礼ヲ

定ム寛永系図ニ見タリ ○貞丈云諸礼トハ武家ノ礼ハ勿

論哥鞠茶湯香聞庵下等ノ類ニ至ルニテ諸道ノ礼法ヲ一

家ニテ教ル故諸礼家ト云也如此ノハ古代ハ毎々事也

公家ニハ公家ノ礼アリ武家ニハ武家ノ礼アリ其外諸道ニハ

其一道ニニ其礼法アリ一家ニテ諸道ヲ兼ルハ甚煩

シク且其精シキハ其道ニノ者ニハ劣ルベシ且又礼ハ天

子ヨリ出ル後代ニ武家ノ礼ハ將軍家ヨリ出ル者也月山カ



定メシハ其一家中ニ行フヘキ私ノ礼也私ニ天下通行ノ礼  
ヲハ定ベカニサルナリ

一羯拍子 右同書云井上貞寛来リ物語ニ貞治鞠記云

井春ノ中ニ後鳥羽院御上足ナリシガ羯拍子ヲ能シ玉  
リト有ル由余一日難波中納言公尋シニ後鳥羽院ニ非ス順  
德院羯鼓拍子ニ長シ玉ヒシトナリ

一篠作太刀 同書ニ山城愛宕山ニ尊氏寄附ヒル篠作太  
刀アリ長二尺七寸塗リ敷ニメ革ニテ巻キ其ヲ黒糸ニテ  
巻ケリ柄頭フチハ黒シ鞘ニカ子ヲ打ケ篠作ヲ雕ツケテ橐  
ハ練リ物ニテ革ニテワ、ミ黒塗ニシタリ後鳥羽院ノ時御番  
鍛冶則宗カオタル太刀ナリ

一年忌 同書云京師相国寺ノ僧瑞溪云一切経ヲ考ルニ年忌  
ノ事毎シ我邦ノ先宿儒法ヲ借リテコレヲ為<sup>ナ</sup>而已ト又東見記ニ  
云櫻町中納言其父少納言信西ノ十三回忌ヲ修セント欲ス其弟  
僧明遍高野山ニ住セリコレニ同セズシテ云我仏ノ法四十九日  
ニ止ム年忌ノナリ有ルヲ聞カズト其事ツイニ止ミタリト

一東百官之名 同書ニ東百官ハ鎌倉親王ノ時ニ起レリ相  
馬将門カ置ク所ト云ハ恐クハ非ナラニ〇貞丈云将門ヨリ  
始ルト云ハ勿論妄説也證據モナキト鎌倉親王ノ時ニ  
起ルト云亦妄説也東鑑ニ東百官ノ名付クル人一人モ見  
エズ太平記ナドニモ見エズ室町殿ノ比ノ記録ニモ見エズ近  
世ノ人ノ作ナリ一人シテ作ルニモアラジ官号ヲ似セテ名ヲ



ツキタルカ漸ニ多クナリタルヲ集メテ京都ノ官号ニ  
アラハルユヘ曰舎ノ官号ト云フ心ニテ東百官ト称スルナ  
ルベシ求馬トドハ主馬ヲ似セタルナリ右膳左膳トドハ内膳  
奉膳典膳トシテ似セタルナリ藏主ハ藏人ヲ似セタル右門  
左門トドハ右衛門左衛門ヲ似セタルナリ又何ヲ似セタルト  
云主意モナク作りタルモアリ大所化小所化トドノ類ハ  
出家ノ称トモ云ベキカ如シ笑ベキ者也心アル者ハ東百官  
名ヲ付ベカラズ真ノ京百官ダモ官号ヲ盗ミテ付ク  
ナレバ宜シカラズ東百官ハ本據モナキ号ナレバ用  
ベカラズ東百官ノ事前ニ記ス参考スベシ○  
将門直朝  
廷官名前  
シカ曆博士ノミナカリシ由  
古事記ニ見タリ

一 多羅樹 翻名多羅 姑種景德寺普 日多羅舊名貝多此翻

岸形如此方俊樹直而且高極高長八九十尺葉如

黄米子有人云一多羅樹高七尺七尺曰仅是則樹

高四十九尺西域記云南印建那国北不遠有多羅

樹林三十餘里其葉長廣其色光潤諸国書寫莫不

采用○ 南南印度也  
南天竺云ナリ

一 八木 米ヲ八木ト云夏近世ノ事ニ非ズ百練抄第八安元元

年五月廿七日ノ条云於蓮華王院百十日有施行每八木

三十石○東鑑 後鳥羽院 文治元年十月廿日ノ条云廿日已御

堂供養 中略 進解文二通 二品 御臺所御方唐錦唐綾

唐絹南廷 十五 甲冑弓八木大豆等也



一 紅袴 古ハ賤キ女モ必紅ノ袴ヲ著タルシ今ハ禁中ノ女房  
ナラデハ着サルヲニナリタリ甘露寺親長卿ノ職人足寄合  
ノ中白柏子ノ形ヲ土佐光信ガ画タルニ紅ノ袴着タル躰ヲ画  
ケリ白柏子ハ位モナクイマシキ者シ又宇治拾遺卷九越前  
國敦賀<sup>ツルガ</sup>ノ女觀音タスケ玉フ物詔ノ条ニ越前國ツルガト  
イフ所ニ住ケル人アリケリ中略クレナ井ノスシノ袴ゾ一ツアル  
ヲ是ヲトラセテ思ヒテコレハ男ノヌキタルスシノ袴ヲ  
キテ此女ヲヨビヨセテ年比サル人アラントタニシラガリツルニ  
思ヒモカケヌオリシモキアヒテ耻カシカリヌヘカリツルヲカ  
クシツルヲノ此世ナラズウレシキモ何ニツケテカシラセント思ヘ  
ハ志ハカリニコレヲトラスレバ云々是ハ田舎ノ人負シキ女ガ昔

母ノメシツカヒシ下女ノ思シウケテ其ヨロコビニ紅ノ袴ヲヌキテ  
其下女ニアタフルヲ云ヘリ是ニテ紅ノ袴イヤシキ女ニテモ、キ  
タルヲ知ヘシ

一 モ、ヌギ 今ノモ、ヒキ也東鑑ニ敗解ト書ケリ宗五記ニモ、  
ハギキトアリ宇治拾遺卷九ツ子ニサガ郎等仏クヤウノ物  
詔ノ条ニ昔兵藤太ツ子ニサト云者アリケリ中略年五ナバカリ  
ナル太刀ハキモ、ヌギハキテイデキタリ云云

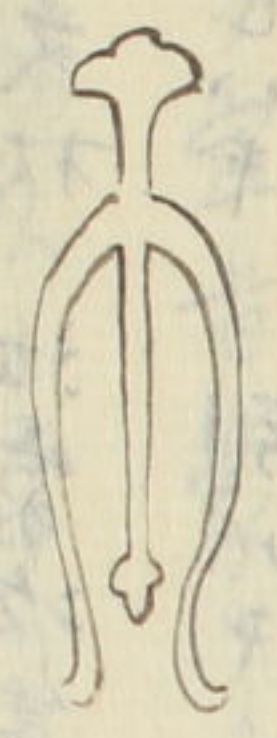
一 カハツルニ 宇治拾遺卷ニこれモ今ハ昔、原信の源大御を  
婚後といふ人かすゝり仏とせしむるゝ仏とせし  
佛と傳へしとせし一せしをたつとせしむるゝ佛と傳へし  
とすゝり佛の孔<sup>ライニ</sup>縫<sup>ミ</sup>のりてかたけしゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



にはて鐘不ととてやうまりてうらもやを志をくをり  
 わらふれを大細をいふとさりにけりふふあふひくわと  
 けりそのりくねが人もあつるうらうその多れをふこの傳ふ  
 つらさうを多うそあつるいふを志をといふるは人か  
 るぬとちちちちちちち一人の侍ありてうもつるいはは  
 ちりけりくさひくをといひつるふは傳ふいとさうてさ  
 ねべもしてさしひいさしひさしひさしひさしひさしひ  
 よるやうにけりけり○かをつらといへる世の後よせなりヲケリと云  
 一し新ミラノ皮ニテツルムト云フナルベシ如此ノニサナキ事モ昔  
 ノ詞ト今ノ詞ハ違アルニ依テコレヲ託シ置ケリ  
 一ツツガミ 文杖ノ変ニ禁中公事行ハル時杖ノ如クナル木

ノ先ヲワリテ文書ヲ杖ニテ地下ノ官人庭上ヨリ殿上へ捧ル是  
 フ文杖ト云禁中ナラテモ文杖ヲ用ルアリズハサニト云ハ是也  
 宇治拾遺卷上ニ河内守頼信が上野分守ナリシ時坂東ノ平  
 忠恒ヲ攻メテ書ヲメル余ハ忠恒カ子テノ支度ニメケヒニ我ス  
 デニ攻ラレシズカヤウニシタテマワラント云テメケニ名簿ヲ  
 書テフミサニハサニテサシ上テ小船ニ即等一人ノセテモタセテ  
 ムカヘテマイラセタリ云

○近世公家古ニテ銀ヲウスリウケノベテ長三寸ばかりニシテ



此ヤウノ物ヲ作りテ書籍ヲ讀ム時讀  
 終リタル所ノシルシニ書ノ紙ノ頭ニ此物ヲハサ

ニ置シコレヲフミハサニ氏フハサニ氏云此物ハ古代ハナキ物也後水



尾院ノ御作トカヤ云々同名異物ナリ一ギラハシキユヘ記シ置ナリ  
文林江家次第其外古書ニアリ

一七ハギ 引ハキノ畧語也今世オヒハギト云盗人ナリ人ノ衣服ヲ引

ハクヲ云也宇治拾遺卷二駿河前司橋本通ガ事ヲ書タル

冬ホニ大路ニ女聲シテヒハギアリテ人エロスマトヲナク

一八省ノ録 録ハサクハシ也是ヲ音ニテ録ト云キウウジツ御輔丞ナド皆

音ニテヨム也宇治拾遺卷十四白河院ノ御時北オモテノサ

ウシニウルセキ女アリケリウハシキ名ヲハ六トゾイヒケル中略刑部

ノ録ト云下略廳官コレハ殿上人カノ六ト云フ女ヲヨビニヤリタレバ

使ノ者六ヲ録ト心得テ刑部録ヲヨヒテ来ル物語シ

一真楯公アサカキ銘劔 真楯公ハ藤原房前公ノ嫡男シ真楯公ノ

銘劔廣橋家ニ傳來アリ其繪圖モ同家ニアリ大塚壹郎

右衛門橋嘉樹ト云者高倉家ノ衣文ノ門弟又滋井公麿

卿ノ故実ノ門弟ニテ京都ノ行通ケリ此嘉樹廣橋家ニ願テ

真楯公ノ太刀ヲ拜見シ且繪圖ヲモ写シタリ貞丈其太刀ノ

身ノ裏ヲ尋テ見シ喜樹カ云ク彼太刀ノ身ハ鉄ヲチノベテ

又ノ形象ヲ備タルハカリシヤスリ目ハアレヒ又金モ焼モナレト

貞丈按是儀カニテ身ハナニカ子ニテ作ヲタル見セカケガ

リニテ威儀ニ備ルヲ儀カト云シ儀カハ文官ノ人勅授帶劔

ノ宣旨蒙リテ佩ナリナニカ子ノ刀ヲ真及ノ如クニ飾ルユ

銘又ト云ナリ銘抄ニ銘劔古物大畧木也トアリ木刀ヲ

モ用タルト見タリナニカ子ノ刀ニテモ木刀ニテモ真及ノ



如リカザルユヘ饒劔ト云也後代ニ至テハ文官ノ後カニナニカ  
子ノ刀モ木刀モ用ズシテ真及ヲ以テ儀カノ饒ノ如リカザル  
ユヘ今ニテハ饒劔ト云フ名ハアレトモ何ユヘニ饒劔ト名付ル  
ワケ詳ナラヌヤウニナレリ儀カラ古奥カノ如リカザルユヘ  
饒劔ト云フ多ハ人知ラヌ也

貞夫饒抄ノ文ヨリ始テ發明シ得タリ其後真楠公ノ  
饒劔ノ身ノ変ヲ聞テ愚按テ弥決定シタリ

- 一 苑山院 クハサノ院ト唱フ
- 一 後水尾院 コミノオノ院
- 一 勘解由小路 カテノミウチ地名
- 一 太上天皇 タジミヒコウ
- 一 後深草院 ノキノフカウサノ院
- 一 西院 カウノ院 地名
- 一 烏丸 カラスノ 地名
- 一 洞院 ト井 地名

- 一 后宮 コグウ
- 一 襲芳舎 シハウシヤトヨミシクセニ  
アミナリノワボセ
- 一 太政大臣 オホセウヂノイシ
- 一 万里小路 マンリノコウジ 地名
- 一 侍中 侍ノ字スミテ云
- 一 勸修寺 クハシユジ
- 一 雲林院 ウジノ井 同
- 一 轉法院 テホリ 同

一 書状ヲ封スル糊ノ貯ヤウ糊ヲ馬蘭ノ葉ニ包テ紙ニテ封シ一方  
ノ角ニ細キ竹管ヲ短クシテ挾入テ糊ヲ押出セバ此管ノ口ヨリ  
出ルヤウニコシテハ置テツカウベシ久シキヲ歴テカビヲ生スル  
コトナシ藤原忠寄是ヲ制シテ贈リシヲ丁酉年五月八日  
ヨリ七月七日ニテツカヒタルニカビヲ生セス腐レズ奇也平ク  
四角ニ封シ置シ或ハ管ヲ入シテツカフ時小カヲ以テ切目ヲ



何方ニナリトモ付テ天ヨリ糊ヲ出シツカフ切目ハ糊ニテカハキ  
付キテオノツカラフサカル也重子ニツカフ時又何方ニテモ切  
目ヲ入テツカフナリ

一年号唱マウ 滋井公麿郷へ橘嘉樹カ同奉リシ三年号ハ惣  
ニテ吳音ニ唱ルナレ共連聲ニヨリテアシクヒツキ聞ニウルサキ  
ハ漢音ニモ唱ルナリ文明ハモニマウ慶長ハケウケヤウト唱  
ヘキヲ俗ニハブンメイ。ケイケヤウト云フハマシ、然シナカラ難陳  
ノ度ニ音 彖 惡キハ一難ヲ得ルナレハ先ツハ〇シ〇ゴク〇ロヤウ  
〇ナシ等ノ音アルハ勅例ニ省ク事ノ由又大化ハタイグハト湯ニリ  
リ音ニ唱フベキヲナレ往昔ヨリスミ来レル類モアル由答  
ヘ玉ヒシト嘉樹カ説〇負太栲石ノ説ニヨレハ畢竟一定

ノ法ナキガゴトシサレ氏大抵ハ吳音ニ唱ル方ト見タリ予カ思フニ漢  
文ニ書ル書ナドハ漢音ニ唱ヘカナ文ニ書タルハ吳音ニ唱ヘ今日俗  
間ニ通用ノ文書ナトニテハ世間ノ人ナシニ唱フベシ京ヨリ江戸へ改元  
ノ時年号ヲ書テ下サルニカナ付ナキユヘ唱ヤウ知レズシテ吳

漢西音交ルナリ

一 三種神宮之ヲ神聖ノ事 貞女今按天子ノ御印ナルヘシ其御印

ノ文字ハ代々ニテ改ル事ナリ天皇御筆トアリ此御印ハ神代ヨリ傳リ  
タル物ニヤテス孝徳天皇以來ノ物ニテアルベシ神代ノ物ニテハナレ  
氏尊ヒテ神ノ字ヲ付テ唱ルナリ御印ハ重キ宝ナルユヘ鏡劔ニ傍  
テ置ルハヨリ三種ノ神宮ト云ヒ習ハセナルベシ八坂瓊曲玉ハ日本  
紀ノ一書ノ説ナレバ正傳トシカタシ曲玉ヲ神聖ト云説用カタシ



一 關東坂東 關東ト云ハ近江國會坂ノ関ヨリ東ヲ指シテ云ニ  
 坂東トハ上野ト信濃トノ堺ノ碓井ヨリ東ヲ指シテ云也平家  
 物語ニ齊藤別當カ坂東武者ノ射ヲ善スルヲ云ヘルモ号也  
 坂東ハ易ト云ハ武藏相模安房上総下総常陸上野下野是也  
 後世常陸ヲ除テ互列ヲ加ルハ小田原北条氏ノ采地ノ時ノ古也  
 其時常陸ハ佐竹氏ノ采地ニテ北条氏ノ領ニ非ル故除キナリ  
 関八州ト云名目非ニ坂東ハ易ト云ヘシ○東鑑ニ云ヘル所ノ関  
 東ト云ハ右ト異ニ東鑑卷十七建仁二年ノ記ニ關東二十八  
 ヶ國關西二十八ヶ國トアリ是ハ五畿内ニ東海東山ヲ加ヘテ二十  
 八列トシ北陸山陰山陽南海西海ヲ合テ三十八列ト云タルヤリ  
 一 帖之縁ニ 纒細端 高麗端等ノ名アリ 錦ハリ也 纒細錦高

忠寄云和名抄  
 暈細錦トわれ  
 暈細錦ト云キカ

麗錦トテアリ和名抄錦字ノ注ニ和名迹之岐本朝式ニ有暈  
 細錦高麗錦軟錦西面錦等之各ニ暈細又纒細トモ書也  
 纒ハ字書ニシテ細字彙ニ居晏切錦文也唐有天細錦通作  
 綉○暈細ノ暈ノ字ハ日ノカサト云字ニ月ノカサモ此字ホリ日  
 月ノ外ヲ陰氣圍ミ環リテ圓クヘリヲナスヲカサト云暈細錦  
 ハ夕トハ日月ノカサノ如クニ花ノ形アレバ其花ノ外ヲ白ク其外  
 ラウス青ク其外ヲ濃ク青ク彩リ織タルヲ云ナリ日月ノカサ  
 ノ如ク青ノミニ不限何色ニテモ同シ段々ニ色ヲコクニテヘリヲ  
 色トルニ画工ノ詞ニ如ク繪ヲ色トルヲ暈細ガミト云ニ  
 一 俗語ニ幾ト何トテ混雜シテ道理ヲ失フアリタトハ人ノ數  
 ヲ幾人ト云ハ理ナク何人ト云ハ理ニ叶ハズ幾人ハ數ノ定ラガ



ル云詞し何人ト云ハ十三ビト、云フニテ其人ハ本國ハ何處誰ノ  
子ニテ何事ヲ業トスルガト云フ事ニテハ定ラル數ヲバ幾ツホド、  
云ベシ何ホド、ハ云ハカラズ幾程何程是ヨリニギレ始リシ

一柳管ノ木ノ數ノ事 ツレノ草壽會院抄 秦壽會院法印立安宗  
宗巴作慶長六年辛丑

曰柳管ハ硯短冊或鞠冠或又追善ノ時ニ經卷ヲ等ヲ居ル  
墨ナリ柳ヲ以テ造之故ノ名也ケタノ木ノ數ノ事重年ノ

幾其家ノノ説アリ御短冊ヲスエテ進上ノ時冷泉家ニ  
重ニコシラヘラル、由也三条三光院ノ相傳トテ依重年有

吉凶之候一吉事ニハ年ヲ用追善ノ時經卷ナド居ルニ重  
ヲ用テル、トシコノ段ニツレハクサ物ヲスルニメテサニヨラサメノ

而説アル如ク其家ノノ相承アルヘキ歟○貞丈曰年ハ陽

數シ吉事ニ用ベシ重ハ陰數也凶事ニ用ベシ

一位署守行字選叙令曰凡任内外文武官而本位有高下  
者若職事畢、与行高為守○禄令曰行守並依行守  
處給

一左獄 拾芥抄京程園左近衛南西洞院西○今按近衛南

西洞院云獄門町○江註抄云音人卿為別當時長岡獄、  
洛陽之前獄在長岡京○康富記云應永八年五月九日今日紫野

今宮祭也近衛西洞院獄門内構旅所云

一漢音吳音 延曆十一年格曰如聞明經之徒不事習音  
發声讀誦、既致訛謬、靜言其弊、尤非勸誘、宜令大學  
及國子明經生等兼習、又十七年格曰、一諸讀書出身等



皆念讀漢音勿用異音一大學士年十六已下欲就明學者先  
令讀毛詩音欲就史學者先令讀爾雅文選音○日本紀  
持統天皇五年九月己巳相在申賜音博士大唐續守言  
薩弘恪書博士百濟末士善信銀人コト二十西ト見タリ此年  
ハ唐中宗ノ嗣聖八年ニ當レリ是本朝ニ音博士ノ官ヲ置テ  
唐人續守ノ言薩弘恪ヲ招キ居テ唐ノ音ヲ教授セシメシ  
ナリ漢音ト云ハ是ナリ漢ノ代ノ音モ唐ノ代ノ音モ替ル  
右ハカラズ異音ナカルヘシ右ノ音ヲ受テ傳ヘテ今ニ其音本  
朝ニ傳レリ漢音トモ唐音トモイフヘシ今世異國ノ清朝  
ノ元祖康熙帝ハ韃韃トイフエス國ヨリ出テ大明ヲキ  
シテ國ヲ奪ヒ取り國民ノ髮ヲ剃シテ韃韃ノ風俗ニ變シ韃

韃人國中ニ充滿シケレバ字音モ言語モ韃韃ノ字音言語交  
リタレハ古代漢唐ノ比ヨリ傳レシ音ハ一變シタルベシ今世長  
崎ノ通事ノ謂フ所ノ唐音ト云者ハ古代ノ唐音ニハアラス韃  
韃音ノ交リタル清朝ノ音也日本ニ用ルハ古代ノ唐音ナリ思  
味ノ儒者ハ今ノ唐音ヲ長崎ニテ學ビテ漢唐ノ代ヨリ如此  
ノ音也ト思ヒ貴テ日本ノ音ヲハ國音ト号シテ日本ニテ作  
リ出シタルヤウニ云テ賤シムルハ日本ノ古史古記ヲ讀ス唯毒  
ニ誘ノ國ヲ貴ブノ所為ナリ古今ノ變ヲ知カルカ如シ又款項物  
右衛門 物部卿 祖末上 ハ漢音ハ管音也吳音ハ江音也昔官家江家  
ニテ音異セト彼人ノ述作ノ者ト云草子ニ書タリヤト  
カタモナキヲコト也而家ニテ音ヲ異ニセシト云フ下我朝の



国史其外古書曰雷曰見サルヲ推量ノ妄説ヲ作りタルセカ  
 ノ多クべしト云草子妄説多シ故生ハ我生レタル父母ノ国ノ白  
 本ヲバ甚賤ニ夷狄ノ国ナリト云テ只隣ノ西土ヲ聖人ノ国セト  
 テ中華中朝トド、云ヒ貴ビタル人ナレハ是モトノ日本ノヲバ  
 何モ知ラス人ニタニノ、知タル者モ取り違ヘ誤タルトアリ聖人  
 ノ道ニ父母ノ国ヲ賤シルヲ有マズヤ  
 一奏請 モイ 後官職員令義解ニ謂奏、而請其報ヲ  
 一戒刀 カイタケ 一説ニサスガト訓ズ非也一説今ノカッフリトテ瓜ヲ割皮  
 フルヲ物ノ類ニトナレト割瓜ニモアラズ根本雜事云、仏制、云  
 不聽 サ 大長刀、汝等應知有三種ノ子謂大中小大者、可長六  
 指小者四指。二内、右中、其状有二品如鳥羽曲似鷄翎不應

尖直比丘蓋刀名戒者蓋仏不許シマウセラズ所截一切草木キリキ况其他乎

以上畧文 山岡氏説

一志々良綾厨大面綾 後照念院殿 冬平 装束抄云同屋入道  
 第二度執柄御時御袍御直衣非志々良厨大面被用之云〇貞  
 丈云志々良ハシラフン綾也シラフハ綾ノ地キミテタトハナリメン  
 ナドノ如クサナミノ如クナレハ本名緒線綾ナリ厨面ハ右ノ  
 如クニシラナリ地ノ平ナラシシラヲ厨大シタル意ニテ云ナリ練  
 貫モシ、ラノ練貫ノシテ練貫アリ是今世武家ニテ着用ス  
 ルモノナリ  
 一神無月 壺井弼知神祇令ノ頭書曰初冬ニ無神事此以  
 為神無月也



一八省ノ号式部兵部民部治部刑部ハ唐ノ尚書六部官吏  
 一部兵部戸部刑部礼部工部ヲ撰シタル也然レ氏此方ハ五部  
 ノミナリ五部共ニ音ヲ以テ呼フ也中務大藏ハ刻ヲ以テ呼ヒ  
 宮内ハ亦音ヲ以テ呼フ一準ナラズ  
 一租税 神祇令義解云租税者並是曰賦唯新輸曰租  
 經貯曰税也  
 一木蘭地 僧尼令曰凡僧尼聽者木蘭青碧見黃及  
 壞色等衣義解曰謂木蘭黃椽也青碧者碧亦青色  
 壞色者失錯常色漫壞非全者也  
 一北國ノ田舎人ヤランノ詞ニ何云フ支ト云フヲアニクウ支ト  
 云ハアニハナニ轉語ナリクウハトイフノ約語ナリ万葉集ニト

イフヲクウトヨメル歌アリ後ニクウヲ又轉ジテテウトヨメリ意  
 ステウ衣ホステフナドノ類也又ト云フハゾノリ轉語ハ轉ジテジ  
 ヲトナリシヨ又轉シテジャトナリジマ又轉ジテトナル也京ノ人ノ  
 詞ニカウジャコウシヤト云ヘルシヤモゾノ轉シタル也周東ニテハカト云  
 フナリ  
 一職事官 敬官 公式令曰凡内外諸司有執掌者  
 為職事官其執掌者為敬官○私云職事敬事トモ  
 云

一文官 武官 同令曰五衛府軍團及帶杖者為武  
 義解曰謂馬寮  
 兵卒等是也 大宰府三國及内舎人不在武限  
 不在武限即知舎帶杖既奉内  
 舎人亦中務以上准而頭知 自餘為文  
 六十九



一神塞 同令曰天子神塞 本注云謂踐祚之日壽塞室而不用 内印方三寸 略下

一葬具用白布 日本紀孝德天皇二年春二月 畧迴

者我民貧絕專由嘗墓爰陳其制 尊卑使別 略其葬

時帷帳專用白布 下略

一禁殉死 右同条曰若經自殉或絞人殉及強殉已

人及馬或為己人藏室於墓或為己人斷髮刺股而

誅如此舊俗一皆悉斷縱有違詔犯所禁者必罪其族

一小町鬻髻 江家次第卷十四 云在五中將書和

歌二條后大原也小塩之山毛今日止已曾神代

之事緒思出良目人疑先是若有密事於或曰在五

中將為嫁件后出家相攝其後為生髮到陸奥國向

八十島求小野小町尸夜宿待鳴終夜有聲曰秋風

之吹仁付天毛阿那目阿那目後朝求之鬻髻目中

有野蕨在五中將涕泣曰小野止波不成薄生計里

即斂葬云云古事記云云

一太上天皇 史記漢高祖本紀六年曰高祖乃尊大公子 大公子云云

為大上天皇 秦始皇本紀下云

一今木 舊事紀曰宇麻智麻治命先獻天瑞亦豎

神指以奇矣謂五十櫛亦云今木○此今木八東鑑

所謂今木六別事十一東鑑今木八禁秘抄采花

物語ノ湯卷ニ同也

○漢音吳音ノ辨



一漢音六 拗音ニ似タル者多シ左ノ如シ

味キ丸キ有キ次キ 石ノ漢音 左ノ吳音

貞文云 キウノ反クナリ  
イウノ反クナリ

一清濁ニ依テ分ツモアリ如左

無グ武グ務グ 濁ハ漢音 清ハ吳音

貞文云 ハハスハ濁ハ漢音也  
横通シテニムモ吳音也

又清リ漢音トシ濁ルヲ吳音トスルアリ如左

狄ク隸シ神シ時シ實シ 清ハ漢音 濁ハ吳音

一夕チツテト ナニヌ子ノ相通ニテ漢音吳音ノ別アリ

納イ女ジ詳デン 横ドウ 夕チツテト濁ハ漢音ナリ  
横通シテニムチノ吳音ナリ

一イキシキニヒミイリ井 ウクヌツフム元ウ相通ニテ漢音吳音ノ別アリ

有イ宮キ洲シ頭チ分フ流リ イキシキニヒミイリ井漢音ナリ  
ウクヌツフム元ウ 吳音ナリ 堅通シ

一エケセテ子ヘメエエイキシキニヒミイリ井 相通ニテ漢音吳音ノ別アリ

永エ京ケ慶セ春セ性テ定子平ヘ明メ靈エ 漢音エケセテ子ヘメエエ  
イウキキウキウキウキウ 吳音イキシキニヒミイリ井

一漢吳共ニ下ノイノ韻アル字エケセテ子ヘメエエ

相通ニテ漢音吳音別ルアリ

類エ契ケ西イ體セ泥イ禪イ米イ 漢音エケセテ子ヘメエエ  
アカサタナハニヤラハ 吳音アカサタナハニヤラハ

一イキシキニヒミイリ井 漢音ニテショソトノホモヨロオ 吳音ナリ

音イ近ン居キ廢コ續シ論シ億イ弗フ欲イ六ヨ於ク曲ク 漢音 吳音

一カキクケコ 相通漢音吳音別ルアリ。カキ。ケキ。カク。キコ。コク

相通ナリ

香カウ行ウ客カ格カ鶴カ確カ極キ曲キ虛キ逆ユ空ウ元ケ 漢音 吳音 薛ハクハ亦  
胡チ狀ウ假カ 吳音 薛ハクハ亦

一夕チツテト 相通漢音吳音也



適テキ婦テキ擲テキ通テキ 漢音

一クハイノ音漢音ニテエノ音吳音也

淮クハ懷クハ會クハ壞クハ穢クハ回クハ

一イキシキニヒミイリ井相通漢音吳音別ルアリ

仁ジ如ジ若ジ兒ジ弟ジ弱ジ愍ジ 漢音濁 吳音清

一ハヒフヘホニムノモ相通漢音吳音別ルアリ

凡ビ愍ビ文ビ問ビ問ビ問ビ免ビ 漢音濁 吳音清

一同音ニテ清濁ヲ以テ漢音吳音別アリ

神シ時シ寶シ狄シ 漢音 吳音

右韻鏡袖中抄ノ趣ナリ毛利貞存説

一武士軍之時名詮トテ物名ノ吉ナルヲ好テ凶ナルヲ惡ム

世漢 七 吳

一其風俗也亦咆ヲ討ニ取リ豎栗ヲ勝ニ取リ毘布ヲ悅ニ

取リ我幕ヲ打ト云敵ノ幕ヲ引ト云類ノ一多シ前漢劉

向カ説苑卷十六於叢篇云邑名勝母曾子不入水名盜

泉仲尼不飲醜其名也又後漢書列傳三十一鍾離意傳

孔子忍渴於盜泉之水曾參回车於勝母之間惡其名

也見多其名ヲ惡ニバ其名ヲ好ムトアルベシ

一知久篋チククノ職人哥合ノ繪矢細サイノユノ詞ニユレハクノトテアツラ

ヘラレテ候トアリ中學集ニウキスハキヲキヲフモノナレバ好ミ

ニヨルト也古ヨリウキスノ名物ト云ハ法渡篋也信列知久ノ

一鎌カマト云ヲ用ル也サレトモカタウキスニ德多キ也ト見タリ

或矢ユノ云ウキスト云ハ篋輕クシテ水ニ浮色昔佐渡ヨリ



出タレト今ハ出サズ知久ハ信州ノ地名也昔小笠原殿ノ領地ニテ  
アリシ故知久ヨリ出ル筈宣シキ故是ヲ用テ其筈ニ年歷  
タレハ鎌ニテ一芥ニ切取ルニ三年歷タル一芥ニ切リ取ラズ一芥  
ニ切取ラルヨリ知久ノ一鎌ト云テ用テ今ハ知久ヨリ出サズ是  
ウキスシ右ノ矢工ハ畑中休右衛門ト云者也芝三田八丁目ニ居  
住ス○信州ノスベテ竹ノ性宣シカラズ竹ノ実セサルエハウキスア  
ルニ竹ノ性宣シカラザルハ信州ノ諏訪ノ人ノ説ナリ○片ウキ  
スハ金キウキスニ非ズウキスヲ云ナルベシ○知久ノ鎌筈トモ  
云鎌ニテカハ竹ノ性ト云フシ堅ケレハナクニテ切シ鎌ニテ刈  
ラレサルニ中學集ボ一本ニハ知久ノ鎌筈トアリ

一火葬 賦役令曰凡下匠赴役身死者給棺在道亡者所在  
国司以官物作給並於路次埋殮立牌並告本貫若其家人  
來取者燒之有入迎接者分明付領火葬續日本紀文武  
四年三月己未道明和尚物化火葬始也又曰文武大室三年  
十二月癸酉持統天皇ヲ飛鳥田ニ火葬サス

一韻鏡 神中秘傳抄卷七ニ自己ニ好テ名ツキレ文字必其身  
ノ吉凶著シキ事ト云箇条ニ和漢ノ人ノ名ノ文字ニ因テ其  
人ノ福福吉凶アリシ古例ヲ多ク載タリ其ヨリニ各条過テ  
次ニ各乘ニ正及倒及必可用又四声ノ字位ヲ可察事ト云  
ケ余ニ正及トハ例セハ羨朝及竟此正及ノ歸  
納字ナリ倒及トハ此二字  
ヲ朝及ト倒及ト智ト歸納スルガカキヲ云正及ノ歸納  
字吉ナリトモ復倒及ノ歸納字凶字ナラバ必不可用下略負



又曰源義朝ノ名乗字正及ニテハ歸納ノ字竟也例及スレバ  
歸納ノ字智ナリ竟モ智モ吉ナル字也然レ義朝ハ父為  
弒ヲ弒シ後ニ家僕長田在司カ為ニ弒サレタリ是名乗ハ  
吉ニテモ其身凶害ニアリ人ノ身ノ上ノ吉凶禍福ハ名乗字  
ノ吉凶ニ因ラサル一是ニテ知ルベシ和漢ノ古人ノ事跡ヲ以  
テ其名ノ字ノ吉凶ヲ引合テ考ヘ見ハ名ハ凶字ナレ其  
人ノ一生涯ガイ吉ナルモアルベシ名ハ吉字ナレ其一生涯凶ナル人モア  
ルベシ名ノ凶字ナレ其一生涯凶ナル人モアルベシ名ノ吉字ナル一  
生涯吉ナル人モアルベシ名ノ字ノ吉凶ニ付テ事跡ノ吉凶  
一定ト事アルベカラズ韻鏡袖中秘傳抄ハ京師ノ儒士  
毛利貞斎カ著ス所シ其身真儒ナラハ人ノ身ノ上ノ

吉凶禍福ハ名乗字ノ吉凶ニ因ラズ皆天命也心ヲ正シ身ヲ  
直クセハ身自作リ出ス禍ヲ免ルベシト云ヒ教テ愚俗ノ惑  
ヲ解キ曉スベキナレ強テ名ノ字ノ吉凶ニ因テ其人ノ禍福  
有リシ古例ヲ誣ヒ引テ愚俗ノ惑ヲ増ス一ヲ為セリ是真  
儒ニアラス巫覡僧尼ノ人ヲ惑ハスニ異ナル一ナシ可憎哉  
一胸形箭 賦役令曰凡諸貢獻物者中香藥彩色服食  
器用略下等解曰器用者如下野醜胸形箭之類是也○胸  
形ハ筑前ニアル地名ナリ  
一新井筑後守名乗君美キンヨシトヨハ文章ニ勤トアル俗稱  
勤解由ト云タル故也又トアルハ俗稱ナ右衛門トモ云ル  
故ニ印章ニ紫陽トアルハ筑紫ノ一ニテ筑後守ナリ故



ナリ君美ヨリ四代傳次郎邦賢クニニサ説ニ邦賢實ハ君美ノ孫  
ナリ元源太郎邦孝ノ養子トナル父ノ名ハ傳次郎

一ニケノクノアタラユミニ 万葉ニアリ同卷十四安多良乃稱尔  
布須思之能安里都毛安礼波伊多良年稱度奈佐利  
曾稱首書云 安多々良稱權現御座温泉在之深山也

一李朝ノ官位ハ其本唐ノ政ヲ字テ立ラレトモ別ニ官位ノ名号ヲ  
立ラレタルヲナレハ唐ノ官位号ヲ用テ書クハ也然レニ唐名ト  
云テ李朝ノ官位号ノ代ニ唐名ヲ用テ書クハハアルニシキ  
也中古以來心得違テ唐名ヲ書クハ俗トナレリ  
一大分青馬アシケノウマ 万葉集卷十三作者不知 衣袖大分青馬之嘶音情  
有鳥常カモツツニケ後異鳴ナリ

一名乗ヲ反ス事 浴下ニ反ヌ作 名乗秘傳鈔云ト幽軒ノ記ニ名乗  
ヲ反スハハ中古ヨリアリト見エタリ 詞花集ハ崇徳院仁平元  
年仁平、近衛  
院ノ年号也ニ撰セラル其時詞花ノ二字ヲ切シテ邪ノ字ト反  
シテ以テ難ビラレタリト也ヒナシ日記ナドニモ切カシノリアリトイヘリ  
然レトモ中納言匡房卿ノ江家次第ノ當代親王宣旨ノ下  
ニ藏人頭仰ヲ奉テ上臈ノ博士ニ仰テ御名字ヲ勘申サ  
シム博士勘文ヲ進ム

勘申御名字事  
其書トド某ノ反ト也  
トト同上某トト反ト也  
右勘申如件



年月日

官姓名

右ノトナリナレハ匡房卿ハ堀河院ノ時ノ人ナリ此頃既ニ  
 名乗ヲ及シ帰字ニテ查考シ玉フテ明ナリ猶其始ニ  
 時ヲ詳ニセズトト幽軒ノ説ハ此レヨリ少後ノイ也又近世  
 春臺ノ説ニ寛永以來ノ俗ナリトイハレハ大ニ非ナルヘシ  
 又中夏ニモ此ニ似タルナリ晋書ニ及<sup>テ</sup>爲<sup>ク</sup>清暑殿有職  
 者以<sup>テ</sup>爲<sup>ク</sup>清暑及<sup>テ</sup>爲<sup>ク</sup>楚聲哀楚之徵也俄帝崩晋祚  
 自此頃矣又齊ノ明帝<sup>モ</sup>拘忌ノ性ニテ人ト名ヲ及シタル  
 ナリコレラハ音響ノ通ヘルヲ悉タルナレド和漢共ニ同シキ  
 ナリ

一名乗讀如ノ事

同抄云後花園院ノ御宇洞院左大臣

實熙公後ニ剃髮シテ東山左府ト申ス此公和漢ニ通シ每雙  
 ノ博學ナリ拾芥抄ヲ作ラレ其中ニ人名録トテ一篇アリ  
 名乗ノ讀如ヲ傳エ玉フ此讀如ノ中後世ニ解シエ又訓多  
 アリテ人々ノ意ヲ或ラエサレド今音訓省刻<sup>ク</sup>義訓正  
 訓<sup>ハ</sup>本文ノ五例ニテ推セバ明也其二ヲイハバ音<sup>ハ</sup>純<sup>ス</sup>ス音  
 シユコシジユワハムレバ<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>ニ<sup>ハ</sup>通<sup>ク</sup>韻也ヨウテスミトヨム  
 茂<sup>ハ</sup>モ<sup>テ</sup>冒<sup>ク</sup>韻音末ナルヲモクトヨムトモツトチ通音ナレバ  
 シ又訓<sup>ハ</sup>シ<sup>テ</sup>イ<sup>ハ</sup>バ<sup>ハ</sup>モ<sup>ク</sup>ハ<sup>ハ</sup>満也草木ノ茂ルハ山野ニミツル意  
 万葉人丸ノ哥ニ望月ノ満ハシケレトアリ望月ハ満月ナリ  
 郡<sup>ハ</sup>ク<sup>ニ</sup>グ<sup>シ</sup>錢<sup>ハ</sup>蘭<sup>ノ</sup>如<sup>シ</sup>正<sup>ハ</sup>治<sup>ハ</sup>ル<sup>ル</sup>田<sup>ヲ</sup>治<sup>ル</sup>ヲハルト云古事  
 記ニ新墾<sup>ハ</sup>万葉ニ新治トカリ<sup>成</sup>シ<sup>ケ</sup>。尔雅ニ山ノ重ナルヲ



一成二成ト云九成ノ臺トハ九重ノ事ナリ **枚** ヒラ。一枚ノ  
コトシ葉同シ日本記ニ葉盤<sup>ヒラテ</sup>。省ニハ **玄** 公カノ略天  
ノ高キニ **扶** 又ケ。タスケノ略 **諦** アキ。アキラカノ略審諦  
ノ義 **禮** イヤ。イマテヒノ畧。義ハ **朝** トモ。朝廷ハ百官相  
友タルノ義 **寅** 僚 トモ。同役ノ義 **知** トモ。舊知知己ノ義  
**五** トモ。竹伍ノ義相組ナリヨツテミナトモトヨム。本文トハ  
**孝** タカ。孝経孔安国カ序ニ孝者人之高行也トイフヨ  
リ出ツ **賢** カタ。像ヲカタトヨムト同シ **論** 語ニ見賢而  
而思齊<sup>ヒシカラシ</sup> トイフヨリ出ツカタル義 **質** ノ字ノ誤ニアラ  
ス **仁** ヒト **義** コシ中庸ニ仁者人也義ハ宣シト云ヨリ出マ  
リ。大抵右ノ五例ニ **撰** <sup>ヨリ</sup> ナリ此外常ノ訓ノ字注ニ及ハズ

一名兼ノヨミ上下ニテ違事 同抄云名兼ノ訓上下ニテカハルトハ  
タトヘハ朝ノ字アサトヨミ。トモトヨムアサハ朝夕ノ朝ナリトモハ  
朝廷ノ朝ニハ百官省<sup>アツク</sup>ヲ同シ司ヲ共ニメ相友名ノ義アリ寅  
僚モ同役ノ一也仍テトモト訓ス又朝ノ字公家武家ニテ  
カハリアリ字ノ上下ニテヨミ異ナリトイヘリ此言非シ義朝  
ノ字ニ朝長アリヲキ所上下アレドカハルニシト物部ノ翁ハ  
イヒ玉ヘリ其余推テ知ベシ  
一名兼通ノ字ノ事 同抄云通ノ字ノ起リハ中世ヨリヲカク  
ノ事ナリ父祖ノ名ノ一字ヲ截テ上ニモ下ニモ用ルナリ又曰  
仁ノ字ハ水尾帝ニ始リタニヒテ後冷泉院以後連綿シテ  
御名トナル○又曰足利氏ハ世々義ノ字ヲ名ノ上ニヲキ佐々



水氏ハ細ノ字ヲ名ノ下ニシキテ通字トス中夏春秋時  
楚國ハ世々熊字ヲ名ノ上ニシキ六朝ノ王氏ハ之ノ字ヲ名  
ノ下ニシク和漢共同シ○貞文云頼光頼房頼家頼光  
頼信皆通字也或ハ名ノ上或ハ名ノ下ナリ又頼朝頼家  
実朝頼經皆通字也北条氏ハ時政ヨリ子孫時ノ字ヲ  
通り字トス赤衛家ハ衛ノ字ヲ通字トス

一名兼ニ毒説ル事 同抄云名兼ヲ衛家ニ其術ノ  
神キナクニセントテ昔ヨリ人ヲ誑カストアリ奥福寺ノ玄昉入  
唐セシ時彼國ノ人玄昉ハ還ゲル七ノ音ニヒビク國ニ還ラハ必  
亡ビント云シガ果シテ帰朝ノ後筑紫觀音寺ヲ藤原  
廣嗣ノ靈トシ捉トシテ玄昉ガ頭カサバ奥福寺ノ唐院ニ落タリト

又壽永ノ頃天台座主明雲僧正法住寺ノ御所ニテ茂  
仲ガ將猶六郎親忠ガ矢ニ中リテ横死シテフハ明雲ノ  
明ハ日月ノ下ニ雲アリテ光ヲサフル故ト右ハ元亨親書  
盛衰記ニ出タル人ヲ堪囊抄ニ所會シタル毒説ニ名兼  
ノ及ニ涉リタル事ニアラズ且玄昉ハ正ニ還亡ハワレシ夏  
音各別ニメ音御音カヨウナレ又明雲ヲ及セハ文ハ日  
月星辰ヲ天文ト云ヒ道德礼樂ヲ人文トス又ハ文徳文章  
文物ト云至テ貴キ字ニ誠ニ座主ノ職ニ稱ハリ玄昉ノ  
ハ親書ヨシシラ兵シテ尽セリ明雲ハ大慶ノ禁ル禍池魚ニ  
及ヘルモノナリ其實ハ宿寛ナルベシノ社撰ナルヲ知ベシ又茂  
朝ノ及鴉カウフク也此鳥成長ノ親ヲ殺ス茂朝子トメ父鳥



美ヲ殺セシハ歸字鴉ナレバトイフ天氏朝ノ反ハ竟ノ竟  
ハ聖王ナリ美朝ニ竟ノ盛徳アリマ又為朝ヲ反セハ鴉ト  
ナル為朝子トメ父ヲ殺シタルトイリマニト妄説ナルヲ知ヘシ  
凡カヤウノトハ道士ト師ノ腐説ナリ慎テ信ズベカラズ  
一字ノ事 同抄云元服メ名ヲ付テ中夏ニハ子生レテ三  
月ニシテ父母コレニ名ヲ命名ハ終身自稱モノ既ニ弱ニ十  
リ元服ヲ加フルトキハ冠履ヲ請メ字ヲ命シム字ハ他人  
ヨリ我ヲ呼フ稱シ其礼儀礼記ニ具レリ本邦ニモ元  
服ノ礼古記ニ見エタルハ天子ハ加冠理髮三公務メ玉ヒ  
幕下ハ執權ノ御役也最重キ嘉礼ナリカレバ下庶民  
ニテ元服ハ成人ノ初ナレハ此時名乗ヲ命シ但中夏ニハ

幼童ノ時名ヲ余元服メ字ヲツクテナレド本邦ニハ古ヨリ  
名乗ハカリニメ字ハナキナリ古人ノ中タゞ紀長谷雄ノ字  
寛三清貫ノ字ハ耀文屋康秀ノ字ハ琳菅聖廟ノ字ハ  
三ト申奉ル僅ニ此儒臣ノ字ノミ後世ニ聞エ玉ヘリ今ノ世  
ニハ名ヲ実名トイヒ名乗トモイフ字ヲ假名トイヒ俗名ト  
イヘト礼記ニ冠而字之敬其名セトイヘル字ニハアラズト  
知ヘシ〇貞次云何太郎何次郎何三郎ト云名ハ昔ハ元服ノ  
日余之<sup>ツケ</sup>是ヲ烏帽子名ト云字ニ似タリ何兵衛何石門何  
左衛門ハ官名ヲ犯シタル也字ニハ似サルナリ  
一名ト諱ノワケノ事 同抄云名ヲ諱ト云フハ正字通云  
既死<sup>イム</sup>諱其生前之為故曰諱字彙云生曰名死曰諱ト



アリテ生前この名トイヒ死後ハ諱トイフ三代八周ノ代ヨリシ  
ニ故ニ碑碣ノ類ハ某ノ諱ハ某トカリベシ生者ハ不敬ノ  
敬ベシ天子ニ御諱アルハシハ北富唯后ノ神皇正統記ニ  
仁明天皇諱ハ正良是ヨリナキ天皇ノ諱多クハ乳母ノ姓ヲ諱  
ノ字ニ用ラル此帝ヨリ正シク諱ヲ立メマフトアリ乳母ノ姓ヲ  
用ヒラルトハ桓武帝ノ御諱ヲ山部平城帝ヲ安殿嵯峨  
帝ヲ神野淳和帝ヲ大伴ト申奉ルヲイフ吾国ニ生レシ  
人ハ敬テ知ルヘキナシ○貞天云仁明帝ノ正良ハ御名也  
崩御ノ後ニ正良ヲ御諱ト云ナリ御在世ノ時御諱トハ  
云ガルハ桓武ノ山部平城ノ安殿嵯峨ノ神野淳和  
大伴ノ如キハ御幼名ヲ其ニ御成長ニ至リテノ御名ニ

ナサレシ也其名ヲ崩御ノ後ニ御諱ト云也今世ノ人悉ク  
心得テ貴人ノ御名衆ヲハ憚テ常ニ云ハル故御諱ト  
云フ物ト思ヒ諱テ存余ノ貴人ノ御名ノ一ヲ御諱ト云ハ  
是甚不敬ナル也生名人ヲ死人トスルハ失礼是ヨリ大テ  
ルハナシ

- 一字 万葉集曰有吉田連老字曰石麻呂
- 一五等ノ親儀制令ニ見タリ
- 一左樂右樂伎樂 左樂唐ノ樂也右樂ハ高麗百濟ノ樂也伎樂ハ吳國ノ樂也法會十トニ用ル樂也冬良公令ノ厨書ニ見
- 一豫衣 衣服令曰家人奴婢豫墨衣義解云謂豫者



櫛木実也。以椽。漆。繒。俗云 **繒** 此字集 椽衣也。○日本纪

持统天皇七年春正月辛卯朔壬辰。是日詔令天下百

姓服黄色衣。奴皂衣。○櫛樹ハクヌキ也。櫛実ドクリト

云。此ヲツキクダキ。煎シテ。黑色ヲ染ル也。○菩薩戒記。椽

色以五倍子鉄醬。染シトアルハ。後代ニ至テ。櫛実ヲ用

スシテ。其代ニシハ。ゴロ。漆ニシタルナリ。

一 衲 リョウ 褱 カケ 衣服令武官礼服。條云加 カ 繡衲褱。美鮮云

謂一片當背。一片當胸。故曰衲褱也。○和名抄云衲褱

唐韻云褱 音 當。兩褱衣名也。和名云兩褱 今指或作衲褱

其一當胸。其一當背也。唐令云慶善樂舞四人。碧綾

褱 上音若 褱 蓋反

一 八咫鏡 ヤタノカミ 咫ノ字ニ付テ。唐ノ寸尺ノ定ヲ引テ。説クハ。附會ノ

説ナルベシ。神代ニハ。文字ナケレハ。唐ノ書モイマタ。渡ラサレハ

唐ノ事ヲ以テ。説クヘカラス。神代ヨリ。ヤタノカミト云名。分リ

詞ニテ。ツタヘ来テ。文字ナキヲ。後ニ文字ワタリテ。八咫ノ字ヲ

ソノ詞ニ付テ。アテタル。愚按ヤタト云フハ。八年ナルヘシキヲ以テ

ハカリテ。鏡ノ寸尺ヲ云ヒシナルヘシテ。トタト音相通ナリ。

一 水干ハ クヒカミ 鏡ノ寸尺ヲ云ヒシナルヘシテ。トタト音相通ナリ。

ヨミテ。タリクヒニシテ。モキル。直垂ナドノエリ。如クニナル。永綯抄

云。上下水干ハ。幽玄ナル。間也。六布衣ノ前後ノミ。シカキ物。クヒカミ

ヲ内サミ。折テエリ。ノゴトクニテ。着候ヲタリクヒト云。タリクヒニ

鈕ヤリタリクヒト云。右ノ鈕ヲ肩ヨリ。後ニ付テ。左ノ鈕ハクヒカミ



ノ折伏ヤタルサキニ付テテノ袂ヨリ取出テ前ニスガカヘテユフベ  
シ馬ニ乗ルハ右ノ紐ヲモ後ヨリ前ニ回シヤウニユウベシ○負  
志云々リクニ紐アリト云ハリビカニヒモアリノ書誤ナルベシ又タリ  
クヒナラハ右ノ紐ヲ一如此ノ文ニテハタリクビノ時ニモノ付ヤウカハ  
ルヤウニキユレヒ本文ノ心ハクビカニノヒモヲソノニ付ナラサズシテ  
タリクビノ氏ノヒモノムスビヤウノチガヒヲ云ニ本文ノカキヤウワロキ  
一書御座御劔 今世ノ御劔ハ銘アリ豊後行平ノ作也行  
平ハ紀新太夫ト云是後鳥羽院建久比ノ作也古ヨリ研セラル  
一ハナキ例ナルヲイカナルニカ先年研セラレシニ平河弥研ニヒラ  
セケレハ其賞ニ伊勢大椽ニ任セラレケリ銘アルヤト御劔アリ  
ニニ無銘ニ候ヨシ申上タリトゾワガト無銘ニシテ作者知レズト

甲傳ヘタルニ無銘ノ由申ケルトシ酒井氏本河弥ニ尋ラレケレ  
ハ豊後行平ノ銘アルヨシ答タリトゾ酒井氏ノ於ナリ  
一白鳳ノ年号又朱雀ノ年号 古語拾遺ニ難波長柄<sup>ナカハ</sup>豊前  
朝白鳳十四トアリ是ハ白雉<sup>ハクシ</sup>トヲ傳字ノ誤ナルベシ續日本紀  
卷九聖武天皇 神龜元年十月記曰丁亥朔治部省奏  
言<sup>中略</sup>詔報曰白鳳以來朱雀以前年代玄遠尋問難明<sup>ニ</sup>是  
ハ白鳳ト朱雀トノ間年代ハカニ遠ト云ト白鳳朱雀以來神  
龜元年ニテノヲ云ニアラヌ一説ニ朱雀ハ朱鳥ノ誤ナルヘシト  
云日本紀天武ノ九年七月癸未朱雀有<sup>ニ</sup>南門ト云ト見タリ  
此時朱雀ノ年号ヲ建ラレタルカ日本紀ニ見エズ天武ヨリ六  
年後ニ朱鳥ノ年号アリ朱雀ニテモ朱鳥ニテモ同シ代也白



鳳モ天武ノ年号セト世ニ傳レハ是又同代ナレバ年代玄遠ニ  
ハ非ス思フニ白鳳ハ天武ヨリモ遙ニ以前ノ号ナルハキ歟玄遠  
トアレバ僅ニ百年ハカリノ事ヲ云ニハアラシ東鑑卷七下朱  
雀朱鳥白雉改元ノアリ誤アリ略之

一 門松立事 其始詳ナラズ堀川院百首ニ顯季川松ヲ

イトナミタテルワノホドニ春明カタニ夜ヤ成ヌラント見エタレバ堀  
川院ノ御時既ニ此ヲアリシカバ其始ハ猶ゾ久シキヲナルベキ

一 堀川院百首ニ基後ノ水鳥ノ歌 モカニ川ウキ子ハスレド水

鳥ノシタノ心ハヤスケクモナシ 犬追物ノ書曰ニ檢見ハ水鳥ノ浪  
ニ浮タルカ如シトアルハ此歌ノ心ヲ以テカケルナリ

一 或人間何ノ書ノ中ニカアリ哥ニアニケトハ見ワモ出テヌレニ

ケリ結解ナシケルケフノ道カナ 此結解ノ二字ノ訓ヲ知リタル

人ナシ何ト訓ベキヤ 貞丈答テ曰是ハ我訓ナルベシ結ノ字ニ  
シタル又シバルノ義アリ 解ハトクルトヨム然レバシメトケナシシ是ヲ

中畧スレバシドケナシシタルニモアラズトクニモアラザルハ是シドケ  
ナキニ雨<sup>アメ</sup>ツキタリト見テガウ出テヌレタルハシドケナキ也

一 驛路鈴 堀川院百首ノ題 匡房ノ哥 會坂ノ園ノセ

キモリ出テ見テ馬ヤツタヒニ鈴キユナリ

一 糯米<sup>モチ</sup>ヲ炒リテ白クセカヘリタルヲハセト云正月二日ニハセ賣  
ル高人出ル此事何ノ故ト云フヲ知サリシニ或人云三嶋明神

ノ池ノ新ハ明神ノ使者ト云傳ヘテ毎年正月元日二日  
ニハ彼池ニハセテ時キ散シテ新ニ食シタルアリ正月ハセヲ



賣ルハ彼神夏ヨリ奉起ルナルベシト実ニサモアルニヤ  
一今様

花 春もやよみののけかしのよもりのみえはせの花

ももろのさくらぬきのみもなかりたれ

郭云 花さくらもにりやのわらわもあつたれ

さされも月あにさくらもさくらあつたれ

月 秋のさくらもさくらもさくらもさくらも

そさけり月さけのさくらもさくらも

音 春のさくらもさくらもさくらもさくらも

らののさくらもさくらもさくらも

一或人問鄧曲ハ何人するゾ。貞又答スベテ哥ヲウタフノ

ノ物名也催馬樂今様其外何ニテモウタフハ鄧曲トテ定リ  
ル哥ハナキハレノ草子梁塵秘抄ノ鄧曲ノ詞コト又アハレナル野  
穂ニ云鄧ハ楚國ノ都ニ文選ニ有歌於鄧中者云コレヨリ哥  
謡ヲ鄧曲ト云也

一判 押字ヲ判ト云印ニ對シテ俗ニハ書キ判トモ云押字ヲ

判ト云ハ上右ヨリノ事ハ職制律云ハ公文有本案事直而

代官司置者杖七十代判者杖一百ト見タリ此代判ノ判ノ

字ハ判断ヲ云ニハアテズ押字ノ判ト云ハルナルベシ

一弓束 万葉十一梓弓弓束卷易中見判更雖引君之

随意

一イサト云詞サノ字ヲニゴリテ云ハ人ライガナフ詞也又サノ字ヲスミ



テ云ハタトヒト云詞ニ 万葉第二ノ巻ニ 人者 縦念息登母

玉鬘 影尔所見 乍不所忘 鴨ト見タリ 縦ノ字ヲイサトヨノ

リタトヒトヨム字ナリ 万葉ニ不知ト書テイサトヨム所モアレヒ

縦ノ字ヲヨシトスベシ 人ハイサ心モシラズフルサトノ花ガ昔ノカニ

ニホヒケルモ同断 ハハイサラ人不知ト云トスレハ下ノ詞ノ心モシラズト同シ  
トニテ重言ノ人ハ縦ト云トスレハ 菱穂ナリ

一 續古今集 前大僧正定圓 山ツカクナニカ庵ヲムスアベキ

心ノウキニ身ハカクレケリ 面白キ哥ナリ

一出納 官名 雅亮装束抄上卷 五節所ノ余 具火桶ノ前ニ

スイナフサウ 柳 カイヲマナイ 管 バガフタニヲキテ云 スイナフト唱ル

ト古義ナリ スイヌイトヨムハ後ノ一カ今世公家ニテシエツナフ

ト云ハアヤニリナリ 壺井氏ハスイヌイト訓ス據アルベシ

一 蘭ラニト云ハラシノ轉語ニテ字音也 菊キクト云モ字音也 我國ニ

ナクテ外国ヨリ来ル物ナレバ字音ヲ用ユ 紫苑ヲシヲニト云モ

亦字音也 是又外国ノ物ナルベシ 按スルニ 蟬セミト云フハセンノ音

ニ近シ 蝶テフト云ハ字音ニ同シ 蟬蝶ナドハ外国ヨリ渡リ来

ル物ニハアラジ自然ト字音ニ合タルナルベシ 我國ニテキ虎ヲト

ラトヨミ 豹ヲナカツカミトヨミ 象ヲキガトヨムハイブカジ

一 神道ニ 枝ト云ハ 織ヲハラヒ除クヲ云也 中臣ノ枝ハ 其時ニヨム 辞

也 中臣枝ノ詞ハ古キ物也 枝ノ詞ハ只中臣枝ハカリナルベシ 三

種大枝ノ詞ニ 坎良震巽 離坤ハ乾ト云ハ 易ヲ以テ作り

タル詞ナレハ 我國ノ枝ニハアラズ 又六根清浄ノ枝ハ 仏

法ニテ作りタル也 六根ト云フ一ハ 仏法ニテ云フ詞ナリ



皆我國ノ支ニアラズ後代ノ人ノコシラタル後也後ハ織  
ヲハラヒ清ムルヨリ外ノ一ニハ用ニタズシカルニ神道者  
ト云輩祈禱スルトテ僧徒カ仏經ヲヨムニ子ヲシテ種々  
ノ後ヲヨムハオカシキ一ノ後ハ織ヲハラフバカリニテ惡事  
災難ヲハラフモノニハアラス仏者ノ百万遍千卷陀羅尼  
ノニ子ヲシテ千度ノ後一百度ノ後ナト、イカメシゲニ云ハ  
笑フヘキ一ノ千度一百度ハクドキ一也織ヲハラフニハ  
一遍ニテサウリト清ムル一又後ハ神ヲ拜ム人カ神事ニ  
アツカル人ノ織ヲハラヒ清メテヤルタメノ後ハ然ルニ神  
前ニ向テ後ヲヨムハ神ノ織ヲハラヒ清ムルガ如シ神  
躰ニハ織アルニシキ也ニウケスキハ袈裟染ノニ子也

鈴ハ金剛鈴錫杖ナドノニ子也ト或人ノ云シゲニナルトツカシ又神  
道加持ト云フモ心得カダシ加持ト云フハ真言宗ナドノ僧ノスル  
アサニシキ也ナリ又神道者ガ祈禱ノ札ヲクバルモ有リ是又  
仏者ノニ子也神代ニハ文字ナシ神代ヨリ相傳ノ道ナラハ祈禱  
ノ札ナド、云フハアルニシ其札ニ朱印ナト押スノモ亦神代ニハアル  
ニシキ一ノ是又仏者ノニ子一唯一ノ神道ト名ル者モ祈禱  
ノ札ヲクバル一是皆高天ガ原ヨリモ我が腹ヲ一大事トスル  
心ヨリサニクノ事ヲスル一又神道者ハ神秘ト云フヲ專言  
フ也何事ヲモ惜ミカクシテアラハ云ハヌヲ神秘トス神ハ正  
直ヲ以テ道トス惜ミ秘ルハ邪曲ニシテ正直ニアラズ夫神ハ  
目ニモ見えズ耳ニモ聞エズ益ク歛ト思ハハ其冥アリテアラハ



ニ見エスアラハニ聞エズカクシテ知りガタキヲ名ワケテ神秘ト云  
シ惜ミカクスヲフ神秘ト云トハ大ニ違タルナリ又神道ノ書  
ニ冥加。勸請。因縁。果報。悟。本地。垂迹。加持。衆生。方便  
ナドハ云詞其外スベテ仙家ノ詞ナリタル書ハ皆偽書也西  
部習合ニアラザル唯一神道ノ書ト云者ニ同々仙語交々  
ルアリ心ツカスシテ仙法ノ語ヲ用タル是偽書ノ證也

一西部習合ノ神道ト云ハ神道ニ仙法ヲ交合セテ本地垂迹ト  
云トヲ云シラヘテ日本ノ何ノ神ハ何仙ノバケテ来リタルナリト  
云フ類ノ書ヲ云皆偽也此西部習合ハ神道者モ儒者モ甚憎  
ム者ナリ又別ニ一種ノ西部習合ノ神道アリ是ハ神道ニ儒道  
ヲ交合セテ周易ノ道理ヲ以テ神代ノ書ヲ説キ五常五

倫ノ道ヲ附會シテコシラヘタル者アリ此西部習合ハ皆ムル  
人ナリ憎ム者ナシ○貞丈按日本書紀ノ神代卷ヨリシテ上古  
ノ書ニ神道ト云名目無之後ニ儒道仙道ト云名目アルニ  
ヨリテ神道ト云トコシラヘ出シタルモノナリ

神道ニ字用タルモ是ニ神ヲ祭ル道ヲ云今世ノ神道ト云モノニアラス  
一伊勢神宮ノ秘書ト云者十二部有之○倭姫余世紀一卷  
或三卷トス一名太神宮本紀ト云五月麻呂撰之○宝基本紀  
一卷○阿波羅波余紀一卷一名御鎮座次第紀ト云フ○飛  
鳥本紀一卷一名御鎮座本紀ト云○太田余本紀一卷一名御  
鎮座傳紀又猿田彦余紀トモイフ以上コレヲ五部ノ書ト号  
ス○神名秘書二卷一名神名甄録ト云○神祇本源十  
六卷以上二品ヲ五部書ニ合セテ七部ノ書ト号ス○心御柱



記○古老口實傳永正記○度會官年中行事○度會  
氏系圖以上五品ヲ七部書ニ合セテ十二部ノ書ト号ス此書  
皆仙家ノ語ヲ用ヒタル詞アリ實録ニテラス尾張國 東照宮  
ノ神職吉見左京大夫其傳作ヲ毎スルノ書アリ○神皇實  
錄○伊勢風土記○大織冠神祇啓白後○御鎮座本縁以  
上亦伊勢ノ秘書也ト云此外猶多カルベシ大祇傳書多シ  
貞丈瑛神代ニ文字ナキトハ云ニモ及ハズ人代ニ至テモ應神  
天皇以前ハ吾國ニ文字ナシサレバ上古ノ事ハ記シタル書モナ  
シ應神ノ朝ニ文字渡リ来ルトイハ氏儀ニ文字ニ熟シテ書籍  
著述ニ程ノ事ニ至ルベカラズ神祇ノ事トドテ書記シタル  
仁徳天皇ノ御宇ヨリ以後ノ事ニルベシ仙神習合ノ書儒神

習合ノ書ハ後代ニ出来ル者ナリ  
一上卿 史記周本紀曰王以上卿（皇國ニテ華ノ上音ノ納言ヲ上卿ト云）禮管仲（注社預曰国子高）子天子所命為存守臣皆上卿也  
一陪臣 見干論語又史記周本紀曰陪臣（管仲語也）敬辭注服虔曰陪重  
也諸侯之臣於天子故曰陪臣  
一神道ハ神祇ヲ祭ルノ道也朝廷ノ祭法アリ諸社ノ祭法アリ  
皆古法ヲ守テ改メズ是ヨリ外ハ神道トイフ一有ベカラズ上  
古朝廷を為シテ雜事多カラス只神祇ヲ祭ラ以テ一大事  
トシタル故ニ政ノ字ヲ訓シテマワリゴトト云也然ルニ神道トテ  
人倫ノ教ヲ立テ正直ト云事ヲ宗旨トシテ五倫五常ノ道及  
土金ノ傳トテ敬ノ字ヲ守ル一トトテ説キ交ハルハ後代ノ



コシラヘ事也是神儒西部習合ノ神道也一余兼良公ヨリ傳レ  
ル神令ト云書儒道ヲ以テ作りタル者也近世山崎嘉右衛門岳  
加ト云フ儒者神道ヲ一派立テ神儒西部習合シテ世成興行  
ハル伊勢ノ神主出口延佳トドモ同シ徒シ此西部習合モ人ノ教  
ノ端ニモナルヲナレバ惡事ニモアラカレ氏貞ノ神道ニハアラス真  
ノ神道ハ神祇ヲ祭ル道ヨリ外ニ別ノ事ナシ祭法ハ朝廷ニ  
其有司アリ諸社ハ巫祝アリテ是ヲ勤ム常人ノ為スベキ事  
ニハアラス神祇ヲ祭ル事アラハ巫祝ニ就テ祭ヲ行ハシムヘシ祭  
ヲ行ハシムヘシ祭法ヲ学テ私ニ行フベカラス日本紀神代卷ヲ  
見ルニ吾國ノ神人倫ノ道ヲ立テ天下ノ人ニ教ヘテ垂レタメ  
ヒニ事ハ曾テ見エスサレハ神道ニ教ノ道ヲ説クハ後ニ造作

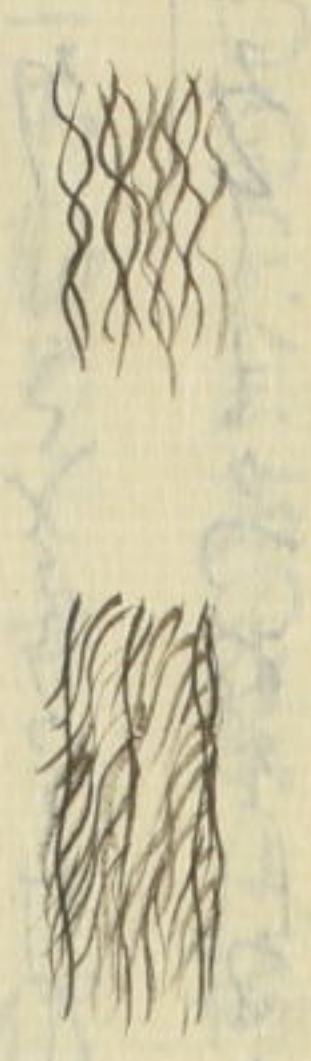
シタルモノハ天竺ニ仙道アリ支那ニハ聖人ノ道アリ日本ニハ教ノ  
道ナキニ後代ニ至テ神ノ教ノ道也トテ神道ト云フヲ建立  
シタルハ吾國ニ教ノ道ガナクバナキニシテ置ハ正直ニシテヨシ其  
道ナクテハ惡キニ古ヨリ儒ノ道ヲ用ルハ儒ノ道ヲ直ニ用テ  
事足レリ儒ノ道ヲ作り替ヘテ神道ト号スルハ不及ナリ  
一龍生九子ヲ潜確類書卷一百十四曰龍生九子不成龍各有所  
○蒲牢好鳴形鐘鈕上○囚牛好音形胡琴上○蚩吻好水  
形橋梁上○嘲風好陰形殿角上○鳳翥好文形碑  
碣上○霸下好負重形碑座上○狴犴好訟形獄門  
上○狻猊好坐形仏座上○睚眦好殺形刀柄上  
負文云龍ノ子ハ龍ニ成ル是天成也馬ノ子ノ馬トナルガ如シ龍



ノ子龍成ラスト云ハ造化ノ道ニ違ル歟是妄説ナルベシ九子  
皆別ニ九父母有ベシ右九品ハ皆器物殿舎等ノ飾リニ彫刻ス  
ル所ノ獸類ノ名目ヲ舉クベシ

一長畳短畳 延喜縫殿寮式年料雜物ノ条ニ長帖十枚長  
席五枚又御服ノ床敷料ノ条ニ長畳八枚短畳四枚云々  
ノ上下ノ事江談ニアリ

一ウツラニキノ草コシラハヤウ白キ草ヲ太キ竹ニテモ木ニテモ卷  
ク卷シカサ子ズ巻テ細繩ニテ細ニ間ヲ置キ卷キ又其上ヲスナ  
カヒニニキヒシニナルヤウニ巻テワラトバゴノクキヲ火ニタキフス  
ベヨキホドニ色ノツクホドフスベテ繩ヲトキ去レハ繩ノアト白ク  
ナシ繩ヲ卷時繩ノ直ニナラヌヤウニウチラセテ細ニ巻ベシ



糸トハ如此 此草 ユガケトニスル也  
ニキテ後ニ繩ヲナサスガヨシ

一ホリケリ 赤漆右近ノ家集 たくつさぬのうへのぬが 圓白取  
のせむせむとてふらふのそめり 庭のか  
ふりしれり こととととのぬがとととのたまはりしれ  
○貞大云よりつらこの字ありてとてふりつらハカをわりしり  
とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて

一こり 同集 こととととのぬがとととのたまはりしれ  
とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて  
とてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとてつらとて







そこのいろふらありありのめをよとて ○貞丈云いゝまゝ  
今世童女ふりてめをびのいゝまゝとて子まゝなり  
をいゝなり

一ツバキノ花ヲ花瓶ニサスニ花日ヲヘテ流ルモノ也枝ノ本ヲワリカ  
ケテ山椒ヲ二三粒ハサミテ瓶ニサセハ花流ルトナシト云フイマ  
ダ試ミズ

一魚袋 或書云魚袋ハ長サ五寸幅一寸ハカリアル物也中ハ  
木也上六較ノ皮ニテ包ム表ニ金ノ鯛ノ形ヲ作りテ付ル鯛ニ  
ツラベ付 横幅七分ハカリモ有也左横幅ニモ長ニ鯛ヲ三  
ツ、シテ金ニテ目貫ノ如クニ有之也是節會行幸等政  
事アル時目眠ヲヌマウニトノミジナイ也鯛ハ夜昼共ニ子ムラヌ

物ユヘ公卿皆用之付ヤウハ皮飾ニテ魚袋ノ底ヘ緒ノサキヲ  
釘ニテ折コミソレヨリウラノ方ニ中ヘハシ魚袋ノ上ニテ  
底ノ如ク釘ニテ折付テ緒ノ先ヲ二ツニ割ツレテ両方ヘハシ  
左ノワキニテムスヒ置シ尤緒ノサキ見サルヤウニキテニ弟ニ  
○貞丈云子ムラナルヤウニトノミジナヒセトハイカハ眠ヲ誠  
ルタメノ者也ト云ヘシ

一太上皇史記卷六秦始皇本紀曰追尊襄王為太上皇太子  
一餘五將軍維茂 今昔物語卷六曰今ハ昔実方中將  
陸奥守ニナリテ其国ニリダリケルニマシゴトナキ公達十六国  
内ノ者共此守ヲ饗食應シテ昼夜館ノ宮仕急タル事ナ  
カリケリ其以同国ニ平維茂ト云者アリ是ハ丹波守平



貞盛弟武藏權守繁盛カ子上總介兼忠カ嫡子也  
貞盛思フ子細アリテ甥<sup>甥</sup>甥ノ子ヲアツメテ養子ニシケ  
ル維茂ハ就中若カリケレハ十五郎ニタテ、養ケレバ字ヲ  
餘五ノ君トイヒケル

一 鷲羽斑文偽物 蝦夷隨筆曰蝦夷人ノ生質正直也ト云

一 厄高船行通ヒテ交易ニ馴タル蝦夷人ハ偽謀ノ事アリ  
中略 近來真羽ノ斑似出來レリ斑ノキレ様ヲ以テ稱美  
スルヲ知テ烟ニテ熏シハ熊ノ斑ヲモ稱ルト也

一 田月 史記卷六秦始皇本紀曰宣公享<sup>ウケル</sup>國十二年居

陽宮<sup>陽</sup>葬<sup>葬</sup>陽初<sup>初</sup>志<sup>志</sup>田月

一 蝦夷鐵<sup>鐵</sup>先<sup>先</sup> 夷經ノ曾ノ鐵形也ト云傳レ氏明九證モ

一 蝦夷隨筆曰蝦夷人淨琉璃ヲ語ル声音ハ稱名唱  
ル声ノ如シ<sup>中</sup> 淨琉璃ハ仙臺淨琉璃ノ音ニテ緩リト語  
リタル者也尤早メテ語ル所モ有リト見エテ音ヲ張攻  
テ語ル所モアリ<sup>略中</sup> 淨琉璃ノ中ニ夷經ノ事アリ夷經  
幼年ノ時小船ニ乘テ蝦夷へ渡リ八面大王ノ娘ト通シ大  
王或時狩ニ出タル隙ヲ伺ヒ秘藏セシ虎ノ巻物ヲ盜ミ  
取り又小船ニ乘テ本國へ逃歸シテ大王狩ヨリ歸テ追  
掛シカ氏津輕地ニテ暴風ニ逢ヒ吹返サレタルト云フヲ  
作りタリト云ヘリ又或筆記ニ東蝦夷クルト云処ニ夷經  
ノ詞アリ今ニ絶ス祭ル此処ノ蝦夷地他村ノ蝦夷モ崇  
敬スル也<sup>人ノ名</sup> ヤクシヤインガ時出タル<sup>人ノ名</sup> 則クルノ蝦夷也



ト云リ此事尋ケルニ敢テ其事ナシコトビシカ村ハナルト云処ニ山中  
ニ岩窟アリ古仙人ノ住ケル跡ト云傳ヘタルハアレ氏系経ノ詞ニテ  
ハシト云ヘリ。ナルハクルノ唱遣ナルヘシ西蝦夷地六条ノ間ト云処ニ女  
慶崎ト云処アリ。氏経此所ヨリ北高麗へ渡リ玉フトモ云リ  
曼亦サバカナラズ東蝦夷地ニ歛先ト云物アリケルヲ氏経ノ曾  
ノ歛形トテ宝物トシ崇敬セシ蝦夷人有ケル由氏経ノ曾ト  
云フ所ノ証トスベキヲモナク只云ヒ習ハセシト聞ユ古奥羽戦  
争ノ時ハ落人共多ク蝦夷へ逃行ケルニ、夷人ヲ欺キ古来  
英雄ノ名ヲ借リ威勢ヲ強クシタル者モアルベシ 貞丈ニ奥羽戦争  
トハ頼義家ノ  
時ヲ指ニ非ス其後ノ  
ト云ナルヘシ 今蝦夷地ニ兵具ノアルハ是ヨリ渡シタルニテ八十  
ク落人ノ兵具ノ残りタル也ト云ヘリ歛先ト云ハ歛ノ形セシ物ニテ

廻ニ巴ヲ彫入テアリ則歛ノ示柄ノ成ル物ノ如ク世ハ松前ノ者共  
歛ガキト云習セシ者ナリ曼モ蝦夷ノ細ニアラズ以前カラフ  
トヨリ渡リタル成ヘシ此歛先倒ニ見ルトキハ曾ノ歛形ノ如ク  
故氏経ノ歛形ト云傳シヤ夷人宝物トナシテ神ノ如ク崇敬セ  
リ蝦夷中多ク物ニアラス希ニ所持セル夷ハ秘シテ深ク隠セ  
リ氏経ノ事ヲ夷言ウキタルト云ヘリ是ハ浄琉璃ニ有ケル者ト  
同ニ此浄琉璃ノ根元如何シテ作ケルヤ此文句ヲ翻釈セバ大略  
知ヘキ事也

○貞丈今按氏経奥品衣河ノ館ニテ自殺セラレシヲ其首ヲ  
斬テ酒ニ浸シテ鎌倉ニ送リシ由東鑑見テ方リ東鑑ハ鎌倉  
ノ実録也虚事ヲ記スヘカラズ然レハ氏経ノ蝦夷へ渡ラレシ



ト云松前ノ土俗ノ謬傳ニ實録ノ東鑑ノ記事ヲ捨テ土俗ノ謬傳ヲ取ル可ナラス蝦夷ニテウキクルミト云者ト云經ハ別人ナルベシ此方ノ人ハウキクルミハ何人ト云一ヲ知ラス蝦夷人ハ經ハ何人ト云一ヲ不知ヲ經蝦夷へ渡リタリト云俗説アルニ依テ松前ノ人強テウキクルミヲ經ノ事也ト附會シテ云傳タルナルベシ糸慶崎ト云地名モシケイハ夷言ニテ武蔵坊ノ事ニハアラガレヒ自然ニ其名ノ似タル歟又ハ其地名ヲ經ノ一ニ附會シテ松前ノ人ノ号シタル歟又カノ淨琉璃ニウキクルミ幼年ノ時小舟ニ乗テ蝦夷へ渡リシトアルヲ松前ノ人經幼年ノ時ト云ヒカヘタルナルニ經幼年ノ時ハ鞍馬寺ニ在リテ蝦夷へ渡リシト云ヒ元服シテ秀衡ガ家ニ居テ後

平家ヲ亡シ頼朝ノ勳氣ニ依テ奥郡へ下リ夜河ノ館ニテ自殺セリ續太平記ニ應永十八年奥郡ノ住人小山西郎隆政後送ス鎌倉執事上杉氏憲討キテ差向ケルニ小山西ヲ破テ津輕ニ走リ蝦夷ニ渡ル其勇威ニ夷人畏服ス而後酋長ノ婿トナリテ天命ヲ以テ終リタリ夷人詞ヲ建テ祭之其詞今尚存スト見タリコノ事ヲ謬リ傳ヘテ經トスルベシ彼錄先モ小山カ物ト云レモ知ヘカラス

一上古中古近古 予或儒士問テ曰幾年以上ヲ上古トシ幾年以下ヲ中古トスルヤト儒士答曰未考ト後三条兼良公ノ日本紀神代卷ノ條系疏ヲ見シニ其事ヲ云シタリ其文曰古ノ鏡文ニ故也ト云識前言也徐曰古每文字口相傳也增韻ニ遠代



也又久也古有三時一曰上中下余指上古之時今以今觀之所謂易

繫辭傳曰上古結繩而治後世聖人易之以書契又曰上古穴

居而野處後世聖人易之以宮室後世聖人者謂伏羲已來帝

皇也孔子去伏羲僅得二千年而指羲前謂之上古又曰易之

與也於中古作易者其有憂患乎此謂文王作易之時

時孔子去文王又得六百餘年謂之中古故三古之說每定時

分自今而言則孔子之時亦可謂中古矣

一兄部 コノカウベトコム 下学集云力者之頭也ト見タリ庭訓往

來ニ兄部見タリ力者ト刺髪シテ賤役ヲ勤ル者也輿ヲ

カキ馬ノ口ト取也

一和漢朗詠集蕨ノ詩白樂天カ句紫塵ニキル懶蕨人拳ニキルト

俗本ニアリ モウキ 懶蕨ノ誤也塵ハ草ノ誤也俗本傳寫ノ誤ヲ傳タ

リ此章 下学集言語門ニ見タリ

一様ノ字ノ考 秋草ニ記シタレハ今重テ此ニ載セズ又其經記身

八判官御自害ノ余ニ ワカキニサマ 御子ト生レサセタ

マウカリアルベキナキリカヤ云々此其經記作者并ニ時代知

レズ同書第一卷端莫朝都落ノ余ニ本朝ノ昔ヲ尋ヌ又

レハ田村利仁將門純友保昌頼光漢ノ誓誓張良ハ武勇

トイヘ氏名ヲノミ聞テ目ニハ見ヌマノアタリニ藝ヲ世ニホドコシ

一万人ノ目ヲトロカシ玉ヒシハ下野ノ左馬頭莫朝ノ末ノ子源

九郎莫經トテ我朝ニナラビトキ名將軍ニテオハシケリ

之云右ノ文名ヲノミ聞テ目ニハ見ヌマノアタリニトイヘルヲ



以テ考ルニ爰經ノ代遠カラサル人記シタル物語ナルヘ  
ニサモナリテハ一ノアタリト云ハルニ應セサルナリ

一單騎 西土三代ヨリ春秋ノ代ニテハ車ニ馬六疋カケテ  
乘リシハ駟馬而驂ト云是ハ車ニカケズ馬一疋ニ乘ル  
ヲハナカリシナリ馬一疋ニ乘ルヲ單騎ト云史記卷七項羽  
本紀ニ項王軍在鴻門下沛公軍在霸上相去四十里  
沛公則置車騎脫身獨騎ト見タリ此時既ニ單騎  
アリシ也獨ハ單ト同意也車騎ニ對シテ獨騎ト云也  
又同本紀項王乃上馬騎麾下壯士從者八百余人トア  
リ單騎ハ六國ノ比ヨリアリ

一沉香 日本紀推古天皇紀曰三年夏四月沉水漂著於

淡路嶋其大<sup>カ</sup>一團嶋人不知沉水<sup>木</sup>以交薪燒<sup>テ</sup>於<sup>カ</sup>寔其烟氣遠薰<sup>カ</sup>  
則異<sup>ト</sup>以<sup>テ</sup>獻<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>  
此以前ニ外國ヨリワタリタルハシサモアラズ  
漂著ナリ燒タリ氏記水ト云フハ知ルベカラズ

一木綿ノ事 古貝木綿也。閩人謂之吉貝。本名古貝。一曰古終。曰吉  
貝者。古貝之訛也。南史謂。出林邑干陀利等國。傳至閩中。  
其木高七八尺。種五六年。即枯。枯即芟之。至春其根復生嫩葉。  
其實有覆葉。其殼如檳榔。分為四片。或三片。中有茸絮。如  
鷲毛純。茸中有核。遇烈日絮乃凋。采而聚之。或彈以竹弓。或  
絞以輪車。是為木綿花矣。宋謝枋得詩。嘉樹種木綿。天河  
厚八閩。厥土不宜柔。晉書事觀辛。木綿收千株。八口不憂貧。  
○忠奇云。閩書南產志卷之上。見工是何公力。閩書百五十  
四卷ノ内卷百五十南產志也。寬延四年辛未夏六月南產志



ヲ和板ニス又忠寄按本草綱目卷三十六灌木部七十五丁ノ  
木綿ノ条ニ時珍曰木綿有二種似木者名古貝似草者名古終  
時珍ノ説ニヨリ古終ハ今作ル所ノ草綿ニシテ木綿ニアラズ○  
貞大云類聚國史卷百九十九殊俗部ニ桓武天皇延暦十八年  
七月崑崙人參河國ニ漂著ス木綿實ヲ持來ル同十九年其  
木綿實ヲ紀伊沙路河波讚岐伊与工佐及太宰府等諸國ニ殖  
サセラレシ由見タリ是右見タル木綿ハ今世ノ草綿ニアラズ夫  
木抄ニ衣笠内大臣ノ歌ニシキレニヤマトヒアラスカラ人ノウエ  
テレワタノタ子ハタエニキトヨルハ延暦ニワタリシ木綿ノタエタ  
ルヲ云ヘルハ貝原好古カ和夏始ニ文錄年中重テ木綿渡  
リシ由記シタルハ誤シ木綿ニアラズ今ノ草綿ノワタリタルハ

木綿ハ近年渡リ來リテ所々ニ種由傳聞ケリ又按獨行氏カ室町  
日記永祿年中ノ一ヲ書タルニ木綿一及代二百文ト云テ見ヘタリ  
又予ガ家記ニモ永祿比ノ記ニモナシリガ見タリ是等文祿  
ヨリモ前ノ事ニ天文ノ比ワタリ來リタル歟大永亨祿ノ比渡來  
歟永祿ヨリモ猶以前ノ事ニテアルベシ此木綿モ木ニ非ス草ニ  
一慎莫シニ俗語ニ物事猥ヲラガルヤウニ取リ治ルラシニクタルト云シ  
ニクト云字詳テラ思ヒシニ寛保癸亥年南溟ト云僧ノ著作  
シテ梓行セル續沙石集ト云書六卷アリ其第五廿六葉ノ  
坑ニ向テ豆ヲ燒テ食ケル物語ヲ述テ其事ニ付テ教戒ヲ記  
シタル詞ニ人ハ常ニ慎莫シニノ二字ヲ忘ルベカラズ慎莫夜行  
慎莫不思慎莫不孝等也ト云ヘリ慎莫ノ二字ハツシニテ



何々スルヲナカレトイフコトニ是ニテ 俗語ノシニニクノ二字始テ心ナ  
タリ近年ノ人ノ著シタル書ナリトモ書ヲバ見ヘキモノ也不慮ニ  
知見ヲ開クアリ慎莫ニ一字古ヨリアル詞ナリ

一 仏ヲホトエテハ敏達天皇ノ御宇ニ始テ仏法渡リ又重テ欽明  
天皇ノ御宇ニ仏法渡リニ我國ノ神ノ崇ニテ天下ニ厄病流行  
シテ人民多ク死シタリ熱氣ノ病ナルユヘホトホリケト云フ言ヲ中  
畧シテホトケト云ト云フ説アリ又仏法ハ煩悩ヲ解脫ス教ナ  
ルユヘ送ヒノ心ホドケルト云フニテホトケト云フト云一説アリ右両  
説ニニ附會ノ説ニ用ル莫ナカレハ仏ヲ梵語ニテハ 仏陀ト云又  
浮屠トモ書ク梵語ヲ漢字ニ写ス時梵語ナトト云テ漢  
字ニテ仏陀トモ浮屠氏字音ヲ假リテ写シタルニサレバホトケ

ハ 仏陀家トモ浮屠家ト云フ莫ニフタケモホトケモハヒフヘホノ音  
相通ニメトモ。タケツテトノ音相通也

一 拔萃 孟子卷之三公孫丑上篇ニ云出テ於其類拔萃其萃集  
註云拔時起也萃聚也ニ聖人同シ人ノ類ヨリ高ク出テタリ  
聚レル人ノ中ヨリモ秀テ拔出ル云意ニ書籍ナド又キ書ヲ集  
メタルヲ 拔萃ト称スルハ莠叶ハガラン歟

一 綾ノ種類 和名抄云有熟線綾長連続ニ足綾花文綾平  
綾等ノ名○貞丈云古書ニ縮線綾アリ浮線綾アリ回文綾アリ  
縮線綾ハ諸家ノ裝束抄等ニシラ地ノ綾ト云ヘル是也糸縮  
ミテシラアリ浮線綾ハ文ノ形ヲ糸ヲ浮ケテ  
織リタル也裝束抄等ニ浮文ノ綾ト云是也ハケオリノ綾ニ後代



ニ及テ卧蝶ノ七ト云故ヲ浮線綾ノ九ト称スルハ大ニ誤シ固文綾  
ハ紋ノ形ヲ糸ヲ浮ケスシテ糸ヲ沉メテ固ノ織タルヲ云ハ其装束抄等  
固文ノ綾ト云是ハスベテ故ハ緯糸ニテ織リ出ス其文ノ緯糸ノ  
シカラズシテ織タルハ浮糸オリト云是浮線綾也其故ノ緯糸ニ  
経糸ヲカラミテオリタルハ固文ノ綾也○又云壺井ノ織知ガ説ニ  
熟線綾ト云ハ縮線綾ノ変也熟ト縮ト音相同キ故也ト云是  
壺井ガ誤ナルベシ縮ト熟ト字音清濁異也糸ヲ特熟シテ織  
タル綾ヲ熟線綾ト云ヘシ熟ハ糸ヲ練リ熟スシテ練糸ニテ織タルハ  
熟線綾ニ練ラザル生糸ニテオリタルハ生線綾ナリ装束抄等  
ニス、シノ綾ト云ハ是ハ夏ノ装束ニ用元シ熟線綾ハ浮文固  
文ノ二種アリ生線綾ハ固文ハカリシ浮文ハナシ

- 一 絶 <sup>アシキヌ</sup> 和名抄ニ和名阿之岐沼唐韻ヲ引テ云絶縿 <sup>ハカ</sup> 似布也ト貞  
丈云絶ハ布ニ似テ糸フトクシテ悪キ縮ト云フニテアシキヌト云ナルベシ
- 一 調布 <sup>ツキナフ</sup> 和名抄ニ云豆岐屋沼乃ト貞丈云ツキトハツキモノシ諸国  
ヨリ年貢ニ納ル布也○調布テツクリト云訓アリ擬訓ナリ本訓ニ非ズ
- 一 庸布 <sup>ヨウフ</sup> 和名抄ニ和名見ヘズ庸ハ雇也ト字書ニアリ諸国ヨリ人  
夫ヲマヒテ京都ニテ用シ使ハルヲ庸ト云フ人天ノ雇ニ出サレ者  
ハ其代ニ布ヲ納メルシ其布ヲ庸布ト云其丈尺等ノ定法  
賦役令ニ見ユタリ
- 一 信濃布 <sup>シノノ</sup> 望陀布 <sup>マタマ</sup> 望陀布ハ延喜雜式ニ見タリ和名抄調布ノ条  
ニ有信濃望陀等望陀者上総国郡名也其鉢々他国調布  
頗別異故以テ所出国郡名ヲ為名也○貞丈云信濃ニシナト云木



アリ其木皮ヲ剥取テ細割テ糸ニシテ布ヲ織ル其布目甚色比  
キ物也色ハ赤クシテ黒ニアリ此布ニテ袋ヲ縫ヒ作テ米穀ヲ  
盛ル是ヲシナ袋ト名ク他国ニテ白布ニテ縫作テ米穀ヲ盛  
ル袋ヲシナ袋ト云モカノ信濃ノシナ袋ニ准シテ云フ也古代信濃  
布ト云シハ右ノシナト云木ノ皮ニテオリタル布ヲ云フナルベシ  
一南天ト云フ木ハ本名南天燭也其性大寒ナルが故ニ毒ヲ解スル  
ノ功能アリ諸毒ハ比白熱ナルユヘ寒ヲ以解スル也又夏日食物ヲ  
貯ヘ置クニ南天ノ葉ヲ掩ヒ下ニモ葉ヲ敷ケバ食物クカルナリ  
味変セス又口中ノ病ハ皆胃熱ヨリ生レ也故ニ南天ノ葉ヲ煎シ  
ヒヤシテ合シ或ハ葉ヲカゲホシニシテ粉ニシテ付ヒハ瘡<sup>ユ</sup>ル也又葉ヲ  
食物ノカイシキニスルバ食物ヲ鮮シ又食物ヲ子ズ又婦人鏡

ノ下ニ葉ヲシキ或ハ物ノ氣ニカルレ南天ヲ見又ハ南天ニテ身ヲ  
折ラフヒナドシニシナヒニ用ル<sup>ハ</sup>南天ノ功能ニハアラス是ハ南天ヲ  
難轉ト取りテシテ難ヲ轉スルト云フ意ニテニシナヒニ用ルナリ是ハ  
物イマヒテスル<sup>フ</sup>也

一柏<sup>カシハテ</sup>手ハキヲウツ<sup>カ</sup>也柏ハ手偏也カシハト云字ハ木偏也柏手ノ拍<sup>カ</sup>  
手偏ナルヲ是ヲカシハテト神道者ノ云フハ文字ノトリチガハルベシ  
上古ハ唯手ヲウツト云ルヲ後ニ文字ヲヨシチガハテカシハテト  
云傳ヘテカシハテトヨク義理ヲ強テヨシヌ又テ其説ヲノブルナルベシ  
拍<sup>カシハテ</sup>ト字ノ形相似ナリ

一南庭 南庭 東鑑ニアリ沙石抄六ノ下正直之人室得事ノ  
条ニ宋朝ニイマシキ夫婦アリ餅ヲ賣テ世ヲワタリケリ有レ



時道ノホトリニノ餽ヲ賣ケルニ人ノ袋ヲオトシタリケルヲ見ケシハ  
銀ノ軟挺六アリケリ家ニモ午ノ帰又ニ合類節用ニモ軟挺ト  
リ南廷軟挺出所アルベシ未考

一三社託宣沙石集第六ノ下正直之人室得事ノ余ニ云ク聖  
徳太子ノ御コトハ謀計雖為眼前之利而終當仏神ノ罰  
正直雖非一旦依怙必蒙日月之哀<sup>アハレ</sup>コトナルカハアラン人フカリ  
コノ心ヲ存スベキナリ<sup>ニ</sup>○貞丈云三社託宣ノ中<sup>ニ</sup>天照大神ノ託宣  
ニ正直ノ語ヲ前ニシテ謀計ノ語ヲ後ニシ仏神ノ罰ノ神明ノ  
罰ト改メタリ又當ノ字ヲ蒙ニ改メ又哀ノ字ヲ憐ノ字ニ改  
タリ按ルニ古聖徳太子ノ古語ヲ記シタル書アリシタルベシ然  
ルヲ何者歟ソレヲ添削シテ天照大神ノ神託ニシテ更ニ八幡春

日ノ神託ヲ造リ添テ三社ノ託宣ト名付タルハ八幡ニ菩薩<sup>ミコト</sup>ヲ  
書タルモ正シカラス八幡ノ託宣ニ食<sup>ク</sup>鉄丸<sup>ト</sup>ト云ヒ座<sup>マ</sup>銅<sup>ノ</sup>燭<sup>ト</sup>ト云  
春日ノ神託ニ卯見ト云ヒ慈悲ト云フ語皆仏者ノ口氣アリ  
テ撒<sup>ハ</sup>シ是ト部<sup>ノ</sup>兼俱<sup>ガ</sup>類ノ仏神ノ兩部習合ヲ好ム者作  
為ル所ナルベシ一射ノ文甚拙シ信スル<sup>ト</sup>勿レ右沙石集ノ作者  
ハ梶原景時ガ孫ノ長任法師也又云後代ノ神道者ノ意ニハ正  
直ハ一旦ノ依怙有ラガレ故ニ謀計ヲナシテ眼前ノ利ヲ貪見  
者ニ聖徳太子ノ語ヲ天照大神ノ神託也ト誣ヒ八幡春日ノ神  
託ヲ妄作スル正直ニ非ズ心<sup>ヲ</sup>流<sup>ル</sup>人ト云フ也卯見ノ人トス<sup>ニ</sup>笑<sup>フ</sup>ズキ  
トシ

一沙石集卷三之下 梶尾上人物語ノ余ニ云當世道世ノ道ノ字



シアラタメテ貪世トカクベキニヤコノ心ヲ思ハバケ侍リ

一 道世ノ道ハ時代ニカキカヘシムカシハノガルイマハムサボル

一 止観ニ云 和光同塵ハ結縁之始ハ相成道以論其終右同書和

光同塵本ハ老子経ヨリ出タリ老子経曰和光同其塵右同書

一道風カフルハ筆ト云俗ニ云道風ハ能書ナリレ故病ニテキフルハ

タレト夫ニ拘ラズシテ善ク書タユヘ道風ガフルハ筆ト云傳ヘタリ

ト〇負丈云是アヤマリハ筆ヲ取テ文字ヲ書クイヲ揮毫フルヤウハ

揮筆ト云シ揮ハフルフトヨムコ文字ヲ書ク時筆ヲ勤カス

ヲ揮ト云シ能書ノ筆ツカヒハ健スツカヒシテ軽ク分ラクユヘ揮トハ云

ヒタルハサレバフルハ筆ハ道風一人ニ限ラヌ又ハ病ニテキノフル

ヘタルトニハアラス

一 世ノ諺ニ兄弟ハ他人ノ始ト云フアリ思ハ人ハ悪ク心得テ兄弟ハ

他人モ同シト云フ也ト思フハ誤也兄弟ハ共ニ父母ノ骨肉ヲ受

テ同躰ナル者ナレハ兄弟ホト親シキハナシ然レト兄弟ノ子生レテ

ハ伯叔父甥姓トナリ其子又子ヲ生又其子ガ子ヲウミシタミ段々ニ親

ミラトクナリ血脉ノワヅキ遠クナリテ果ハ他人トナルユヘ兄弟ハ他

人ノ始ト云也

一 世ノ諺ニ名ヲトウヨリモ徳ヲトレト云フアリ思ハ人ハ徳ト云

フ財宝ノ利ヲ取ルトト思フハ誤也徳ハ利徳ノトニハアラス人倫

ノ道ヲ行フノ徳ハ仁義礼智ヲ人ノ徳ト云シ名ヲ取ランヨリモ

仁義礼智ノ徳ヲ取レト云フハ取トハ我ガ物ニスルト仁義礼智

ノ徳ヲ取レバ求メズシテ名ヲモ取ルナリ



一馬乗ルニ走リト早走リトノ二ツノ名アリ走ト云ハ今世ニ云フノリノ  
ヲシノリトハヒヤウシニ乗リテアユユヘノリト云ルベシ古書ニノリト  
云名ハ見エズハシリト云シ早走リト云ハ今世ニ云フカケノトシ古書ハ  
ハバレリトアリ盛衰記第四十二継信盛政孝養ノ条ニ黒キ馬  
ノキイサカリケルガ早走ノ逸物也トアリ又古キ騎書ニカケ足ト  
モ云又足ヲ出スルニ行列ニ乗ラ馬ヲ打ト云タリクハ非ス  
一齋東野人之語 孟子離婁上篇曰此非君子之言齋東野  
人之語也朱子註云齋東野國之東鄙也俗語ヲ齋東野  
人之語ト云出於此

一武士ノ領所鎌倉ノ代ニ幾町賜ルトイフ今ハ幾石ト云也然  
ル盛衰記第四十二屋嶋合戦ノ条ニ太胡小橋太ト云フ者海

ヲ潛リテ松浦太郎ガ舟ニ乗テ軍ノ下知スルヲ具足ヲ捕テ海中  
へ引キ入レ首ヲ取タルヲ後ニ世靜テ頼朝具切ヲ賞シテ千  
余石ノ勸賞ヲ給タルヨシ見ヘタリ此千余石ハ何ノ國ニテト云  
モ見エズ只千余石トアレバ國郡ヲ給リタルニハアラズ米穀ヲ千  
余石タラリシルベシ石ハ斛ノ一也鎌倉ノ代ニハ何ノ國ノ何ト云  
處ニテ幾町賜ルト云室所家ノ代又同シ信長秀吉ノ代ニハ何  
貫文ノ所ヲ賜ト云永樂錢ノツモリ也當御家ニテハ何千石何  
一石何百石ト云也米三十五斛ヲ百石トス  
一狐矢 <sup>キツチヤ</sup> 盛衰記第四十二屋嶋合戦奈須与一扇的ノ条ニ扇  
ヲバ射タレハ武者ヲハエズサレバ狐矢ニツツアレトイハシモ本意  
トケレバ只射ヨト云者多シ



一 鐵炮ノ字會曲ニ見ユ 千葉去之カ官職通鮮ニリ

一 柴ト云ハ木ノ名ニアラス柴ト云木ハナキ也字書ニ柴ハ薪也

ト註アリスベテ薪ニスギ雜木ヲ柴ト云猶ノ木ヲナラ柴ト云

推ノ木ヲシ井柴ト云白膠ノ木ヲフシ柴ト云スデハフシト云

物出来ルユヘフシ柴ト云フシハ五倍子也ヲハグニ入ルモノ也鷹

ノ鳥ヲ結付ル木ヲトシバト云鳥柴ト書也夕モコ柴ト云木也カ

シハノ葉ノ如クニテ小ク長シトアリ又梅櫻紅葉松ナトニ

鳥ヲ付ルヲモスベテ鳥柴ト云ナリ

一 宣命ノ詞ニ天皇カミミコ我ニ詔ミコトノラ麻止マド教ノチトアリミコトノラトイフハミコトノ

ラマクト云クノ字ヲ略セル也メクヲ約ヨクムレハムトナルハミコトノラムト

云ト也ウラノ反ハナリ ミコトノリハ御言鳴ミコトノリナルハニナトノト通音

一 御厨子棚ニ細ナル手道具ノミヲ置ニ限ラス衣服ヲモ食物ヲモ

置也置物ハ定タルナシ何ニテモ置ヘキ棚也新儀式云天皇奉賀

之御厨子各五基ニ註曰五基ハ納ハ夏冬御衣五基積雜

帛各五十疋又同篇云立立棚厨子四基置置威儀御膳又奉賀

太后御御厨子六基 納御衣等十二合夏御装束 五頁

一 威儀御膳ト云食用ニナラズ只只規式一通リノ御膳ヲ云也

一 長物新儀式奉賀天皇御筭筭篇云庭中東西相分分立長

物酒食又天皇奉賀上皇御筭筭篇云諸衛舍人持長物退

出出詩曰長物未御之前立流水東庭也召院司領給之貞

女按長物ハナガモノト云ベキ歟長持ナガテナルベシ物字モツノ音ナレド

モ古語ニツラギニカヨハシテ云フアリ長ハ訓ニテ物ハ音ニヨルハ



湯桶ヨシナレドモ古書ヨシユタウヨシニ文字ヲツカヒタルモクメシ  
右文長持ニ酒食ヲ納タルヲ給ルト聞ユ足アルヲ唐櫃ト  
云長キヲハ長唐櫃ト云足キヲ長持ト云常ノ長持ニ對シ  
テ唐トハ云フナルベシサレバ長持古ヨリアルベシ長持本名ハ長  
櫃ナルベシ足付タルハ長唐櫃也東鑑ニ中持アリ是中トハ不  
長不短ノ櫃ナルベシ

一母屋モヤ身屋モヤ母屋トハ本屋也庇ニ對シテ母屋ト云シ俗ニオモ  
ヤト云也新儀式ニ奉賀太后脚筭篇ニ身屋ト書レタリ  
是亦字ナルヘシトモ音相通ナルユヘモヤ云ナルベシ本屋ハ家ノ  
身ニテ庇廊ナドハ手足ノ如シ

一衣笠ココモ新儀式奉賀太后脚筭篇西邊ニ立同御厨子六基納御衣笠十二合夏御裝束

五夏冬御裝束合夏御調度等 ○廣基ト云物ハ此衣笠ノフタ也ト位記同卷ニ見タリ

衣笠ノ事源氏物語雅亮裝束抄等ニモ見ヘタリココモハコトヨム

一御厨子。棚厨子。此二品新儀式ニ見タリ只御厨子ト云フモ棚

アレ氏外ハ一面ニ開キ戸ノ扉アリテ棚ハ見エサルナルベシ棚厨子

ト云ハ開キ戸ノ扉ナクシテ棚ヲアラシ見ユルヤウニ作りタルヲ云

ハレベシ今世御厨子棚ト云ハ棚厨子ニ少ク開キ扉ヲ付タル所

アリ是ハ石ノ二品ヲ一ツニテ兼タルモノナリハ像ヲ入ル合龍ガ厨

子ト云モ御厨子ノ如ク開扉アルユヘ俗ニハ厨子ト云又古書

ニ二階厨子ト云フハ棚厨子ノ一ナルベシ

一朝臣 每位各官ノ人朝臣ヲ書ベカラスト云誤アリ誤也續日本

紀ニ天平宝字三年十二月丁丑授正六位上蜜山野外從五位



下五位藤原朝臣姉ニ後五位下ト見タリ此姉ト云人官モナカ  
リシニヤ官名モ見エズ是五位各官ニテ朝臣ヲ書ベキ證據  
ナリ

一臣シカ下史記卷八漢高祖本紀曰今臣下ヲ爭テ叛逆ニ臣下ト云  
詞俗語ニアラス

一十善帝位俗語也正史實錄曾ニ見エズ四十二章經云衆  
生以十事為惡身三口四意三身三者殺盜姪口四者兩舌惡罵  
妄言綺語意三者嫉恚癡大藏一覽報應  
呂詳出十事右十事ヲ十惡トス  
十惡トキヲ十善ト云フ又一説ニ十禪帝ト書ヘシト云内并説也  
右經文俗説無ニ引之

一尺字ノ訓日本紀ニ八尺ヲヤサカト訓ヲ付タリサカハ國訓ニハ

アヲジシヤク轉ジテサクトナリサク轉シテサカトナレ也

一咫字ノ訓日本紀ニ八咫ヲヤタト訓ヲ付タリタハ神代  
ミモノサシナト有ベカラズキノ指ノタテヲ以テ物ノ長短ヲハカルユヘ  
八寸ナレ咫ノ字ニ付テ西キ尺ノ定リ以テ尺スル説アリ非  
ナレベシ

一僧ノ字ノ訓日本紀ニ僧ノ字ニホウシト訓ヲ付タリ即チ法師  
ノ字音也國訓ニアラズ直ニソウトヨムヘシ字音ニテ直ニヨコズレテ  
別ニ法師ノ字音ヲ假ルハムワカシキヨコヤウナリ

一德ノ字ノ訓日本紀ニ德ノ字ニイキホヒト訓ヲ付タリニ脚ノ  
字イキホヒハ勢ノ字也德ヲ勢ト訓スルハ義叶ハズ若シ強テ  
訓ヲ付ベキナラバトリエト付ヘシトリ共取得シ凡万物各夫々ニ



生レツキタルトリエアリ其物ノ取得タルワガアリ鶏ハ晨ニ鳴キ犬  
ノ盗ヲ吠エ猫ノ鼠ヲ捕ル類皆其物ノトリエ也人ノトリエアリ皆  
其トリ得ハ即チ徳ハ心ノ惡ヲ去リ除テ身ノ行ヲ善ニシテ正シキ  
ヲ守ルハ禽獸ト異ナル所是人ノトリエ也即チ是徳ハ心ノ正シキ  
ノ授ルヲ取り得タルハ俗ニ云ハ其物々ノ得チヤリ禽獸ノ心ハ一偏  
ニシテ狭ナル故ニ其徳ヲ乱スヲナシ猫カ盗ヲ吠ルヲナリ犬カ鼠  
ヲ捕ルヲナシ人ノ心ハ一偏ニカタヨラス周クシテ一定ナルヲナク廣  
大ナルカ故ニ物ニ遷リ易クシテ物欲ニ引レテ其徳ヲ乱スヲア  
リ日本紀ノ訓ハ舍人親王ノ付クニヒシニハアラス後ノ人ノ付  
シ可成残ラス強テ訓ヨミニセントスル故ニコレリタル訓アリ  
一屯食トレシキトヨム是ニギリメシノ一也飯ヲ握リ固タル也屯ノ

字アツルトヨム飯ヲニギリアツタルハ屯食ノ一古書ニ多ク  
見タリ下賤ノ者トドニ給ル食ニ源氏物語トドニモ見ユ今モ  
公家ニテハニギリメシトドニキト云フ由ナリ

一料理ハカリヲカムトヨム何事ニテモトリハカラヒトリヲサカルヲ料理  
スルト云ハ食物ヲ調ヒテシノミ料理ト云ハ非ズ食物ヲ料理ス  
ルト云モ其食物ヲトリハカラヒ調ヘサカル也食物ヲ料理スルト  
云フ古例ハ新儀式第四行幸神泉苑覽競馬篇曰捕池魚  
於料理所備供御膳給侍衆トアリ居家必用ニ甘比弱ヲ制  
スルヲ以テ料理ト云ヘリ然レハ西ニテモ食物ヲ料理スルト云也  
凡何々ノ事ヲ料理スルト云事ナレハ食物ヲ料理スルト云詞モ  
アルキ一也後代ニハ只料理ノ二字ヲ以テ直ニ食物ノ事トス



ルハ誤ナリ古書ニハ何ノ事ヲ料理スルト云ナリ

一文臺 今用ルハ長二尺斗 廣一尺二寸斗 高三寸斗 有テ小キ

物也古ハ大ナル物ト見エ新儀式行幸朱雀院 石文人ヲ并

試擬文章生篇近衛次将二人昇<sup>カク</sup>文臺トアリ二人ニテ昇ク

ハ大ナルモノナルヘシ○貞丈云是即札<sup>ツミ</sup>トベシ又云文臺ノ文ノ字

スレテヨムガ宜キ歟フミ臺ト云フシ或説ニフシクイ文ノ字ヲ割

ニヨメバ湯桶ヨミテ惡シト云然レ共我國ニテハ朝廷ノ事ニ湯

桶ヨミ多シ御元服ヲオゲブクト云類ナリ。フシクイハフシクイ氏

云ベシ古言ノ拾ナリ

一御琴二張 右同書同篇ニ見タリ 今俗一面二面ト云

一胡床ト床机トハ別シ俗ニ胡床ヲ床机ト云ハ非也床机ノ角裏

儀式ニ見タリ床机ヲ床子ト云机ノ如ニテ四足アリ腰カクル物トシ

床机ト云胡床モ床子モ朝廷ニテ公事ノ時官人腰カケルモノニ

床子近喜木工寮式ニ寸尺アリ 此外ニ瓦子ト云物モアリ

一天下人ノ心惡心ニナリ惡事ヲスルハ天下貧窮ナルニ因ル也貧窮

ナレハ心樂シカラズ常ニ怒リ怨ル情アリテ唯利慾ノニ盛ニナリテ

是ヨリ父子君臣長幼夫婦朋友ノ道乱レテ此五倫相互ニ利ヲ

争フ情アリ如此ノ世ハ聖人アリトテモ其教ヲ受ケ用ル人ナシ故ニ

天下ヲ治ルハ先万民ヲ富シ天下ヲ豊ニスルヲ以テ第一ノ急務

トスルニ天下豊ニ万民富ハハ惡心ヲ生ズナリ怒リ怨ル情ナシ

如此ナレバトヒ教ストモ人倫ノ道自ラ立ベシ況ヤ教ヲ施サニ於

テラヤ乱世ト云フハ合戦アル世ヲ云フノニ非ス合戦ナクハ五倫



ノ道乱レタル世ヲ乱世ト云ハ五倫ノ道乱タル世ハ合戦ナシトモ  
治世ニアラス天下ノ貧乏窮ニ乏ハ天下ニ居タル人ノ利ヲ貪リテ  
天下万民ノ貨財ヲシメ上げシボリ取テニクセ出サズテ天下ノ  
貨財令シクナルガ故ニ是乱ノ基也天下ヲ治ルト云ハ廣大ナルマ  
ウニ聞クモ唯天下ノ万民ヲ豊ニ富シルノ事ヨリ外ハナシ既ニ  
富テ後ノ法度政令ハ時ノ宜ニ随フベキト也和漢往古ノ治乱  
ノ始リ其形勢サテニシテ同シカラズトイヘトモ其根本ヲ推  
シテ考レハ天下万民ヲ豊ニ富シルト貧乏窮セシルトノ二ツヨリ  
外ハナシ治政ノ末ハイツトモナリ漸ニ惡政ニ移リ行キ終ニ  
国家ヲ失フ也其惡政ニ移リ行ク所ノ機ヲ早ク見ツケテ治  
政ニ引返サバ国家長久ナルベシ治政トハ仁政也仁政ト天下万民

ヲ豊ニ富シル政也惡政トハ虐政ニ虐政ハ天下万民ヲ貧乏窮セシ  
ル也聖人ノ道ハ万民ヲ富スヲ以テ大本トスル也其外ノ事ハ一カ  
民既ニ富テ後ノ教也万民貧窮シテ惡心惡行セハ教ヲ施ト  
雖トモ受用エヘカラス

一 更衣 更衣ノ下ニモアリ 壺井弐知カ説ニ女官ノ更衣ハ續日本後紀兼和九年

正月三日天皇朝觀太上天皇及大皇太后宮於嵯峨院是日詔  
授後五位下秋篠朝臣康子正五位下每位山田宿禰道子後  
五位上並太上天皇更衣也凡更衣之号始ニ此時ニキルヘリ  
一人ノ生レツキニ大量アリ少量有リ大量トハ大量也其才知  
廣大ニシテ天下国家ノ廣大ナルトニ行キワタリテ大ヤウニシテ  
細小ノトニ拘ラズ是高官ニ昇セテ天下ノ政ヲ司トラシムヘキ



器量也小量ハ小器量也其才智狭小ニシテ大事ニ行ワタ  
ラス細小ノクニシテ拘ハル是下官ニ處テ小事ヲ司ムベキ器量  
也官職ヲ任スルニハ大量小量ヲ撰ベキ也其器量ニ當ラサル  
人ニ官職ヲ任スレバ改正シカラズ災害ノ基ナリ我朝上古ハ人  
ノ器量ヲ撰テ撰政 関白大臣ニ昇セラレシ故政事正シクシテ  
天下大平ナリシナリ中世ヨリ藤氏ノ撰政 関白ニ定メラレ  
シヨリ朝政乱レ衰ヘテ天下ヲハ武家ノ為メニ押集ハレシナリ  
一御ノ字ヲ付テ云フハ上古ハ天子ノ御事ニ限りタルナリ後ニ  
撰家ノ威強ク成リテ詔諛ノ人撰家ノ事ニモ御ノ字ヲ  
付テ云フヲニナリヌ其後ニ至テハ御ノ字輕クナリテ相互ニ  
敬フニハ御ノ字ヲ付ルニナリシ也御ノ字ヲオラントヨムハ大ノ

字ノ義也天子ノ御事ナルユヘオホヒルト云フ意ナリ又オントヨ  
ムハオホシノ略也又オトヨムハオシノ略也又御ノ字ニトヨムハイミ  
ノ略ナルベシイミハ忌ノ字又斎ノ字ニテ穢ヲイミ憚ルノ意  
ナルヘシ神ノ事ニ忌ノ字斎ノ字ヲ付ルト同意ナリ  
一神ノ事ニ忌何ト云斎何ト云校威ト云ト右ニ云フ如ク人ノ事  
ニ御ノ字付ルト同意也又天ノ何ト云モ天ハ高キモノナレハ敬フ  
詞也或高何ト云トモアリ同意也又盤何ト云トモアリ盤ハ堅  
固ニシテ易ラサルモノナレバ祝シテ云詞ナリ斎庫<sub>忌</sub>天逆<sub>忌</sub>牙  
校威高靴盤靴ノ類推テ考ヘシ  
一更衣<sub>更衣ノ上ニモアリ</sub> 河海抄曰仁明天皇兼和三年正五位上紀朝臣乙集授  
後四位下為更衣○此乙集ト云名男ノ如ク聞レトモ男ニアラズ



女ノ名也續日本後紀曰仁明天皇兼和三年八月丁巳正五位上  
記朝臣乙奥授後四位下栢原天皇女御也○此時更衣ト  
スルハ見エズ○同紀飯高宿禰永<sup>ナガ</sup>刀自<sup>ミ</sup>又高<sup>タカ</sup>繼後四位下<sup>ミ</sup>和  
朝臣緒繼等ノ名アリ男ノ名ニ似タレ氏女ノ名ナリ

一癩病ヲカタ井ト云又乞<sup>イ</sup>巧人ヲカタ井ト云古ノ詞ナリ乞<sup>イ</sup>巧人  
ヲカタ井ト云ハ癩病病ム者ハ人ニ捨ラレテ乞<sup>イ</sup>巧人トナリテ道  
ノ旁ニ居ルユヘカタ井ト云也契沖カ和字正濫抄ニ書ケリ是誤  
乞<sup>イ</sup>巧シハカタ井ト井ノカナヲ用ベシ癩病ヲハカタイトイノカナ  
ヲ用シ癩風ヲ害大風ト云テ證治要訣ニ見タリカタイトイノ害  
大ノ事シ俗ニカツタイト云モ害大ナリ

一マブニモカウノ物ト云謗古キ事也十訓抄ニ二条殿ヨリ南京極

ヨリハ東ハ管三番ノ亭也三位ウセテ後年比ヘテ目ノアカキ  
夜サルベギ人ニ古キアトシシノビテカシコニアツリテ月ヲモテア  
ソブ<sup>ソ</sup>アリケリ。スハ<sup>ス</sup>リ方ニ或人月ノボル古尺樓ト誦シケル人々声ヲ  
加ヘテタビクニナルニアバレタル中ノカクレタル蓬ノ中ニ老老尼ノヨ  
ニアヤシゲタルガ露ニソボキ、終夜間ヲリケルカ今夜ノ御遊イト  
ノ、メテタクテ涙モトナリ侍ラヌニ此詩コソ及バヌ耳ニモ僻<sup>ヒ</sup>又  
ヲ詠シオハシニス<sup>ス</sup>トキ、侍レトイフ人ニワラヒテ與アル尼カナ  
イウクノワロキカトイヘハサウナリサブオボスラシサレト思タスハ月ハ  
ナジカハ構ニハノボルベキ月ニハノボルトゾ故三位殿ハ詠シ玉ヒシラノ  
ハ御物ハリニテオノヅカラ兼シト云ヒケレハ耻テ皆立ニケリ是  
ハス、ミテ人ヲアナヅルニハアラ子氏思<sup>シ</sup>又外ノ一ナリコレヲニテニ



心スベキニヤ 教ニハカウノ物トイハル見女士ガツトヘム子ヲタガヘガ  
リケリ○又同書ニ伏見修理大夫俊綱播磨ヘクタリケルガ高  
砂ニシテ各歌ヨム大宮先生定ト云者ノ奇ニ

我ノミト思ヒコシカト高砂ノオノノ松モニタ立リケリ  
人多感シアヘリ良選其取ニアリテ專牛ニ腹ワカレヌルワサカ  
ナトゾイヒケルトアリカヤウノ世俗ノ誘モ古ヨリ云傳タルナリ  
一馬ノトラゲト云モノ名上古ノ書ニ見タリトラゲハ虎毛也馬  
ニトラゲト云ハ今連錢ト云モハ虎ハ班毛ナル工ヘ馬ノ連錢ハ  
カラナル工ヘ夫ヲ虎文ニ准ラトラゲト名ツケタルナリ  
一夜服ノ文ニヒマウモント云フ古書ニアリ文ヲ三四色ニモ色々  
サニクノ色ニイロトリタルヲ云ハ豹ノ皮ハ一ダラエル工ヘ夫ニ

准テ云シ

一頼政射鶴ヲエ 十訓抄第十二云高倉院御時御殿ノ上ヲエ

ノ鳴ケルヲアシキ事トテイカハスベキト云古又ニテ有ケルヲ或  
人頼政ニ射サセラルベキ由申ケレバサリナントテ召レテ矢ヲリ  
ニケリ此由ヲ仰付ラルニ畏テ宣旨ヲ兼リテ心中ニ思ヒケ  
ルハ唇ニタニモ午ヒサキ鳥ナレバ得カタキヲ五月ノ空闇深ク  
而サヘフリテイフハカリナシ我既ニ弓箭ノ真加ワキニケリト思テ  
ハ幡大茨ヲ念シ奉リテ声ヲ尋子ナテ矢ヲ放ツコトフルヤウニ  
首見エケレハヨリテ見ルニアマタズアタリニケリ天気がヨリ始テ  
人ニ感歎云ハカリナシ後徳大寺左大臣其時中納言ニテ  
祿ヲカケラレケルニカリナシ



カナ 頼政トリヘズ 弓ハリ月ノイルニカセテ ト付タリ  
ケルイミヒカリケリトガリ出テ後ニ昔ハ養由雲外ニ射雁  
今頼政兩中ニ得レ鶴トノ感セラレケル頼政其養由外ニ  
征夫ヲ取具シテ持タリケルヲ後ニ人ノ同ケレバモシ不覺  
カキタラバ申行ヒタリシ人ヲゾ射ニガタメ也トゾ答ヘケル  
○貞夫云頼政カ鶴ヲ射シ事ハ十割折ノ説ヲ以テ正説  
トスヘシ是周夜ニ小鳥ヲ射タルヲ賞セラレシナリ平家物語  
源平盛衰記ニハ鶴ヲ以テ妖怪トス是虚説也狂言ト云ツ  
ヘシ愚俗ハ奇怪ヲ好ムエ平家物語盛衰記ノ説ヲ悦ブ  
一愚癡ナル人ハ道理ヲ弁スルナシ道理ヲ云ヒキカセテモ受  
ルナシ只物慾ノニ深クテ慾ニ弊レテ其智暗<sup>暗</sup>シ天竺国ハ

西ノ方ニ片寄テ天地ノ間ノ片一方ニ在ル国ナル故其偏氣ヲ受テ  
人民ノ性甚愚癡ニテ物慾深ク故逸無慙ナル風俗ニテ表  
ムキヨリ道理ヲ説テ教タリ在少モ受ケ用ニシキ事ヲ釈迦仏  
ハ能ク悟リ知テ道理ヲ捨テ云ハスカノ人民ノ慾心ニ付今テ勸  
メコトヲ考ヘ出シテ極樂地獄ノ説ヲ作テ教ヲ立テ法ヲ説  
タル也成仏ヲ好ムモ慾也地獄ヲ恐ルモ慾也是其慾心ニ  
付テ道引ク也是ヲ方便ト云ニ異朝ニテハ梁武帝本朝ニテ  
ハ聖武帝貴キ事天子ニ如クハナシ富ル事天子ニ如クハナシ  
人間世界此上ニ願フベキナシ然ルニ死シテ後極樂國ニ生シ  
テ成仏センコトヲ願フハ慾也仏經ニ説キタレバトテ目ニモ見エヌ  
夏ヲ願ヒ目ニモ見エヌ夏ヲ恐ルハ慾ニクテサレテ送フ是



大愚大慾ノ人也天子ノ富貴ノ身スヲ猶シカリ況ヤ其下ノ  
ル人民ヲヤ天下ニ思人ハ多ク賢人ハ少シ故ニ仏法ハ天下ニ弘ク  
行ルニ仏法ハ天竺國ノ人ヲ道引キ教ヘ為ニ設タルヘシ  
唐日本人迄ヲ迷ハサントハ釈迦仏ハ思ハサリシタルヘシ釈迦ノ  
説ハサノニ深キ事ニアルニ後人尊信スルニヨリテ高上深  
厚ノ説ヲ作爲シタルヘシ梵字ノ仏經ヲ漢字ニ翻譯スル時ニ  
直ニ翻譯シタリマ吾ヤ疑ナキニアラズ凡諸宗ト云モノ、其宗  
ノ祖師ノ好ム所ヲ執テ其趣ヲ主張シタルヘシ一偏ニ片寄  
ルハ釈迦ノ本意ニハアルベカラズ仏者ノ詞ニ迷フト云ヒ悟ルニ  
有然レモ 仏法ヲ信スルニ迷ヒ理ヲ明メテ仏法ヲ信セサルハ悟  
也

一 小笠原信濃守源貞宗月山ト号ス又開禪寺ト称ス後醍醐  
天皇ノ時ノ人也此人唐僧清拙ト云者ト誤シテ諸礼ヲ定メタ  
ル由寛永系圖見タリ此定名諸礼小笠原自家ノ礼法ナルヘシ  
天下ノ礼法ニハアラザルベシ貞宗其時將軍ニ非ス天下ノ武士  
ハ礼法ヲ定ムヘキ道理ナシ貞宗大名ナリシ故我家ノ礼法ヲ  
定メシタルベシ

一 小池甚之丞貞成ト云者アリ小笠原長時同貞慶ニ仕タリ天正  
文祿ノ比ノ人也功勞有ガ故ニ貞慶家傳ノ書ヲ以テ貞成ニ授  
ク後貞成小笠原右近大夫忠政ニ仕ヘタリ彼家傳書ハ先祖小  
笠原貞宗カ唐僧清拙ト誤シテ定メシ諸礼ノ書ナルベシ貞  
成ニ後テ諸礼ヲ學ブ者多シ其門弟ニ斎藤三郎左衛門



久也ト云者アリ久也カ門弟ニ水島傳左衛門元也ト云者アリ  
元也又後ニ上原八左衛門ト云者ニ後テ同流ヲ学ヒタリ天和  
元年辛酉十月十五日甲子 常憲院殿ノ若君徳松君御髮  
置ノ御祝アリ 台傘ヲ奉テ堀田對馬守紀正英御白髮ヲ  
献上セリ其御白髮ヲハ正英水島元也ニ制作サセタリ  
若君ノ御白髮ヲ水嶋制作シタルニ依テ其名高クナリテ門  
弟甚多ク其流至世ニ弘ミテ水嶋後ニ入道シテ名ヲト也ト  
多スト也カノ門弟所ニ多クシテ彼流系ヲ教ヘ傳フ其流  
系傳書ニ兩名事ヲハ多ノ門弟各私意ヲ以テ新ニ作り  
出シテ其門弟ニ傳フ其門弟モ又新作妄説ヲ造テ門弟ニ  
傳フ如此ル故妄説世上ニ多ク弘ミテ其傳書ヲ見ルニ古代

曾テナキ莫ク故実也トテ記シ又小ノ事ニ秘傳多シ其傳書ヲ  
見其秘傳ヲ聞ニ腹ヲ捧テ笑フベキ事ノミ也學者ノ賤ズル  
所也カノ水島本ト其癖アリシ故末流ニ至テモ其癖ヲ受  
継シ也諸礼ト云号ハ諸ノ礼ト云フナリ凡諸道ニハソレクノ家  
アリ其事々ニ付テソレクノ礼法アリ一家ニテ諸道ノ礼ハ知り  
難シサレハカノ水嶋カ諸礼ハ其道々其家々ノ礼ニ違タル多  
シ其違タルハ何故ソト云フニ毎作シタルガ故ニ世間文盲ナル人  
長ク信用スル故也世ニハヤリテ是ヲ学テ渡世ノ業トスル者多ク  
慨クヘシ

一白馬節會奏 康富記 嘉吉四年正月  
右馬寮謹奏



合白馬壹拾壹疋

頭下部朝臣兼雅

貢葦毛

權頭源朝臣氏尚

貢葦毛

權助

頭上部朝臣兼敏

貢葦毛

權頭源朝臣氏尚

貢葦毛

權助

頭下部朝臣兼敏

貢葦毛

權頭源朝臣氏尚

貢葦毛

助

權助

右依例如件謹奏

嘉吉四年正月七日

正五位下行權頭源朝臣氏尚

從五位下頭下部朝臣兼敏

御監正一位行權大納言兼右近衛大將藤原朝臣 實熙

此右馬奏左馬寮之書樣各別也雖舊本見猶尋甲請外兄弟之間返報如此仍書類遺之

一裝束夏冬上玄夏 禁秘抄恒例每日次第之篇云著御

引直衣

自四月一日至九月晦日夏也  
自十月一日至三月晦日冬也

一古事記曰伊豫入道賴朝者自壯年之時每有慙愧心以殺生為業况十二年征戰之間殺人罪不可勝計因果之所為



不可免<sup>レ</sup>地獄之業也。雖然、出家道世之後、建堂<sup>ヲ</sup>造<sup>ル</sup>、  
減罪<sup>ヲ</sup>生善<sup>ヲ</sup>、猛利<sup>ノ</sup>獨焉也。於<sup>テ</sup>件堂、悔過<sup>シ</sup>悲泣<sup>シ</sup>之淚、自<sup>レ</sup>板敷  
縁<sup>ニ</sup>傳<sup>ヒ</sup>流<sup>レ</sup>シ<sup>テ</sup>、地<sup>ニ</sup>落<sup>ケ</sup>リ<sup>ニ</sup>云<sup>ハ</sup>。○貞丈、按<sup>テ</sup>賴<sup>美</sup>、曾<sup>レ</sup>將<sup>ト</sup>似<sup>テ</sup>  
勇<sup>ノ</sup>將<sup>ト</sup>、非<sup>ズ</sup>目<sup>ノ</sup>見<sup>ル</sup>所<sup>ノ</sup>敵<sup>ト</sup>、賊<sup>ヲ</sup>怖<sup>レ</sup>シ<sup>テ</sup>、目<sup>ノ</sup>見<sup>ザ</sup>ル<sup>地獄</sup>ヲ怖<sup>レ</sup>  
シ<sup>テ</sup>、出家<sup>シ</sup>堂<sup>ヲ</sup>立<sup>テ</sup>、悲泣<sup>シ</sup>之淚<sup>ヲ</sup>、板敷<sup>ヨリ</sup>漏<sup>レ</sup>シ<sup>テ</sup>、地<sup>ニ</sup>落<sup>ル</sup>ニ<sup>テ</sup>流<sup>レ</sup>  
シ<sup>タル</sup>ハ、地獄<sup>ヲ</sup>怖<sup>ル</sup>、<sup>ト</sup>ノ甚<sup>シ</sup>シ<sup>レ</sup>バ、嗚呼<sup>ト</sup>賴<sup>美</sup>、何<sup>レ</sup>夫<sup>ノ</sup>愚<sup>ナ</sup>乎<sup>ナ</sup>。  
何<sup>レ</sup>夫<sup>ノ</sup>怯<sup>カ</sup>、又<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>獨<sup>リ</sup>賴<sup>美</sup>、有<sup>リ</sup>其<sup>レ</sup>他<sup>ノ</sup>勇<sup>ノ</sup>將<sup>ト</sup>、猛<sup>士</sup>同<sup>ク</sup>之<sup>者</sup>、噫<sup>ト</sup>更<sup>ニ</sup>歎<sup>ム</sup>、  
法<sup>之</sup>大<sup>ニ</sup>毒<sup>ニ</sup>徹<sup>ス</sup>、干<sup>ス</sup>愚<sup>人</sup>之<sup>骨</sup>髓<sup>ニ</sup>、列<sup>シ</sup>於<sup>ニ</sup>砒<sup>鳩</sup>哉<sup>ナ</sup>。

一大嘗會ノ御冠 古事記云大嘗會之時代、合着給<sup>フ</sup>玉冠、應  
神天皇之御冠也。相具<sup>ル</sup>御<sup>レ</sup>礼<sup>服</sup> 在<sup>リ</sup>河<sup>内</sup>藏<sup>所</sup> 後三奈院御頭ニテ、タクアハセ給<sup>リ</sup>  
ケル。此事ヲツ子ニ、周自<sup>レ</sup>辯<sup>ス</sup>、貞丈云古ハ大嘗會ニ玉冠<sup>ヲ</sup>礼<sup>服</sup>ヲ着

御シタ<sup>リ</sup>ヒシ<sup>シ</sup>知<sup>ベ</sup>シ

一先例 古事記曰賢子中宮者<sup>白川院</sup>寵愛<sup>異</sup>他<sup>之</sup>故<sup>於</sup>禁  
裏<sup>ニ</sup>薨<sup>シ</sup>給<sup>也</sup>。雖<sup>レ</sup>為<sup>シ</sup>御<sup>レ</sup>腦<sup>危</sup>急<sup>不</sup>被<sup>レ</sup>許<sup>テ</sup>退出<sup>也</sup>。閉眼<sup>時</sup>猶<sup>レ</sup>抱<sup>シ</sup>御<sup>レ</sup>  
殿<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>令<sup>テ</sup>起<sup>シ</sup>辭<sup>給</sup>也。干<sup>ス</sup>時俊明卿參<sup>入</sup>申<sup>云</sup>帝<sup>者</sup>葬<sup>遣</sup>之<sup>例</sup>未<sup>レ</sup>曾<sup>レ</sup>有<sup>リ</sup>  
候<sup>早</sup>可有<sup>リ</sup>行<sup>幸</sup>之<sup>仰</sup>云<sup>例</sup>自<sup>レ</sup>此<sup>コ</sup>ノ<sup>ハ</sup>始<sup>ラ</sup>メ<sup>云</sup>。貞丈云凡<sup>レ</sup>例<sup>必</sup>其<sup>レ</sup>例<sup>ノ</sup>  
始<sup>メ</sup>ナ<sup>キ</sup>ハ<sup>ナ</sup>シ<sup>白川院</sup>ノ<sup>仰</sup>ハ<sup>尤</sup>理<sup>ナ</sup>リ<sup>凡</sup>先<sup>例</sup>ヲ<sup>用</sup>ル<sup>ト</sup>ハ<sup>時</sup>ニ<sup>ヨ</sup>リ  
事<sup>ニ</sup>ヨ<sup>リ</sup>ベ<sup>シ</sup>後<sup>代</sup>ノ<sup>事</sup>ハ<sup>前</sup>代<sup>ト</sup>同<sup>シ</sup>キ<sup>事</sup>出<sup>来</sup>ガ<sup>ル</sup>モ<sup>ノ</sup>一<sup>概</sup>先<sup>例</sup>ニ  
拘<sup>レ</sup>ハ<sup>事</sup>ノ<sup>害</sup>アル<sup>事</sup>アリ<sup>猥</sup>先<sup>例</sup>ヲ<sup>尋</sup>ル<sup>ハ</sup>其<sup>レ</sup>事<sup>ヲ</sup>行<sup>フ</sup>人<sup>ノ</sup>臨<sup>機</sup>忘<sup>ル</sup>  
變<sup>ノ</sup>智<sup>ナ</sup>リ<sup>事</sup>情<sup>ニ</sup>違<sup>セ</sup>サ<sup>ル</sup>不<sup>オ</sup>ノ<sup>人</sup>ノ<sup>ス</sup>ル<sup>ト</sup>シ<sup>又</sup>先<sup>例</sup>ヲ<sup>用</sup>ヒ<sup>ズ</sup>シ<sup>テ</sup>  
每<sup>行</sup>ナ<sup>リ</sup>モ<sup>有</sup>ベ<sup>シ</sup>一<sup>隅</sup>寄<sup>ル</sup>ベ<sup>カ</sup>ラ<sup>ズ</sup>。

一誓文状ニ伊豆箱根三嶋大明神ヲ書<sup>キ</sup>在<sup>リ</sup>貞永式目ノ起<sup>請</sup>



文ニ惣日本國中六十余列大小神祇殊ニ伊豆管根西所權現三  
嶋大明神八幡大菩薩天満自在天神部類眷屬神討冥討  
各可罷蒙者也トアルヨホニテ書ク也是ハ鎌倉ニテ貞永元年  
北条泰時カ評定所ニテ理非決断ノ為ニ貞永式目ノ書ヲ撰テ  
評定裁断ニ私曲スニヒキト云誓文也伊豆箱根三島明神鶴  
岡八幡在柄天神等ハ皆鎌倉近邊ノ神社ナ故此等ノ神名  
ヲ舉テ誓文也他國ニテハ其國中ノ神ニ誓フベキ事也然レ  
氏今 徳川ノ御家ニテハ武藏國ノ神ヲバ用ラレズシテ伊豆箱  
根三島三社ノ神名ヲ誓文ニ用ヒタマヘリ子細アルトナルベレ  
其意味ハ知ラズ正慶兼明記ト云書ニ云兼應二年癸巳五月  
十九日豆加三島大明神御造管奉行被仰付荒尾平節大

河内善兵衛西人也抑此社御造管ノ地ト成ル事ノ由ヲ尋ル処  
先年彼社ノ神<sup>主</sup>在江戶ノ御造管ノ事訴訟ス於評定所松  
平伊豆守阿部豊後守連座之節神主訴訟罷出申上  
今天下ニ伊豆箱根西社三島大明神ハ往古右大将頼朝卿ヨリ  
御尊崇異<sup>ナ</sup>他<sup>ニ</sup>就中右大臣実朝公ノ御治世ヨリ天下大事ノ  
御穿鑿<sup>シ</sup>證人ニ立セ給フヨリ以來 御當家 東照宮様  
台徳院様 大猷院様 御三代共ニ三社ヲ以テ證人ト被遊候然レ  
所ニ西社權現ノ御奉公ハ其功立テ為御造管地三嶋明神斗  
其功空ク被為捨候事奉<sup>ニ</sup>歎<sup>入</sup>五由<sup>ヨ</sup>申上<sup>レ</sup>伊豆守<sup>ハ</sup>笈<sup>テ</sup>  
三社ノ御奉公ハ何ゾヤ神主答申上<sup>レ</sup>今天下諸奉行諸役  
人私曲ヲ存<sup>ニ</sup>ヒキ由ニテ誓詞ニ被仰付候時平泰時朝臣



ノ式目ノ例ニ後テ刑文ニ日本六十余州大小神社殊伊豆管根西  
所權現三島大明神ト被成候然ルニ兩社權現ハ御造管ノ地ト  
成候ハ凡三島ハ其功不達瘡社ト罷成候ニ付奉願之旨香細  
ニ演ル豊後守被申ハ其方願之段非其理追而各相許之上  
ニテ可達 上聞之条可退出ト也神主悦テ退出ス依之此度  
御造管被仰出之永ク御造管ノ地ト成ル誠ニ神主カ働詞最  
才智ノ至哉ト世人感シテアリ

一 弘ノ字ノ音漢音ニテハコウ 吳音ニテハグトヨム 仏經ヲハスベテ吳音  
ニヨロフヤレハ弘法大師モグウ大師ト称スベキヲナルニヨロバフ大  
師ト称スルハイカナル故ニカ

一 響ノ字ヲクツワトヨム 和名抄ニ響久豆和都良俗ニ云久都

和トアルニ依テナリ 和名抄ニ云フ所ノ久都和ヲ以テ今世馬ノクキ  
ニハルクワハノ事トスルハ誤也久都和都良ト云ハクキワキツナト  
云フノ略語ニウハツナ也ナトラト音相通也ツラスクト云ヲツナヌ  
ク氏云オモツナト云ヲオモツラト云同例也クワツラト云ハクキワキツ  
ナト云フ事ニテ今世手綱ト云物ノ事ナリ俗云久都和ト云クワツ  
ラト云フヲ略シテクツワト云ヒシト云フニ然レハ和名抄ヲ書名時  
代ニ俗ニクワツト云ミ物ハクワツワラノ略語ニテ即今世ノ手綱ノ  
事ニテ今世馬ノクキニハルクワハノ事ニアラザルナリ又和名抄ニ鏡  
久都波美俗ニ云久美トアリ久都波美ト云ハ馬ノクキニハノ  
ルト云フニテ今世クワハト云物ノ事ニツナト音相通也ミトメト音  
相通ナル故クキハメヲクワバミト云也俗云久美トハクワバミノ事



ヲ俗ニハクミト云ヒシト也クハミトハフクミト云リシフトク音相通  
ナレ故フクミト云フヲ久々美ト云馬ノクキニフクメル物ナレバ其今  
世クハト云物ノ事也古クハト云シ物ト今クハト云物ハ別ナリ  
一古ヨリカナツカヒノ書多シ何レノ書ニモ馬ノクキニハメル鉄物ヲク  
ハトハノカナヲ用ユヘシ馬ノクキノ輪ナルユヘ也ト云ハ古人皆誤ル  
也前ニ云ルク古代ハ馬ノクキニハメル鉄物ヲハクワバミト云シ也今  
畧シテクワハト云フ也クワバミノ畧語ナレバクワハトハノカナヲ用ユ  
キ也ハノカナハ悪シ今世ノクワハノ形尤キ輪アルエハ其形場ハ  
リテクキノ輪ト云フシト思誤テハノカナヲ用ユベシト云甚誤  
也上古ハ九ニ十文字ノクワハノナカリシ又和名抄ニ久豆和都  
良俗ニ云久都和ト云ヘル此久都和ニハクワハトハノカナヲ用ベシ

クキハキツナノ畧ナレバハノカナヲ用ベキ也此クワハトクワハトノカ  
ナノ差別ハ数品ノカナツカヒノ書共ニイダズ兵ザルシ契沖ガ  
和字正濫抄貝原篤信ガ和字解等ニモハトハノ差別ヲ誤  
リ軍器考ニモ鑣銜ヲ久都和トハノカナヲ用タリ新井筑後  
守モハトハノ差別ヲウキヘガリシ也揖取魚彦ガ古言抄ニモ  
クワハトクワハトヲラヲ筆タレノミニテハトハノ差別ヲ云ズ是等ノ  
学者ノ書ガニモ皆然リ況ヤ定家ノカナツカヒ以下ノ俗書  
ヲヤ此ヲ始テ明ニ兵シ得タル者ハ貞丈一人也  
一侍讀ト云ハ天子ノ文学ノ師也君前ニ侍リテ讀書ヲ教ヘ奉ル  
故侍讀ト云也後ニ轉シテ伶人樂曲ヲ天子ニ教ヘ奉ル者ヲ  
モ侍讀ト云ハ法ヲ天子ニ教ヘ奉ル僧ヲモ侍讀トイフニ



ナレリ是等ハ文字ノ侍讀ニ准シテ云ナリナレバ侍讀ノ号ハ  
都テ天子ノ師ト云ノ總稱ノ如クニナレリ

一天主教 蠻語ニキリスチヤント云。此方ニテ吉利支丹ト書

ク將軍家御名 綱吉公 吉ノ字ヲ諱<sup>イ</sup>テ後ニ切支丹ト書ク

ナリ又ゲイウスト云ハ彼キリスチヤンノ宗門ノ本尊ノ名也

ハ是ヲ譯シテ天主ト云フト或人ノ説也。バテレシ。イルミ。ナド

云ハカノ宗門ヲ弘メントテ我國ニ渡リ来ル蠻人ノ名也。上圖傳

フ天主教ノ事。唐本ノ五雜俎ニ見タリト云。此國ニテ刻ル

本ニナレ制禁ノ事ナレ故天主ノ事ヲ載タレ<sup>レ</sup>也





